
危機

勝目博

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

危機

【Nコード】

N2654D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

急に流れるアナウンサーの声。「日本がなくなります」その、発表を皮切りに、日本各地で、暴動が起こり始めた。久しぶりに表に出た、主人公輝が見たものは・・・。

危機の始まり

危機の始まり

—

港の倉庫街を走る一つの影、その影を追いかけるもう一つの影。遠くには、赤や黄色の光が幻想的に輝いていた。逃げる影は行き場を失い、壁際まで追い詰められた。追いかけていた影はゆっくりと、しかし確実にその影に近づいて行った。

「もう、逃げられないぞ、諦めろ」画面は、整った顔立ちの若い男の顔のアップに変わった。行き場を失ったもう一人の男は、懷から包丁を抜き出し身構え、唾を吐き出し大声で叫んだ。

「捕まつてたまるか、てめえも殺してやる」男は肩で大きく息を吐きだした。男の眼は血走り、体全体が小さく震えていた。やがて意味不明の言葉を発しながら、追いかけてきた男に跳びかかる走り出した。しかし次の瞬間、画面は見慣れたアナウンサーの、緊張した顔を映し出した。

「緊急ニュースです。緊急臨時ニュースを伝えます。大変な事になりました。日本が、日本の国が無くなります。日本はアメリカに売り渡されました。日本がなくなります。繰り返し伝えます。日本が……」

見慣れたアナウンサーはうつむき、その声は途切れてしまった。画面は肩を震わす男の姿を静かに映し続けていた。そして突然、アナウンサー我を取り戻したように、いつもの声が流れてきた。

「尚、政府の人間の所在は今のところ掴めていません。一部の情報筋によれば、国外に逃亡したものと見られています。繰り返し伝えます……」必死に伝えようとするアナウンサーの声は、かすかに震えていた。

国の借金が天文学的数字にまで跳ね上がっていたのは、既に周知の

事実であつたが、まさか国を売り渡すまでとは、国民の誰が予想しただろうか。呆然とテレビを見ていた男の耳にアナウンサーの声が戻ってきた。

「日本は、来る新年と共に一つの州としてアメリカに組みこまれ、以後アメリカ政府の指揮下に置かれる予定であります。アメリカ政府の声明では、国民の皆さんに心配はまったく無いとの事ですが、ある程度の混乱は予想されます。冷静に行動するよう呼びかけると共に、全面的に協力するようにと、通達が届いております」二十一世紀に入って間もない年の十二月、特に寒い夜だった。

その日、国会議事堂の前には、幾重にも人垣が作られ、口々に何やら叫んでいた。国内全ての機関は麻痺し、生命維持ラインまでもがストップしていた。エネルギー関係から交通機関、治安維持機関までもが完全に停止していた。その証拠に制服姿の警官や、消防士までもが人垣に紛れていた。不意に一人の警官と派手な服装の青年とが、殴り合いの喧嘩をはじめた。数人が喧嘩に加わり小さな乱闘となったが、その騒ぎも一発の銃声で中断された。しばらくして胸から血を流した派手な服の青年が、数人に担がれ人垣から出てきた。青年はそのまま人垣のそとに放置された。警官は何事も無かったように、拳銃を握ったまま議事堂に向かい叫び始めた。その声を発端に人垣は怒鳴り声の大合唱へと変わっていったが、議事堂は静かに佇んで人々を見つめているだけだった。

長田 輝も不安にかられ、議事堂前までやってきた一人だった。しかし、一部始終を見ていた輝は、全身に寒気を覚え、小さく首を振りながら青山通りに向かい歩き始めた。

「こんな事になっているとは……」目にした光景を思い出し、輝は嗚咽を覚えた。無精ひげを撫でてジャンパーの襟を立て、内ポケットからタバコの箱を取り出して中身を確認すると、輝は小さなため息をひとつついた。

「タバコは手に入るのかな」と他愛も無い不安がよぎった。一本を口にくわえてライターを探していると、鋭い視線を感じゆっくりと

振り向いた。四十後半と思われる目の座った男が、じつと輝を見つめていた。初めは気が付かなかったが、男の興味はどうやらタバコにあるらしい。しかしどちらかと言えば、輝もヘビースモーカーの部類に入る。こんな状態ではこの先いつ手に入るか判らない貴重なタバコを、見ず知らずの男に分け与える気も無かった。

不意にガードレールに座っていた四十後半の男が立ち上がり、ゆっくりと輝に向かって歩き出した。輝は長身でスラリと手足が伸びてはいたが、けっして体格が良いとはいえなかった。自分自身では肉体派とは思ってなく、今までも喧嘩とは極力避けて通ってきた。仕方なしに口にくわえたタバコを右手に握り締めると、輝は足早にその場を立ち去った。

「タバコ一本で喧嘩にでもなったら馬鹿馬鹿しい」と輝は小さく呟いた。

青山通りは閑散としていた。車は一台も走っていないかった。代わりにガス欠で乗り捨てられたのか、車道のあちらこちらにドアを開け放った車が放置されていた。時々怒鳴るような声が聞こえてきたが、見渡す限りでは人影は見られなかった。渋谷方面にしばらく歩くと、一軒の商店が見え始めた。タバコの文字が書かれた看板が、歩道にせり出していた。足早に近づくと、ジュースの販売機とタバコの販売機だったが、既に壊され、ただの大きな箱と変わっていた。商店のシャッターもこじ開けられた痕が生々しく、覗いた店内は荒らされ放題だった。

青山一丁目の信号が見える頃には、周辺のショップは更に悲惨な姿をさらしていた。ウインドーのガラスは粉々に飛び散り、商品棚は床に崩れ落ち、商品という名のものは皆無であった。輝が例のニユースを見てから僅か三日後の事だった。

輝は大学で将来の夢を見つけれなかった。経済学と世界史を専攻したが、輝にとっては何のメリットも見出せなかった。結局、卒業しても職を転々と変えていた。そんな時、無類の映画好きの輝は、面白くもない映画を見てがっくりした帰り道、ふと、自分で作れと

思い、急いで筆を手にした。作ると言っても映画の監督でなく、輝は原作の方に興味を持った。はたして筆はどんな進み、三日三晩書き続け、長編のSF小説が書きあがった。ただ、書くには書いたが、自分の実力は見当も付かなかった。そこで文学部にいた友人に試読してもらった。友人も今では有名出版社で編集の仕事をしていたが、思った以上に評価は散々だった。しかし輝はあきらめなかった。書き直しに半年以上費やし、やっと友人の評価が上がって来たが、友人からは冷たく「あきらめな」と突き放された。その後も何度も書き直し、また何件も出版社をまわり、ようやく興味を持たれ出版までこぎ着けた。小説家に早咲きも遅咲きもないが、その時、既に三十に手が届いていた。それから数年、今では小説家としてどうにか生活できるくらいになった輝は、ニュースが気にはなったがあまり深刻に捉えずに、心配無いとの言葉を信じ、書きかけの小説に没頭していた。何かに没頭するのは、輝の得意技だった。しかし前日の昼頃から電気が止まり、水道も止まってしまった。寒く暗い夜を迎えた輝は、虎ノ門のマンションから歩いてきた。マンションの周りは、普段でも都会には珍しく静かな住宅地だったが、今日は静かというよりも不気味な静寂に包まれていた。商店はシャッターを下ろし、車も走っていないが、商業地よりはマシだった。それほどまでにここは完全に破壊されていた。

遠くで数台のバイクの音が聞こえたと思うと、何処かで悲鳴にも似た声が聞こえてきた。

しかしほかの人間はどうしたのだろうか、議事堂で見かけた人や、眼の座った四十後半の人以外に輝はまだ誰も見かけていなかった。ふと殺された青年の姿が脳裏に浮かんできた。

「悪夢では」と思う輝の頬に、木枯らしが容赦無く突き刺さる。この三日間ほとんど眠らずにいた輝が、夢と思っていたくなるほど、現実の世界は変貌していた。とにかく情報を仕入れたいと思い、あれこれ思案した結果、出版社に向かうことにした。輝がお世話になっている出版社は、渋谷の道玄坂を登ったところにある。

「一時間も歩けば着く距離だろう」と二、三步足を進めたが、

「こんな時に会社に居る奴はいないよな」と、輝は自問自答した。それにもうじき暗くなるのも、輝の足を止めるのに十分な材料だった。それこそ夜になれば何が起こるか見当もつかず、更なる危険を感じずにはいられなかった。かといってマンションで、寒く眠れぬ夜を過ごす気にもなれなかった。

「駄目で元々だし、ほかの誰でもいいから話を聞ければ」輝は小さく呟き歩き始めた。昼の短いこの時期、表参道に着く頃にはすっかり暗くなっていた。普段はネオン輝くこの道には、多くの人が集まってくる。しかし、今は月の光だけが唯一の照明装置だった。そしてやはりここでも、誰一人として目にする事は出来なかった。乗り捨てられた車の間を、縫うように歩いていき明治通りに差しかった時、何台もの車が近づいてくるのが感じられた。重いエンジン音は明らかにトラックと判別できた。数個のヘッドライトは真直ぐに輝の方に向かって近づいてきた。と同時にヘッドライトの光りよりも強い光が、周りの建物をなめるように流れるのを、輝には確認できた。

「サーチライトみたいだな」トラックは全部で三台、低速で真直ぐ向かってくる。

「何か聞けるかも」輝はその場所でトラックを待つことにしたが、サーチライトの光が足元に差しかった時、不意に腕を掴まれ、闇に引きずりこまれた。

「静かに！隠れなされ」老人とわかるその声は、恐怖に怯えているようだった。

理由は見当もつかないが、ともかく輝は老人の声に従い物陰に身を伏せた。それほど、その声には切迫したものが感じられた。三台のトラックはそのまま新宿方面に走り去っていった。サーチライトを縦横無尽に走らせながら。

「もついいじゃろう」身を屈めていた老人が起き上がった。

「何故、隠れるのですか」輝の問いに老人は驚いた。

「ほほほ、若いのが、知らんのかね」

「はい、日本が売り渡されたということ意外は」輝は簡単に答えた。
「それでトラックが来ても隠れなかったのかね」老人は何かを納得したようだった。

「教えていただけませんか」輝は情報を求めてここまでできたことや、昼間の出来事を簡単に説明した。

「うーむ、何から話せば良いやら」老人は暫く考えてから、話し始めた。

「さっきのトラックは米軍兵士じゃ。日本人狩りをしておる」

「日本人狩りですか」輝は驚きを隠せず、つい大きな声を出してしまった。

「これこれ、静かに、静かに」老人は続けた

「反アメリカ思考の人間だけじゃが、捕まると尋問など恐ろしい目に会っそうじゃ。勿論逃げればその場で射殺されてしまう」

「しかしまだアメリカになつた訳でもないのに、何故アメリカ兵が日本で自由に振舞えるのですか」確かにまだ新年を迎えた訳ではなかった。

「それはじゃ、あのニュースの後各地で外人殺しが多発してな、日本を返せと。アメリカだけでなく、いろんな国の人間が殺された様じゃ。日本人には外人は皆同じに見えるからの。しかし日本の国家はバラバラ、警察も自衛隊も機能しなくなっていたからな。そこでやむなく、か、どうかは知らんがアメリカ兵が乗りこんで来た訳じゃ」一息ついてから老人は付け加えた。

「アメリカは予期していた様だった、こんな事態を。奴等はすぐに現れやがった、自動小銃ぶっ放して」前もって日本各地の米軍基地に、大量の兵士が配備されていたのだらうと更に付け加えた。

「じゃあ、皆さんどこかに隠れているのですか、アメリカ兵に見つかからないように」輝は老人に尋ねた。

「特に夜の警備が厳しいが、昼間は皆動き回っているようじゃ。昼間あんたも見ただらう」

確かに烏合の衆には出くわしたが、都内で半日歩いた割には絶対数人数が少ない。

「見かけた事は見かけましたが、遭った人の数が」そこまで言う老人が割りこんだ。

「確かに東京の人口は減っただろうな、金の有る奴は海外、特に東南アジアに集中して逃亡していきよった。まだまだ金が有れば贅沢な生活が送れるからな。金融機関は大変だったぞ、貯金を下ろす人間でこった返しじゃ。暴動騒ぎさ。それも仕方あるまい、なにしろ下ろしたくても銀行に金などない。しかし、新年になれば円に価値はなくなる。すでに大暴落しているだろうが、皆、逃げるため少しでも必要だった。とうとう銀行員までもが自分の銀行に金を出せと大騒ぎじゃ」

「こんな状況ではしかたないでしょう。しかしそれだけでこんなに人口が減りますか」輝は尚も尋ねた。

「いや、都会を離れた者も大勢いるようじゃ。わしの知り合いも田舎の兄弟のところへ行ってしまったの、確かにここには食うにも困ってしまう。田舎に畑でも持っていれば食うには困らんし、こよりは安全だろうと行って出て行った」暫く沈黙が続いた後、老人は口を開いた。

「それに、だいぶ殺されたしの」

「アメリカ兵に殺されたのですか」

「それもあるが、日本人同士でも、ちょっとした事ですぐ殺し合いが始まるようになってしまった。完全にパニック状態だったよ。それともう一つ」一呼吸おいてから

「どうやら相当数の人間が、アメリカに対抗すべく組織を作り交戦しとるようじゃ」

「民間のゲリラですか」

「そんな生易しいものではない様じゃ。防衛庁の高官が作ったとか、警察幹部のお偉方の指示だとか、一応プロ集団と言うことらしい。武器もしっかり揃っているそうじゃ。そんな組織の人間は夜間、秘

密裏に動くからの、人目には付かんよ、そのせいで夜間警備が厳しいのさ」老人は小さく笑った。

一通りの話を聞いた輝は落胆の色を隠せずにいたが、老人に別れを告げて明治通りを歩き始めた。老人から渋谷では反対組織と米兵が交戦中で、戦いの規模としては小さいが少々危険だと聞かされていた。しかし輝には一つの信念が動き出した。

「多分奴なら何か…」輝の担当の編集者、杉本隆行の事だが、ジャーナリストを目指す杉本が、こんなチャンス逃すわけがない。必ず何か行動を起こすだろうと、改めて出版社に向かう事の意味を確認した。途中例のトラックが現れたが、素早く物陰に身を伏せてやり過ごした。輝の見たところ、確かに自動小銃を構えた米軍兵士が何人か乗っていた。そして渋谷の繁華街に近づくにつれ、乾いた銃声がビルの谷間にコダマし始めた。宮益坂と国道二四六号には、路線バスを繋げた長いバリケードが出来ていた。バリケードを横目に輝は「R線のガード下をハチ公口へと進んだ。スクランブル交差点には、若い熱気の変わりに炎上する車が激しい熱量を発散していた。井の頭線のガード下には何台もの車が積み上げられ完全に塞がれていた。センター街も、本店通りもあちらこちらにバリケードが作られていた。そこかしこでビルが破壊され、壁は銃痕のアバタ面に変貌していた。忠犬八公も、散歩中らしく土台のみがひっそりと残されていた。

「これが、渋谷。まるで戦場だ」

輝は昔に見た湾岸戦争のニュースを思い出し戦慄を覚えた。と同時に一瞬後悔したが慎重に身を屈めて進み始めるしかなかった。いつもなら五分程度のこの坂が、永久に続くと思える程遠く感じられた。時折聞こえる銃声に恐怖しながらも出版社まで後一步というところで、心臓が口から飛び出るような衝撃が輝を襲った。何物かが路地から飛び出し輝に突進してきた。反動で尻餅をついた輝は小さな悲鳴を吐き出し、暫く身動き一つ出来なかった。ようやくの思いで瞬きをし、止まった呼吸を整え、目を凝らして良く見ると、赤い服の

若い少女だと気づき輝は胸を撫で下ろした。その少女は震えて下を向いているだけだった。

「大丈夫」輝が静かに尋ねると、少女は輝の顔を見上げ泣き出した。「助けて」その瞳は青く澄み、肌は透き通る程白く輝いていた。しかも吸いこまれそうな金髪と整った美しい顔は、輝の言葉を失わせるには十分だった。だが見とれているときではない、気を取り直し少女に尋ねた。

「どうしたんだい」少女はしきりに路地の方を気にしながら、早口で話し始めた。

「私、逃げた。追ってくる、殺される」先ほどの老人の言葉を思い出し、それだけで輝は理解し、懸命に説明する少女の手を掴むと、目の前のビルに飛び込んだ。ここが目的の出版社のあるビルだった。いくら外人だとしても若い少女である。しかも誰かに追いかけられ身の危険にさらされている。どんな理由があるにしろ、輝には知らん振りすることなど考えられなかった。二人は通路の奥の階段を静かに昇り始めた。出版社は三階のフロアだが、当然エレベーターは動いていない。階段は初体験だったが、出版社は何度も訪れ、勝手知る場所だった。ドアはしっかりと施錠されていたが、輝は少しも慌てずドア脇の植木蜂に手をつ込んだ。そして一つの鍵を取り出し、少女に見せて小さく笑った。緊張に震えていた少女の顔に幾分笑顔に戻った気がした。

二

出版社内部は荒らされた形跡もなく、この前来た時と少しも変わっていないかった。ただ、無人である事を除かなくてはならなかった。少女は部屋の隅にうずくまり、じっと輝の様子を窺っていた。膝を抱えた少女の眼は、恐怖に満ち溢れていた。輝はふと、奥の給湯室の棚には、いつもなにかしらのお菓子が詰め込まれている事を思い出した。輝がクッキーとバウムクーヘンを手に戻ってくると、少女

は一瞬身を引いたが、恐る恐るクッキーに手を伸ばした。輝は黙って少女を見ていた。やがてバウムクーヘンにも手を伸ばした。急いで食べたせいだろう、少女はのどに詰まらせ咳き込んだ。輝は優しく背中を叩いた。無事に飲み込め終えた少女は、輝に向かって頭を下げた。

「ありがとうございます、リサです」美しい顔には笑顔が似合うと、輝は心から思った。

「何があつたか話してくれるかい」流暢な英語で尋ねたが、突然リサは声も無く泣き始めた。クッキーを持つ手を振るわせながら。

輝はどうして良いか判らず、ただしっかりとリサを抱きしめるしか無かった。やがて落ち着きを見せたリサの言葉は、輝を落胆させるには十分過ぎた。

「酷いことを、そんな事まで」リサの話によれば、貿易会社を営む父親が姿を消し、リサと母親は武装した日本人に何処かに連れていかれ、多くの外国人とともに監視されていた。そのうち母親や女性を別室で玩具にし始めたらしく、隙を見て数人で逃げ出したが、途中で何人かは殺されてしまったと、辛い体験を途切れ途切れに輝に語った。

「アメリカは間違っています、でも日本も間違っています。色々な国の人まで捕まっています」リサはつい、持っていたクッキーを握りつぶしてしまった。輝がハンカチを渡そうとした時、ドアノブを回す音が聞こえてきた。アメリカ兵でも反対組織でもどちら側の人間に見つかったとしても、現状ではかなり不利な状態だと言わざるを得なかった。二人はデスクの蔭で身を強張らせた。鍵を差しこみロックの外れる音が静まり返った辺りに響いた。鍵を使うところなど、会社の人間かと思われたが、油断は出来なかった。武器はない。輝はデスクの上からスタンプボックスを引き寄せ、いざとなったら投げつける覚悟でしっかりと胸に抱きこんだ。懐中電灯の灯りが部屋の中に差しこんできた。入ってきたのは一人だった。スタンプボックスを片手に輝は立ち上がり、相手を確認しようとした瞬間、

聞きなれた声が耳に響いてきた。

「先生じゃないですか」なんとも懐かしい杉本の声だった。

「驚きました、先生。でも何でこんなところに」

「杉本君、とりあえず灯りを」懐中電灯の灯りが輝の目に突き刺さって顔の筋肉を強張らせていた。

「おっと、そうですね」杉本は慌てて電灯を消した。

輝は今までの経緯を簡単に話した。少女の部分を省いて。無論少女はまだ隠れていたが、暗闇の中、杉本は気づきもしなかった。

「そうでしたか」杉本は何度か頷いて、自分の経過と例のニュースの後、街が大変だった事を輝に話した。杉本の話では、基地問題が発端のことだった。北朝鮮との兼ね合いもあり、軍備増強したいアメリカと縮小したい日本との間には大きな溝が生まれていた。やがて中国からの要請だろうか、エネルギーや漁業に親密な領土問題にも口を出し始めた。輝もここまでは知っていた。盛んに国会が開かれテレビでもしきりに中継を流していた。しかし、そんな時でも野党と与党の対立は激しく、野党欠席のまま審議が行われたり、憲法を変えたりとひどい中継を見たのを覚えていた。やがて与党議員は私利私欲のため、秘密裏にアメリカと条約を結び、さつさと日本から姿を消してしまった。結局、総理はアメリカの言いなりとなつて、拳句の果てに日本を売り飛ばしてしまった。勿論そのあと総理を見たものはいなかった。

「他の人間はどうしたのだい」輝の問いかけに

「ほとんどの人は散り散りになつて僕でもわかりません。ただこの先どうなるか見当もつきませんが、後の人々に真実を知ってもらいたくて、反対組織のインタビューでもと思い戻ってきました」と、杉本は答えた。

「君は反対組織ではないのだね」輝は何気なく尋ねた。

「当然ですよ、ジャーナリストはどちらにも加勢しません。常に中立で事実を伝える事が使命です。ただこんな場合……」まだ何か言おうとした杉本の言葉が、立ち上がった少女を見て途絶えてしまった。

「せ、先生、その子は…」驚いた杉本の言葉は、またも途切れてしまった。

「杉本君、座ってくれないか」輝が差し出した椅子に杉本は黙って腰を下ろし、輝と向かい合った。そして先ほど省いた少女の話と、虐待が行われている話を輝はゆつくりとだが確実に杉本に伝えた。

「そんな事が…異常だ」ややあつて、杉本が口を開いた。

「今の現実事態、正常だとは思いませんが」確かに異常な事は輝も重々承知していた。

「取材という名目で探ってみましょうか。インタビューするつもりだったし、上手く潜り込めれば、なにか掴めるかもしれません」

「危険では無いのか」

「ジャーナリズムに危険は付き物です」杉本は笑って少女に尋ねた。「探れるかどうか判らないが、頑張ってみるよ。場所はどこだい」

リサの話では、東口のとあるデパートに陣取っているらしい。棚からカメラを持ち出し、杉本は輝にむかつて真顔で声をかけた。

「ここに隠れていてください、誰も来ないでしょう」そして暗い廊下に出て行った。

「僕みたいな物好き以外はね」と一言残して。

三

辺りが白々明るくなりかけた頃、ドアをノックする音で輝は跳ね起きた。いつのまにかリサと肩寄せ合い眠っていたようだった。

「先生、僕です」杉本の声が小さくフロアに響いてきた。

「今、開ける」急いで扉に近寄り輝も小さく返事を返した。

「凄いですよ」部屋に入るなり杉本は早口で話始めた。

「しーっ、リサはまだ夢の中だ」輝は人差し指を口に近づけた。

「先生、あれは完全に軍隊ですよ、」声のトーンを落とし杉本は話を続けたが、子供みたいに声の張りは残っていた。

「武器も大量、兵隊も大勢です。どっから集めたのやら」

「彼らはなんと saying していた」杉本の話では

「日本は渡さない。その為断固戦う覚悟で我々は集まった。平和に酔いしれ戦う事を忘れてしまった政府、逃げ出した政治家どもに任せてはおけない、今まで日本は恵まれすぎていたから、こんな事態を招く結果になったのだ。軍国日本の復活だ」と

「リーダー格の男は自衛隊の人間でしょう、迷彩服を着ていました。われわれが日本を守らず誰が守るのだってね。腐敗した政府に変わってわれわれが国を動かすとも言っていました」

「捕虜の方は何か探れたかい」杉本はリサの方をちらりと見てから、更に声のトーンを落として話を続けた。

「どうやら本当の話みたいです。三階まで写真撮影を許されましたが、上の階から女性の叫び声が聞こえてきました」

「どうしたものか」輝は頭を抱え考えこんでしまった。その時、突然けたたましくドアを叩く音が聞こえてきた。

「記者さんよ、居るだろ、ちょっと開けてくれねえか」驚いて起きたリサの口を塞ぎ抱き上げ、輝は咄嗟に奥の給湯室へと走りこんだ。杉本は二人の動きを目で追いながら、焦りながらもゆっくりとした口調で答えた。

「いますよ、今、開けます」

「早くしろ、蹴破るぞ」男の声が給湯室まで轟いてきた。恐怖に青ざめたリサを抱え、輝は途方に暮れていた。

「はいはい、ちょっと待ってくださいよ、開けますから」更にゆっくりとした口調で、杉本は男と対応していた。ふと、天井に点検口があるのに気づいた輝は、リサを天井裏へと押しこんだ。輝が給湯室から出てくるのを確認してから、杉本は静かにドアを開けた。

「いったい何事ですか」杉本の言葉を無視して、三人の屈強そうな男たちがライフルを構え、出版社の中に雪崩れ込んで来た。

「一応、メンバー以外は疑われないとな、スパイの可能性もあるし、後をつけさせてもらったのさ。出版社は間違いないな」辺りを見回していた男の視線が、輝に向けられた。

「誰だ、そいつは」輝を見据えたまま、男は杉本に尋ねた。

「私同様、記者ですよ、日本が苦しめられている事を全世界に伝える為、一緒に立ち上がった仲間です。私たちの武器はカメラとペンですがね」もってもらしいデタラメを杉本は躊躇することなく語り始めた。いや、杉本には正直な気持ちだと輝は思った。

「私たちは、貴方達、いや、日本の味方です。日本が売り渡されるなんて許されない行為です。売る方も悪いが、買う方はもっと悪い。色々情報をお持ちでしょう、詳しく教えてくださいよ。皆さんの活躍を記事にしたいのです」杉本に自分達の正当性を指摘され、気分を良くした男は

「そうだ、我々は正しい道を進んでいるのだ、断固戦うぞ」と大声を張り上げた。

自分の大声に酔いしれ、更に気分を良くした男は、得意そうに話し続けた。

「よし、詳しく教えてやる、さっきお前が見たのはほんの一部にすぎん、我々の組織は全国規模で活動している、今に外人どもを全員海に叩きこんでやるつもりだ。お前を専属の記者にしてももらえるように頼んでやる。そして思う存分我々の活躍を記録にしろ、ついで来い」ややあつて

「お前も」と輝に向かい手招きをした。

ここで断れば疑われるだろうと、輝は喜び勇んで皆に同行することにした。

四

男達が去るのを待つて、リサは天井裏から降りてきたが、どうしたらいいか皆目見当もつかなかった。十六才のリサには悪夢としか言いようが無い日々の中、唯一、輝と杉本との出会いが救いだった。しかしその二人とも離れ離れになってしまった。日本に来て五年、何一つ不自由無く暮らしてきたリサには、家族との別れや戦争など

想像さえしなかった。大好きな両親の顔を思い浮かべ、瞳が涙に覆い尽くされた。突然激しい銃撃戦の音が轟いてきた。涙を拭いて恐る恐る窓から眼下を見下ろすと、ある一方に激しく銃弾を飛ばすアメリカ兵数人の姿が目に見え込んだ。先ほど出て行った男達に向けられている事は、リサにも容易に想像できた。輝と杉本の笑顔がリサの脳裏に浮かんできた。

「助けたい」咄嗟にリサはドアを飛び出した。

「でもどうやって」階段を降りながら何の計画も無い事に気づいたリサは二階の踊り場で座り込んでしまった。銃声は激しさを増すばかりだった。音も徐々に近づいていた。

「どうしよう」頭を抱えるリサの耳に、走り寄る数人の足音が聞こえてきた。恐々覗き込むと、輝と杉本、そして二人に抱えられた大男だった。大男は腹から大量の血を流しながらも、何やら大声で叫んでいた。リサは大量の血を見てつい声を出してしまった。輝と杉本はリサに気づくと、大声で叫びながら階段に向かい走り出だした。「早く逃げる」二人が走り始めた瞬間、リサの耳に劈くような爆音が響いてきた。入り口付近は大きく崩れ、壁からは無数の鉄筋が剥き出しになり、途中から階段も消えうせていた。崩れた階段から階下を覗いたが何も見えない。リサは必死に辺りを見回したが、焼け爛れた床と壁しか目に入らなかったが、しかしその中に、真っ黒な人間の足だけが煙を上げているのが見えた。リサの頬に一筋の涙が伝った。

「リサ、大丈夫か」そんな時、輝の声が階下から聞こえてきた。二人は爆風で廊下の奥まで飛ばされていたが、幸いかなり傷程度で済んでいた。

「私、大丈夫」姿の見えない輝にリサは答えた。兵隊に見つかりと殺されると思い、リサは辺りを見回し必死に考えた。その時涙を拭うリサの目に、壁に埋め込まれた大きな赤い箱が映し出された。勢い良く扉を開けると、幾重にも折り重なった消火用ホースが吊るされていた。

「これよ」ホースの先を思いきり引つ張り、崩れた階段にたれ下げた。

「早く来て」リサの声でホースがピーンと張られた。杉本、そして輝とホースをつたって昇ってきた。昇り終わると杉本は急いでホースを引き上げた。三人がホツと胸を撫で下ろした時、どこかと軍足の音がビルに近づいてきた。息を殺し階下に耳を澄ませると、二言三言の英語が聞こえたが、直ぐにまた、どこかと走り去って行った。リサは二人を交互に見つめて「アーメン、全員、バラバラになったそうよ」と、笑って見せた。そして二人の胸に飛び込んだ。ひとまずは安心できた。今この建物には、上に登る手段は無い。動かないエレベーターと崩れ落ちた階段が、三人を隔離し守ってくれていた。少なくとも今は…。

五

「本格化してきたな」窓から通りを伺いながら、輝は話しを続けた。

「暫くここに隠れていたほうが良さそうだな」既に銃声は止んでいたが予断は許されなかった。アメリカ兵も警備を強めるだろうと思われた。

「そのほうがいいでしょう」杉本も納得した様子だった。

「腕は大丈夫か」上着が破れ、血の滲んだシャツを見て輝は尋ねた。「この程度、大丈夫です」リサは給湯室から急いでタオルを持ってきて、杉本の腕に巻き始めた。リサには自分が原因で怪我をしたと思えて仕方なかった。危険な眼にあわせてしまったと。

「ありがとう、リサ」リサは小さく頷き、顔を赤らめた。

「表はどうですか」輝に視線を移し杉本は尋ねた。

「まだ二、三人の兵隊がうろついているよ。だが大丈夫、こちらには見向きもしない」

そこに二人の日本人、あの男達の残りの二人が、銃を突き付けられ道路に連れてこられた。

そして突然の銃声と共に、二人はぱたりと道路に倒れこんだ。

「あつ、」輝は思わず声を漏らしてしまった。

「どうしました」銃声に気づいた杉本とリサが、窓に近づいてきた。「なんでもない」リサに見せる訳にはいかない。輝の言葉で何かを感じたらしく、杉本はリサを奥に連れていった。やがて兵隊達はいなくなってしまった。

「少し休むといい」輝は二人に告げると、ドアを開け廊下に出て行った。このビルの三階以上は事務所ばかりだが、下の階には小さな店が何件か入っていたのを思い出し、「役に立つものは無いか」と二階のフロアに降りて行った。小さな洋品店は荒らされた形跡もなく、静かにたたずんでいた。若い女の子用の服がガラス越しに見えたが、輝はためらいもなくドアを壊し、店内に入り物色をはじめた。勿論リサのためである。レジ脇の袋に数着の服を詰め込み、洋品店を後にした。隣は紳士服、厚手のコートを袋に詰め、フロアの奥の店へと移動した。小さな看板にはスポーツ用品の文字が入っていた。野球、サッカー、バスケット、どれも役に立ちそうも無かった。戻ろうとした時、ふとレジの後ろに目が止まった。登山用品の中にサバイバルナイフが鈍い光を放っていた。

「これは使える」ショーケースをこじ開けると、他にもロープやらランタン、固形燃料、レトルト食品、飲料水までもがご丁寧に並べてあった。普段二階に降りる事の無かった輝は、店の存在すら知らなかった。しかしこれほど感激したスポーツ用品店に、かつて出会った事が無かった。初めて野球のグローブを買いに行った店より。

「私だ」輝が静かにドアをノックすると、リサが顔を覗かせた。両手に袋をぶら下げた輝を確かめるとリサは笑顔になった。

「何ですか。その袋」奥から杉本が声をかけた。

「スポーツ用品店で、色々揃ったよ」

「スポーツ用品」暫く考えてから

「ああ、新しく出来た店です。何かいい物ありましたか」杉本は興味深そうに覗きこんできた。

「たいへんな収穫だよ」デスクに洋服の山を積み上げた。

「これはリサに」差し出された服を手にはリサは大喜びだった。リサの服はあちらこちら破れ、襷袢切れと化していた。

「これは君に」コートを受け取り杉本も満足そうに微笑んだ。

「これが、スポーツ用品店での収穫。これから晚餐会と洒落込むぞ」もう一つの袋から取り出されたものを見て、リサも杉本も目を輝かせた。三人とも食事は久しぶりだった。中でも食後のコーヒーは、とてもインスタントとは思えず、三人の身体を芯から温めてくれた。満足したりサは今にも眠りにつきそうに舟をこいでいた。輝がやさしくコートを掛けると静かに寄り添い目を閉じた。

「彼女には残酷な現実ですね」リサをじっと見つめて杉本はため息をついた。リサを静かに横たえると輝はサバイバルナイフを取り出し「一応持っていないさい」と、杉本に手渡した。

「この先どうなるのでしょうか、まだまだ殺し合いが続くのでしょうか」ナイフを見つめて杉本が呟いた。

「確かに戦闘は激化してきたが、アメリカも我々を滅ぼすつもりは無いだろう。それに新しい州が焼け野原では彼らも困るのではないか」

「確かにそうですね。日本人の技術や勤勉さは大方認めていますからね。根絶やしにするとは思えません。しかし反対組織は頑固です」

「杉本君の言う通りだ。簡単には諦めないだろう。なんとわれようが今まで日本を守ってきた連中だ、降伏もしないだろう」

「何でこうなったのでしょうか」

「我々は政府を支持しないとဆိုいつつ何もしなかった。政治家の好き勝手を野放しにした罰だよ。もっと早く国民が立ち上がるべきだったんだ」

「確かに批判するだけで何もしなかったのは、私達国民の落ち度でした。何か手を打っていればこんな事にはならずに済んだのでしょうか」杉本は落胆の色を隠せなかった。

「とにかく、良く考えてから行動しよう。それと明日どうするかだ」

「やはり街中は危険でしょうし、いつまでもここに居る訳にはいかない。私の田舎なんかどうでしょう、軽井沢に両親がいるのですが、行ってみますか」

「遠いがここよりは安全だろうし、ご両親と一緒になら心強い。しかしまだ居られるのかね」

どこかに非難でもしているのではと輝は気になった。

「大丈夫です。山荘の管理をしているのですが、冬は閉めますので誰も来ないし、どこにも行くところは無いと思います」

「しかし、歩いては行けないぞ。それに途中リサが見つかる厄介だし、リサの両親の事も気がかりだ。どうにか助けたいが」

「車が手に入れば良いのですが。それに両親をこのままにしてリサが付いて来てくれるかも心配です。かといって助け出すのも至難の技でしょう」杉本の言葉を遮るようにまた例のトラックのエンジン音が聞こえてきた。

「あかりを」輝が言うのが早いか、杉本はランタンの明かりを吹き消した。

緊張の時間がゆっくりと進む中、二人は身動きせず全神経を耳に集めた。サーチライトの明りが音も無く窓を流れていったが、幸いトラックは停止することなく通り過ぎて行った。

六

時折聞こえる銃声で輝は目覚めた。やはり疲れたのだろうか、杉本はまだ寝息を立てていた。簡単な食事を用意して二人を起こした輝は、再びスポーツ用品店に向かった。大きな目のナップザックに、店内に残っていた食料品や固形燃料など、手当たり次第に詰め込んだ。杉本もデスクやロッカーを片端に物色し始めた。ロッカーの一つから買い置きタバコが見つかった時には大喜びだった。リサにはまだ「安全な場所に移動する」とだけしか話していなかった。とにかくここを離れるにあたって、役に立ちそうと判断したものを次

々に袋に詰め込んでいった。リサは、じつと窓の外を見張っていた。何か異常があれば直ぐに二人に知らせるつもりで。その時数人の男が、銃を構えた日本人に追いたてられるように坂を登ってくるのが、窓の視界に入ってきた。追いたてられる男の中にリサが最も会いたかった顔があるのに気が付き、リサはつい叫んでしまった。ナツプザックを背負って戻ってきた輝と、物色中だった杉本はリサに駆けよってきた。

「あそこにパパが」リサの指先は数人の外国人と、武装した日本人を差していた。

「お父さんがいるのか、あの中に」輝の問いに

「一番後ろ、黒のジャケットがパパ」リサは涙を浮かべて輝に向き直った。その眼は希望と絶望とが交じり合い、美しい青い瞳を曇らせていた。

「アジトの移動ですかね」間隔を開けて何人もの人間が坂を登ってきた。杉本の仮説はどうやら合っているようだった。

「昨日の銃撃戦のこともあるしな」輝は頷いた。

「とりあえず後をつけてみる。ここで待っていてくれ」

「僕も行きます。昨日彼らのアジトに行ったので、何人かの顔を覚えていきます。見つかつてても不信に思われないよう、誤魔化します」杉本はすかさず答えた。

「それに一人では危険です」暫く考えてから輝はリサに向かって言い聞かせた。

「リサ、一人でも大丈夫だね。ちゃんと隠れて待っていていられるね」

「私は大丈夫です。パパを助けて」リサは涙を堪えていた。

「きっと助け出す。心配しないで」リサを抱きしめると、杉本と目配せをした。

「行こう」輝の言葉に力強く頷くと、杉本は輝の後から廊下に向かった。リサも駆け出し二人の後に続いた。消火栓のホースを引き上げると、リサは窓から二人の行方を目で追い胸の前で十字を切った。

入り口辺りで身を潜め、輝と杉本は最後のグループの後をつけ始めた。およそ五十人はいるだろうか、四つのグループが身を屈め歩いていった。二人は物陰に身を隠しながら移動した。やがてホテル街に足を踏み入れた四つのグループは、それぞれ別のホテルへと吸い込まれて行った。二人は途方に暮れてしまった。最初のグループ、リサの父親のいるグループがどこに入ったのか、確認する事ができなかった。

「仕方ない、暫く張りこむか」輝が呟くと

「ここに隠れましょうか」と、一軒のカレーハウスを杉本が指差した。

店内は荒らされ放題でひどい有様だったが、表の寒さは十分凌げたと、三番目と最後のグループが入ったホテルの入り口が、しっかりと視界に納まっていた。

「しかし変ですね。新しいアジトにこんなところを選びますか。バラバラだし動きづらいでしょう」杉本は考えこんでしまった。

「移動中なのかもしれんな。それとも一時的に非難したとか」輝の答えを待つように、トラックの低い唸りが響いてきた。

「隠れる」二人はカウンターを越えキッチンへと滑りこんだ。今度のトラックは通り過ぎなかった。そして靴音が狭いホテル街の路地に踏み入ってきた。カウンター越しに表を覗くと、数十人のアメリカ兵が銃を構え、慎重に進む姿が目飛び込んできた。

「このままでは見つかる」輝は杉本に伝えた。今度は杉本がカウンター越しに覗くと

「一軒一軒調べています。反対組織を追ってきたのでは」

「多分彼らが目的だろう。しかし我々もとにかく隠れなければ」輝は上を見上げたが、点検口どころか天井すら無かった。狭い店内に隠れる場所は一つもなかった。

二人は出来るだけ身を低くして、息を殺す事しか出来なかった。や

がて扉が鈍く開く音が聞こえ、足音がカレーハウスの中に入ってきた。小さな店の中、見つかるのは時間の問題だった。兵隊がカウンターを覗こうとした時、外で激しい銃声が響き始めた。兵隊は慌てて踵を返すと、店から駆け出して行った。

「最後のグループが発見されたみたいだ。ホテルに向かって撃ちまくっている」カウンター越しに杉本に説明していた輝の鼻先を、流れ弾がかすめ飛んできた。おもわず仰け反る輝を杉本がしっかり支えた。

「大丈夫ですか」

「こんな体験はしたくないね」息を整えて輝は答えた。やがて突入した兵隊に最後のグループは鎮圧されてしまった。捕虜となっていた外国人は開放され、星印のトラックに向かつていった。安堵の笑みを浮かべながら。それから銃撃戦が起こるたびに、数人の外国人が開放されていった。四度目の銃撃戦の時、輝はまたもカウンター越しに表を覗いた。リサの父親がいたグループに違いないと確信をもつて。やがて銃声も止み頭に手を当てた日本人が数名、カレーハウスの前を、トラックに向かい追いたてられていた。兵隊達の乗ってきたトラックは満員となり走り去っていった。まだ数人の兵士が残っていたが、彼らは雑談をしてタバコを吹かしていた。しかしリサの父親の姿は確認出来なかった。

「撃たれてしまったのか」輝は不安を隠しきれなかった。

「どうですか」杉本が心配して声をかけた。

「どうもリサの父親の姿が見当たらない。逃げたのかそれとも」

「まさか」杉本も落胆した様子だった。リサの顔を思い浮かべ輝も肩を落とした。そんな時、兵士が一人の外国人を連れて店の中に入ってきた。怪我をしているらしい外国人は、リサがパパと呼んでいた男で黒いジャケットを羽織っていた。兵士は何か言い含めると、男を椅子に座らせ店を後にした。そして雑談する仲間に加わり、大声で笑い始めた。父親の無事な姿を見て安心したが、チャンスは今しか無いと、輝は隠れたまま男に声をかけた。出来るだけ流暢な英

語を使い。

「リサと一緒にです。騒がないで、静かに」男は声を出しそうになって、慌てて口を押さえた。突然聞かされた娘の名前と、姿の見えない男に緊張したが、ゆっくり辺りを見回し静かに答えた。

「リサだつて、娘のリサか」

「そうです。貴方が父親だとリサから聞きました。とても元気です。今は保護しています」輝も声を殺し答えた。

「どこにいる、出できて娘に会わせてくれ」突然に娘の無事を知られ、今にも泣き出しそうな声だった。

「勿論その為に追いやられる貴方がたをつけてきたのですから。ただ」輝は口籠もった。

「ただなんだね」その声は涙声になっていた。

「今は駄目です。今夜ここで会いましょう」姿を見せて騒がれたら、兵隊に蜂の巣にされてしまうだろう。少し脅かしをかける必要が輝にはあった。

「騒ぐと娘さんの命は保証出来ません。ここでの事も誰にもしやべらないように」

少々ドスを聞かせた声で話したが、これは一か八かの賭けだった。騒がないとの確信は持てなかった。暫く沈黙が続いたのち、幸い男は静かに答えてくれた。

「多分私はどこかの基地に連れていかれるだろう。抜け出せないかも知れない。来ることが出来なければ、わたしの娘はどうなる」

「どうやら賭けは成功したようだった。」

「仕方ありません、三日間待ちましょう。三日後の午後十時この場所、何とか方法を考えてここまで来てください。」

「判った、それまで娘を頼む、危害を加えないでくれ」

「大丈夫、私は味方です。安心してください。さあ、もう行って下さい」男は足を引きずり後ろ髪を引かれる想いで店から出ていった。丁度星印のトラックも姿をあらわしたところだった。残りの兵隊も全て引き上げるのを確認すると、輝は床に座りこんでしまった。あ

まり英語を得意としない杉本に事の粗筋を説明すると

「うまくやりましたね、先生見直しましたよ」いつもの杉本得意のおだてが飛び出した。

「とにかく戻りましょう。リサに報告しないと。無事だと聞いたら喜ぶぞ」杉本の方が余程嬉しそうだった。

事実、こんな状態で助かるとは思いませんでした。杉本は意気揚々と店を出たが、輝は今ごろになって足が震えだしたのに、始めて気が付いた。一人残されたリサはじつと窓に寄り添っていた。兵隊がトラックで通りすぎ、銃声が聞こえた時には心配で胸が破裂しそうだった。しかし二人の姿が遠くに見えた時、心の中に何かが芽生えたことをリサはまだ気づかずにいた。急いでホースを垂らし二人を迎えたりサは、二人の笑顔から良い結果が得られたことを汲み取り、輝に抱きついた。

「パパは無事なのね」リサの問いに

「三日後に会える」輝は静かに答えた。

「開放されたの」リサの質問に一部始終を伝えると、リサはつい輝に激しいキスをしてしまった。我に返ったりサは真っ赤な顔をして、給湯室に駆け込んだ。

「おやおや」杉本の言葉で、呆気にとられていた輝も

「余程嬉しかったのだろう」と、一つ咳をした。

「とにかく三日後まで、ここを動くわけには行かなくなった。見つからないように、十分気をつけるかなさそうだ」輝がそう締めくくると

「無事に過ぎますように」と、杉本は両手を擦り合わせた。

八

銃声が激しくなる中、三人は身を寄せ合い、どうにか約束の日を迎える事が出来た。

「私が連れてくる。リサを頼むぞ」リサを抱きしめ、輝は出版社を

後にした。

道玄坂の街並みは、二日の間に激しく変貌をとげていた。大破したビルの瓦礫が道路に散乱し、大地震にでも見舞われたかのように、街は廃墟と化していた。今まで居たビルを振り返り、「良く無事だったな」と、輝はつくづく感心した。暫く感心してみていた輝は一抹の不安を感じ、約束のカレーハウスへと足を速めた。しかし不安をよそに、小さな店は瓦礫の中にぽつんと佇んでいた。輝は時計を確認してから、約束の地へと足を踏み入れた。輝は身を隠し時が来るのをじっと待っていた。

「ちゃんと約束を守るだろうか」輝の不安を足音がかき消した。

「来てくれた」安堵の表情を浮かべる輝の顔が、一瞬凍りついた。

「ふたり…」輝の耳は、二つの足音をしっかりと捉えていた。全身から汗が噴出してきた。

輝はサバイバルナイフを取り出し身構えた。足音は尚も無言のまま近づいて来た。兵隊でも連れて来たのだろうか、そう思うと必死にナイフを握り締める手が小さく震え出した。

「誰かいますか」しかし予想と裏腹に、その声は女性の声だった。

続いて男の声が店の中に静かに響いてきた。

「約束通り来ました。居ますか」その声は先日話した男と確信できる声だった。

「誰にも言わない約束では」兵隊では無いと冷静さを取り戻したが、輝は暗闇から姿を現すことなく、静かに答えた。

「すいません、私の家内です。娘が無事な事を黙っていられなくて」男は話を続けた。

「それに家内の協力なしでは、ここまで来る事が出来ませんでした」娘は、リサは無事なの」言われて見れば、リサの声と瓜二つだった。

「ええ、無事です。ちゃんと保護しています」尚も暗闇から声をかける輝に少々焦れたのか、

「早く会わせて、リサに会わせて」と、母親は興奮し始めた。

「出てきて、早く娘に会わせてくれ」父親も少々声を荒げ始めた。
「判りました、今出ていきますが、驚かないで下さい」輝は静かに立ち上がると、月明かりの中に姿をさらした。当然二人は驚きに身動き出来なかった。

「ジャップ……」やつのことで声を出した父親は、妻を下がらせベルトから拳銃を抜き出した。

「貴様、騙したな」怒りに震える手で拳銃を輝に向けた。

「本当のことです。リサを預かっています。元気ですよ」出きる限り冷静を装い輝は微笑んだ。

「信じられるか、私達が、私達が今までどんな目に……」父親は涙を流しながら訴えた。云いたい事は十二分にわかっていた。

「お前達を許さない」今にも引き金が引かれる寸前

「パパ、本当よ」リサの声が辺りに静かに漂った。振り返る父親の目に、元気なりサの姿が飛び込んで来た。

「リサ」両親はリサに駆けより強く抱きしめた。

「心配になって来てみたのです。それにリサも待って居られなくて」抱き合う三人を見つめる輝の横に、杉本が歩み寄ってきた。

「実の所、感謝している。どうしようか困っていたところだった。

リサの居場所を聞き出すまでは、殺しはしないと思っただがね」実際輝は至って冷静だった。何故かは分からないが。そして満足そうに抱き合う三人を見ていた。

「これで一安心ですね」

「いやまだ安心できない。とにかくここは危険だ」五人はとりあえず出版社へと向かい始めた。この隠れ家も随分と過ぎしやすく改造されていた。他のフロアからソファベッドを持ちこみ、光が漏れないようにテントを張って、暖かいコーヒーはいつでも飲める状態だった。

「リサから全て聞きました。本当になんとお礼を言ったら良いのか」リサの父、リチャードは、輝を抱きしめた。

「これは家内のエリザベスです」

「輝さん本当にありがとう、それに申し訳無い態度をとったことを深くお詫びします」

リチャードに紹介されたエリザベスが、済まなそうな目で輝を見つめていた。

「こんな時ですから仕方ありません。どうか気にしないで下さい」
輝の暖かい言葉に、エリザベスは何度も輝の手を握り、涙を流していた。

「これから君達は、二人はどうするつもりですか」リチャードの問いかけに

「とりあえず彼の田舎にでも行こうと思っています」と輝は杉本を見てからリチャードに答えた。

「しかし、いずれ兵隊たちが訪れていくでしょう。その時はどうするつもりですか」リチャードは二人の身を案じているようだった。

「私達は、兵士でもなく戦う事を知りません。その時は静かに身を委ねるでしょう」と言う輝の答えに

「私達と共に来ませんか。決して悪いようにはしません」とのリチャードの言葉に、エリザベスが付け加えるように続けた。

「今度は、私達が助ける番です。リサの恩人を見過ごす事は出来ません」

「お願い、一緒に来て」リサも加わり、輝と杉本の手を取って顔を交互に見つめた。

「しかし、私達が一緒だと、貴方達も危険な目に会うのでは無いですか」輝の問いに、リチャードが声を落として、静かに答えた。

「貴方方を信じて話しますが、これは重大な秘密です。私は普通に貿易を営む人間ですが、妻の父親は政府の人間です。しかもとても重要なポストに就いていて、大統領とも親しい間柄です。そのお蔭も有って今日ここまで来る事が出来ました。リサはたった一人の孫で、とても可愛がられています。きっと力になってくれると思います」輝は暫く考え込んだが、ひとつの結論に達した。

「皆で移動すれば目に付き易いでしょう。しかし貴方達も、ここを

三人抜け出すのは難しいと思います。そして私達も危険だらけです。ならばお互い助け合って乗り越える事が、最善の策だと思います。一緒に行きましょう。どこまで行けば良いのですか」リチャードの目に希望の光が浮かび上がった。杉本も静かに頷き、輝に従う気持ちを固めていた。

「国会議事堂をご存知ですか。いまアメリカ軍の作戦本部になっていますが、その司令官は父の知り合いです。きっと助けてくれます」エリザベスにも促され、腰を挙げようとしたとき、また近くで銃声が轟いた。

「車でもあれば安心なのですが」銃声に耳を傾けながら、杉本が呟いた。

「私が手に入れます。妻と娘をこれ以上危険な目に合わせたくはない」リチャードは拳を握り立ち上がった。

「私も行きましょう。二人ならば何かと都合が良いでしょう」輝も立ち上がると、杉本も遅れまいと立ち上がった。

「君は二人のことを頼む。心配するな」輝は杉本を座らせた。

「私からもお願いします。家内と娘を頼みます」リチャードにも頼まれ、幾分機嫌を直した杉本は、ちいさな笑みを浮かべた。

「気を付けて下さい。お二人が戻られるまでしっかり守ります」

エリザベスは今生の別れを告げるように、リチャードと口付けを交わした。まだまだ日本人には慣れない習慣を見せられて、輝は思わず目をそらした。そんな輝にリサが飛びつき、唇を重ねてきた。慌てる輝をリサの両親はなにも言わず、ただ笑って見ていた。

九

輝とリチャードは暗がりの中、銃声のする方へと足を進めた。小さな戦場では数人のアメリカ兵が消防署に向かい、自動小銃を乱射していた。近くには例の星印のトラックが止められていた。幸いトラックには兵士の姿は無く、エンジンもかけられたままだった。

「私が行きます」リチャードは輝を残し、身を隠しながらトラックに近づいていった。輝はそんなリチャードの行動を、黙って見守っていた。リチャードがドアに手を掛けようとした時、トラックの後部から兵士が現れ銃を突き付けた。輝の見守る中二人は、何か会話を交わしていた。そのうち兵士は銃を下ろしリチャードをトラックに乗せ、消防署の方に姿を消して行った。トラックの窓から、握りこぶしに親指を立てた腕が出されたときに、輝は安堵のため息を漏らした。どうやら上手く誤魔化せたようだった。やがてトラックは急発進し暗闇の中へと消えていった。トラックが消えるのを確認してから、輝は静かに踵を返し闇と同化していった。隠れ家のビルまで輝が戻ると、物陰からリチャードが姿を現した。

「すみません。置き去りにして」不意に姿を現したリチャードに一瞬驚いたが、すぐに気を取り戻し、冷静に輝は答えた。

「大丈夫です。それより兵隊が現れた時には、正直、肝が潰れました」輝が言う

「逃げ出してきたので助けて欲しいと頼んだら、兵士はあっさり信用しました。基地に連れていくからトラックに乗って待っていると少々自慢げにリチャードは片目をつむった。輝の顔にも笑顔がこぼれた。

「トラックは、建物の裏手に隠してあります。急いだほうがいいでしょう」リチャードに促され二人は隠れ家へと戻っていった。数分前に窓から二人の姿を確認していた杉本は、いらついた表情で階段の上で待っていた。

「杉本君、私だ」輝の声が聞こえると、待っていましたとばかりにホースを階下に垂れ下げた。

「どうしたのですか、姿が見えてから大分待ちましたよ」二人が登るなり、杉本は早口でしゃべり始めた。

「いやー悪い」そう言って輝は事の成り行きを話した。

「では、上手く手に入ったんですね」杉本は大いに喜んだ。

「支度しよう、直ぐここを出るぞ」輝の言葉で、杉本は出版社に飛

び込んだ。その後、輝とリチャードは、留守番の二人から手厚い歓迎を浴びせられた。

十

トラックは五人を乗せ、荒れ果てた街を静かに進んでいった。助手席にリチャードを乗せ、輝がハンドルを握っていた。後部座席に三人は身を隠し、車の振動だけを感じていた。トラックに乗っているとはいえ、今の日本に安全な場所など無いに等しく、気を緩める訳にはいかなかった。原宿辺りに差し掛かった時、対向車線に二台の車のライトが近づいてきた。サーチライトの明りは無く、トラックよりも小さな車のようなだったが、判断できなかった。助手席のリチャードはいち早く確認しようと、フロントガラスに近づき目を凝らしていた。その手にはトラックに積んであった米軍のヘルメットが握られていた。街燈の消えた街では対向車のライトに阻まれ、センターラインすら容易に判別出来ないでいたが、不意にリチャードがヘルメットをかぶせ叫んだ

「アメリカ兵です。何気なく通りすぎてください」

ヘルメットを目深にかぶり、輝は小さく頷いた。その車両は星印のついたジープで、三人の兵士がそれぞれ乗車していた。輝は言われた通りそのまますれ違った。それと同時にスピードを少し上げた。ジープの兵士の上げる手が輝の視界にも一瞬入ったが、後はミラーに映るバックライトのみが、相手の行動を知る唯一の情報源だった。ミラーに集中し怪しまれずに済んだことを祈りながら、輝は更にスピードを上げていった。

突然、ミラーに映る赤いライトが一際光を発し、ミラーから消えうせた。輝はホッと溜息をついた。が、次の瞬間、今までより一段と強い光が、輝の目を串刺しにした。

「ユーターンしてきた、ばれたか」輝の言葉にいち早く反応したりチャードは窓から顔を出し、後方に目を凝らした。

「追って来ます。二台とも向かってきます」リチャードの切迫した声に、後部座席からエリザベスが叫んだ。

「お願い、止まって、攻撃されるわ」

「お前は、黙って隠れていなさい。まだ、攻撃された訳ではない」リチャードはエリザベスに言い聞かせ、素早く毛布をかぶせた。

「左車線を行ってください」リチャードの言うまま車線変更をする、と、追ってくるライトは助手席側に移動した。ミラーの中のライトがパッシングをはじめた。

「スピードを落として、でも決して止まらないで下さい」リチャードには何か策があるらしく、輝は素直に従うことにした。リチャードはわざとヘルメットをはずし、きれいな金髪を窓からさらした。やがて追いついたジープの兵士はリチャードに叫び始めた。

「貴様民間人だな。車を止める」兵士の銃の狙いはしっかり定まっていた。

「私は医者だ。重症患者を運んでいる。撃たれたアメリカの将校だ」
「どこまで運ぶつもりだ」兵士は尚も叫んでいた。

「作戦本部だ、先導してくれ」リチャードも叫び返した。

「判った、先導する。しっかり付いて来てくれ」兵士を乗せたジープはトラックの前に移動して、徐々にスピードを上げていった。重症の将校と、作戦本部に向かうと言う事でどうやら信じたらしかったが、なによりリチャードが信用されたようだった。それからリチャードは輝に向かい静かに諭すように話し始めた。

「とりあえず、本部までは安全でしょう。問題は本部に着いてからです。私達は司令官の友人ですが、貴方はまず捕まるでしょう。しかし必ず助けるよう司令官に頼みます。それまで我慢してください」

「リチャード、私は貴方を信じます。多分杉本も」

「はい、信じます」後部座席から杉本の小さな声が聞こえてきた。

「有難う、必ず助けます。リサを助けてくれたように」

「私も頑張る」今度はリサの声だった。

いつの間にかジープは一台になっていた。遠くでかすかに爆発音が聞こえたかと思うと、ジープがリチャードの横に並んできた。

「本部が攻撃されていて、向かう事が出来ない。有明の基地まで先導するが将校殿は大丈夫か」兵士に大声で尋ねられ、リチャードも大声で答えた。

「重症だがまだ大丈夫、今は安定している」リチャードは答えた。
「どうにか、もたせてくれ」

「とにかく、急いでくれ」リチャードの言葉にアメリカ兵は頷くとジープは東方に進路を変えた。

「有明には、知人はいません。どうしましょう」輝に向き直りリチャードが尋ねた。輝は暫く考えこんでから口を開いた。

「幸い今、ジープは一台ですね。どうにかまければいいのだが」
後部座席から杉本が起きだし呟いた。

「ここからだったら湾岸線の首都高速ですよ。ジャンクションで別れてしまえばいいですよ」

「それしか手がない様だ、気づかれない程度に距離を空けて付いて行こう」

案の定ジープは芝浦から高速に入っていった。こんなにも走りやすい首都高速は初めてだったが、時折止まっている乗り捨てられた車には、十分注意をする必要があった。

「さてどっちに向かうか」レインボーブリッジの上で輝が静寂を破った。

「そろそろ距離を空けるか」徐々にジープとの間隔が開いた時、ジープは有明ジャンクションを辰巳方面に滑りこんで行った。輝はぎりぎりまで左車線走りそして叫んだ。

「つかまれ」その声と同時にトラックは大きく揺らぎ、右車線に飛びこんだ。アクセルを目一杯踏みこみ、東京港トンネルに向かつて速度を上げていった。後方を見守っていたリチャードが嬉しそうに輝に伝えた。

「追ってきません。まだ追ってきません」

「しかし安心は出来ません、気づかれたら速度では到底ジープにはかなわないでしょう」輝は冷静に答えた。

「先生、大井で降りましょう、高速よりは見つかり難いでしょう」「どこか隠れ場所を探すか」輝がそう言い、ふと港に目をやると、巨大な戦艦と航空母艦が目に入った。

「あれを見る、杉本君」輝の指を差した方向に目を向けた杉本は、しばらく言葉を失った。

「本気だ、奴等本気になっちゃった」杉本の言葉と同時に、リチャードは頭を抱えてしまった。

「どうしたの」リサが後部座席から身を乗り出し輝に尋ねたが、輝は無言で海上を指差した。海上の物体を見たリサは、エリザベスに抱きつき泣き出した。

「どうなるの、これからどうなるの」無論エリザベスは何も語らず、ただリサを抱きしめるだけだった。大井で高速を降りた時、輝がまたも口火を切った。

「リチャード、貴方達を基地の近くまでお送りします。そこで分かれましょう。安全な基地はどこ知りませんか」

「あなた達はどうするのですか」リチャードは尋ねた。

「まだ判りませんが、私達が一緒だと貴方に危険が及ぶでしょう。アメリカ軍に保護してもらって下さい。そのほうが家族全員安全です」

「友人は作戦本部の司令官だけだが、私が説明すれば、どここの基地の責任者だつて判つてもらえるはずです。一緒に行きましょう」「リチャードの誘いに気持ち揺らいだが、輝はきっぱりと断った。

「いえ、いいんです。日本はもう終わりでしょう。しかし私は日本人です。運命ならば共に終末を迎えたいのです。こんな国でも愛着がありますから」ひと呼吸おいて輝は話を続けた。

「杉本君、君は一緒に行きなさい」突然の言葉に杉本は驚き、咄嗟に言い返した

「私は、先生と行きます」杉本の口調には断固としたものが感じら

れたが、輝は無視した。

「君は、ジャーナリストに成りたかったのだろ。アメリカの保護の元、立派にジャーナリズムを貫いて欲しい、そして世界に伝えて欲しい」

「それなら、尚更いけません。リチャードのお蔭で保護されても、完全な自由など無いでしょう。何も出来なくなりです」杉本の考えは多分合っているだろう。アメリカ本土に送還される事は確実だと輝にも想像できた。しかし杉本の命はどうしても助けたかった。それほど彼はまだ若かった。暫くしてリサが口を挟んできた。

「ママ、おじいちゃんに頼めないの」

「おじいちゃんは今、ワシントンよ。連絡とれないわ」エリザベスの答えは簡単だが、リサを説得するには十分過ぎた。今、日本の通信システムは稼働停止の状態だった。

「軍の基地からなら連絡とれる」リチャードが何か閃いたらしく、リサとエリザベスに向き直った。

「今から言う事を、良く聞きなさい。お前達二人を基地に送って行く。そこからなんとしてもワシントンと連絡をとって欲しい」

「貴方はどうするの」リチャードの顔を見つめ、エリザベスは尋ねた。

「私は二人と行動を共にする」リチャードははっきりと答えた。

「ちょ、ちょっと待ってください」慌てて輝が口を挟むと、リチャードは静かに話し始めた。

「私に考えがあります。私を信じてください」リチャードは胸ポケットから手帳を取り出し何かを書き始めた。そして手帳から千切ったその紙をリサに渡し、ゆっくりと言い聞かすように話した。

「いいかねリサ、おじいちゃんに、書いてある通りに伝えなさい」リサは黙って頷き、ポケットに紙を詰め込んだ。そしてリチャードは輝と杉本を車から降ろし、ハンドルを握った。

「ここで隠れて待っていてください。必ず戻ってきます。それに燃料も入れないと」そう言い残すとトラックはゆっくり走り始めた。

リサが窓から顔を出し何か言おうとしていたが、そのまま闇の中に消えて行った。

他国介入の危機

—

リチャードの考えが読めない輝は、とにかく待つことしか出来なかった。だが、二人には確かな信頼関係が生まれていた。

「どこかに隠れて待つことにしよう」輝はいった。

「そうですね道路で待つわけにはいきませんよね」杉本はそう言って辺りを見回した。どうやら鮫洲駅の近くだと確認できた。

「あそこに、運転免許試験場があります。中に入りましょう」杉本の意見に従い、道路を渡ろうとしたとき、一発の銃声が辺りに轟いた。急いで戻りガードレールに身を隠すと、二発目の銃弾が目の前の道路にめりこんだ。

「アメリカ兵でしょうか」辺りを見回し杉本が小声で話しかけた。

「兵隊ならば、もっと正確に撃ってくるさ」輝が至って冷静なのに気づき、杉本は少し安心したようだった。単発の銃声は相手が一人だと言う事を物語っていた。

「反対組織の見張りか何かだろう」輝はそう言うと、両手を上げ道路に出て行った。

「戻ってください」杉本は輝の行動を止めようとしたが、輝は既に道路の半ばに達していた。しかし幸いに銃声は響かなかった。その代わり銃を構えた人影が、試験場の入り口に姿を現した。

「我々は日本人です」輝には確信があった。

「そこで止まれ」その人影は、輝が思った通りに日本語で話し始めた。

「ここで何をしている」しかしその声は、輝の予想に反し、か細い女性の声に感じられた。

「安全な場所を、探しています」輝の言葉に声の主はそっけなく答えた。

「安全な場所など、日本には無い。早々に立ち去りなさい」

「では貴方は、ここで何をしているのですか」輝は両手を上げたまま、徐々に近づいて行った。

「私の事などどうでもいい事だ。構わないでくれ」その影は二、三步下がった。無理に男言葉を使うのが良く伝わった。

「だったら何故、撃ってきたのですか」輝は話を止めなかった。

「その事は謝る」か細い声は銃を下ろした。

「一人ですか」輝がそう言う頃には、もう手の届くところまで近寄っていた。杉本も輝の直ぐ後ろに立っていた。

「彼は杉本、私は長田です。宜しく」差し出された手を見つめたまま、その人物はうつむき黙っていた。帽子を深くかぶり、顔の半分以上をマフラーで隠し分厚い迷彩柄のコートを羽織っていたが、女性の体型を隠す事は出来なかった。

「大丈夫、味方です」そんな輝の言葉に、怒りを発した人物は叫び始めた

「味方はいないわ、みんな敵よ」声色は完全に女性に戻っていた。

「敵、誰が敵なんだい」輝は静かに尋ねた。

「私以外、みんな敵よ、日本人も外人も無いわ」そう言うと、銃口を輝に向けた。

「何があつたか知らないが、少なくとも君に危害を与えるつもりは無い。それでも私は君の言う敵かい」輝は、出来る限り優しく尋ねた。

「みんなそう言ったわ、味方だね。あの日本人も、そしてあのロシア人も。だから私は、誰も信じない」そう答えると、引き金に掛かった指に力が入るのを、輝は素早く見抜いた。しかしその瞬間、気づかれずに近づいた杉本により銃を奪われ、その人物は門扉に押さえこまれた。杉本が素早く帽子とマフラーを剥ぎ取ると、月明かりの中見覚えのある顔が浮かんだ。まだ若い、実力のある女優、

木立 麗 がそこに立っていた。

「貴方は」輝は正直に驚いた。杉本も押さえこむのを止め、しばしばー然としていた。

「貴方達も、私を襲うのね。やはり敵よ」その目は憎しみに満ちていた。

「何もしません」輝は慌ててかぶりを振った。

「うそ、現に襲っているじゃない」とうとう女優は泣き出してしまった。

「参ったな」輝と杉本は顔を見合わせ、困惑してしまった。どうやら辛い目に合ったらしい事は、容易に想像できた。杉本はマフラーを巻きつけ、帽子を女優にかぶせた。それから輝に歩み寄り小声で話し始めた。

「何があっただんですかね」泣きつづける女優に声を聞かれないようにしながら。

「分からん」輝も小声で答えた。すると、泣きつづけていた女優は静かに立ちあがり、涙を拭い毅然とした態度で、二人の元へと歩き始めた。

「好きにすればいいわ」その声はドラマの中の声と少しも変わらなかった。さすがは大物女優の貫禄だと輝は思ったが、とにかく誤解を解く必要があった。

「本当に何もしません。信じてください」しかし、女優の目から、憎しみの火は消えなかった。困り果てている輝を、女優はじつと見据えていた。すると、杉本が一步女優に歩み寄った。と同時にその頬に平手打ちをかました。

「いいかげんにしたまえ。何があったか知らないが。私達は何もしない。信じなさい」杉本に平手打ちを受けた女優は、その場所に力なく座りこんでしまった。そして静かに話し始めた。

「本当に、本当に信じていいのね」

「ああ、信じていい」杉本は女優の側にしゃがみこみ、出来る限り優しく答えた。

「ありがとう、信じるわ」そう言うとまた涙を流し始めた。

「話してくれるかい」女優の涙を指で拭い、杉本は尋ねた。

「話さなくちゃダメ」女優は懇願する眼差しで杉本を見返した。

「話したくなければ、何も聞かない」杉本はいった。

「ありがとう」女優に小さな笑顔が戻った。

「とりあえず、中に入ろう」輝は二人を促し、先に試験場の建物に踏み入った。杉本は女優に寄り添いあとに続いた。待合室の中は静寂に包まれていた。時折聞こえるのは、吹きつける風が窓を揺らす音だけだった。長いすに女優を座らせると杉本は静かに尋ねた。

「一人で大変だったね」優しく話す杉本を見つめ、女優はゆっくり口を開いた。

「洋子です。本名は平凡でしょ」そして小さく笑った。

「いえ、いい名前です。実は貴方のファンです。叩いてすいません」杉本は深く頭を下げた。そんな杉本を洋子はじっと見ていたが、やがて静かに話し始めた。

「私はマネージャーと海外に脱出するつもりで、羽田に向かっていました。それまでプロダクションの事務所に、他のタレントさんと共に隠れていましたが、脱出する船が見つかり、羽田近くの新多摩川まで移動中でした。十人ほどが一台のバンに乗っていました」洋子は大きく息を吐き出し、話しを続けた。

「そして、襲われました。武装した日本人が五人ほど、私達の乗った車を止め、中を検めました。ほとんどが売れているタレントだったので、驚いていましたが、一人の男が悪戯を始めました。それを皮切りに男たちに次々と路地に連れ込まれ乱暴されました。止めに入ったマネージャーは射殺され、恐怖に凍りついた私達は身を任せしかありませんでした」洋子は流れ出た涙を拭こうともせず、話し続けた。

「満足しきった男たちは、笑いながら私を見下ろし仲間と雑談を始めました。男たちの目を盗み、無我夢中に走り始めました。他のタレント達もバラバラに走り出しましたが、男たちは諦めませんでしたし

た。男たちもバラバラに追いかけ始めました。あちらこちらで銃声や、悲鳴が聞こえましたが、私はとにかく走り続けました。私の耳には追いかけてくる足音がはっきりと聞こえていました。どこをどう走ったか判りませんが、気が付くと追いかける足音が聞こえなくなりました。疲れきった私は道路にうずくまり涙を流していました。そこに人間の頭を持った、兵隊の格好をした男が現れました。もう大丈夫、始末しました。味方です。と男は話し始めましたが、日本人ではありませんでした。男はロシア人だと言っていました。アメリカから日本を守る為に極秘に来たと「輝は話しの邪魔をしないように、二つ後ろの長いすに腰を下ろした。洋子の話しはまだ終わっていないかった。

「そのときの私は素っ裸の格好でしたが、ロシア人兵士は躊躇することなく私を抱きかかえ、建物に入りました。するとにやりと笑い、またも私は乱暴されました。長いすに押し倒され無理やり犯されました。疲れきった私には兵士に抵抗する事も出来ず、ただされるままになっていました。そんな時、兵士のベルトのナイフに気がつき抜き取りました。勿論戦う為ではなく、自ら命を絶とうと思い抜いたのですが、兵士には挑戦に見えたのでしょうか。体を離すとしきりに挑発してきました。そのとき恐怖の気持ちが増しめへと変わったのでしょうか。気が付くとロシア人は床に倒れていました。胸にはナイフが刺さったまま息絶えていました。それがここです」洋子はやっと涙を拭い、杉本の手を引き事務所に案内した。そこには下半身裸の外人が横たわっていた。輝がナイフに手を掛けたが容易には抜けなかった。血は固まり、目を見開いた顔は真っ白に変色していた。

「いつの事ですか」輝の問いかけに、洋子は静かに答えた。

「三日前のことです」輝は頷きながら注意深く死体を観察した。

「認識票とか、何か身分証明になすものを見ましたか」輝の問いかけに、洋子はただ首を振っただけだった。輝はふと、杉本の肩に掛けられたライフルに目が止まった。ライフルを手に取り銃身の付け

根に目を凝らすと、AKS74Uの文字が読み取れた。たしかロシア製の銃だと、前に見た資料に出ていた覚えがあった。それを見た洋子は、ベルトから拳銃を抜き輝に手渡した。その拳銃にはPSMの文字が刻まれていた。これもたしかロシア製の拳銃だったと、輝は記憶していた。

「確かにロシア製の武器だが、本当にロシア兵だと大変なことになるぞ。日本を舞台にアメリカとロシアが戦争を始めることになる」輝の言葉から、杉本と洋子は戦慄を覚えずにはいられなかった。

「この先どうなるの」先に口を開いたのは洋子だった。

「早く、逃げ出しましょう」杉本の言葉を輝が遮った。

「もし、本当に戦争になったら、どこにも逃げられない。全世界に飛び火するだろう。何とか阻止しなくては、われわれ、いや、全人類の滅亡につながってしまう」輝は言った。

「でも、どうやって。我々には戦う戦力も、武器も、知恵もありません」杉本に言われ、輝は考えこんでしまった。そしてゆっくりと口を開いた。

「とにかく、日本の組織と接触する事だ。そしてロシア兵のことを伝えなくては」

「リチャードはどうします」立ちあがった輝を止め、杉本は洋子に聞かれないように尋ねた。

「わたし一人で行ってくる。君は洋子さんとリチャードの帰りを待っていてくれ」輝も小声で答えた。

「危険です。信じてもらえないかも知れませんが」杉本は必死に止めようとした。

「どうせ日本と運命を共にしようと考えていたんだ。けど戦争だけはどうか止めたい。人類の為にも。今度世界大戦が勃発すれば、どうなるか君にも想像がつくはずだ」輝の意思は固まっていた。今、東アジアは緊張の真っ只中にあった。ここで紛争が起これば、中国、北朝鮮までもがこの事態に便乗してくるのは目に見えていた。更にはアメリカの防衛戦略を快く思わないヨーロッパ諸国まで介入して

きたら。輝の脳裏には人類滅亡のシナリオが具体的な形で浮かんできた。急がなくては、時間が無い。輝は焦る気持ちを押さえ洋子に尋ねた。

「思い出させて悪いが、君等が襲われた場所を教えてください」洋子は一息ついて答えた。

「確か品川駅を過ぎてからだと思います」

「ありがとう、とにかく行ってみる。リチャードが来たらこの事を伝えてくれ」

輝は拳銃だけを受け取り、試験場を後にした。幸い試験場には燃料の入った小型バイクが放置されていた。イグニッション部分を壊し、直結にすると、バイクは低い唸り声を上げた。勿論バイクの免許は持っていないが、思ったよりはスムーズに走らせる事が出来た。

バイクのエンジン音は、闇夜の静寂を破り町を疾走した。交差点、曲がり角、いつアメリカ兵と出くわすか、恐怖しながらも輝はアクセルを吹かし続けた。接触したらなんと説明しよう、ロシア兵のこととは知っているのか、と考えながら、人っ子一人いない街を走り続けた。そろそろ品川駅に着くだろうと思ったとき、輝は目の前の明るい光に照らされた。と同時に英語が飛び交った。英語ははつきりと停止命令を発していたが、ここで止まるわけにはいかなかった。商店街のわき道に滑りこみ、アクセルを全開に開いた。比較的広いアーケードの商店街は、やはり破壊され尽くしていた。通路にはガラスが散乱し、数えきれないゴミが撒き散らされていた。輝は仕方なくアクセルを戻した。バイクのエンジン音が幾分静かになると、耳障りなエンジン音が微かに聞こえてきた。そしてバックミラーに鋭い明りが映り始めた。慌てて振り向く輝の目に、猛スピードで追って来る車のライトが飛び込んできた。急いでアクセルを吹かしスピードを上げたが、目の前に現れたバリケードに気づくのが遅れ、横滑りのまま突っ込んでしまった。車はゴミを跳ね飛ばしどんどん近づいてきた。バイクの下から這い出した輝は、足の痛みに耐えながら、バリケードをよじ登り始めた。しかし捻挫したであろう左足

は言う事を聞かず、容易に登る事が出来なかった。追跡者の車両は直ぐ目の前まで迫っていた。そしてブレーキの音と共に、数人のアメリカ兵が車から降りるのを、輝はバリケードに虫の様に張りつき、見守る羽目になった。車のライトに照らされ、まるで射撃の的にされたようだった。アメリカ兵は横一列に広がりゆっくり近づき、そして銃を構えた。問答無用、本当に射撃の的にするつもりらしかった。アメリカ兵は何も言わず、ただ低い笑いを発しているだけだった。輝は全身から汗がどっと噴出すのを感じ取り、思わず目をつむった。「死ぬときはこんなものか、我ながらあつけないな」そんなことを考えていると、激しい銃声が辺りに鳴り響いた。ところが不思議と輝にはなにも感じられなかった。硬く閉じた目を恐る恐る開くと、アメリカ兵は全て通路に倒れていた。何がなんだかわからず、アメリカ兵を見つめる輝の身体が、不意に持ち上げられた。

「もう大丈夫だ」声の主は静かに囁いた。

「隊長、早く撤退しましょう」別の声が輝の耳に飛び込んできた。振り向く輝の目に、迷彩服姿の日本人がはつきりと映し出された。

「今の銃声は奴等にも聞こえただろう、新手が来る前に貴方も逃げたほうがいい」隊長と呼ばれる男は立ちあがりながら言ったが、輝を見て一瞬考え、そして「一緒にくるか」と、付け加えた。輝は何も言わずただ頷いた。無論、探していたとはいえなかった。ほかに三人の男たちがいたが、みな相当訓練されている事は輝にも伝わった。真つ暗な街中を音も立てずに移動する男たちに、足を引きずりながらも輝は必死について行った。商店街を抜け、国道に差し掛かった時、先頭の男が右手を上げた。合図と共に男たちは素早く物陰に身を隠した。輝は後ろを歩く男に抱えられ、建物の隙間へと引つ張りこまれた。やがて目の前の国道を、数台の車両が通りすぎて行った。

「どこまで行くのですか」輝は小声で男に尋ねた。

「もうすぐだ」男が答えた時、微かな口笛が聞こえてきた。

「さあ、いくぞ」男に促され建物の間から滑り出ると、男達はすで

に前進を始めていた。そして一行は、地下へと続く暗い階段に姿を消して行った。都営三田線、白金高輪駅。暗がりの中、輝は微かに文字を確認する事ができた。先頭の男が懐中電灯に灯りをともした。あかりに照らし出された地下通路は、ほとんどそのままの原型を残していた。いつもは人々の行き交う通路に、足音だけが静寂を妨げていた。幾つかの階段をくだり、ホームにたどり着くと、男達は次々と線路に降り立った。枕木の通路を更に深いトンネルへと足を進めて行った。どの位歩いただろうか、やがて線路から伸びる横道へと、男達は入っていった。

真つ暗な細い通路を、輝は手探りで進んで行った。線路から百メートル程進んだ所に、小さな鉄製の扉が、灯りの中に浮かび上がった。先頭の男が扉を不規則に叩くと、鈍くきしんだ音と共に扉が動き始めた。輝はその光景に息を飲んだ。扉の向こうにはこうこうと灯りがともり、数百人の男達がひしめき合っていた。そして誰もが迷彩服に身を包んでいた。

武器を手入れする者、地図を見ながら話し合う者、煙草を吸っている者、寝ている者、良く見ると女性まで混じっていた。輝はしばしア然となったが、黙ってあとをついて行った。しばらく回りに気をとられたが、不意に隊長と呼ばれる男に素早く駆けより早口に尋ねた。

「こつ、ここはいつたい」輝に振りかえり、男は答えた。

「驚くのも無理はありません。ここは国家機密の場所です。都市にはこんな場所がいくつかあります。皆さんが知らないだけの話です」輝は辺りを見回し更に尋ねた。

「ここで何をするのですか」前を見て歩きながら男は答えた。

「日本の国家保安局は、今回の事態に対処すべく行動を開始しました。逃げ出した政府の人間もいますが、大半の関係者はまだ日本にいます。我々のように隠れています。日本を守る為必死に戦っています」

「貴方達はやはり自衛隊の方ですか」

「自衛隊の中にも、国家保安局の存在すら知らない隊員がいます。と同時に色々な分野に関係者がいるのです。警察や民間の中にもいます。科学者や物理学者、医者など多岐にわたっています。有事の際には皆が集まります」男は新たなドアを開け、輝を促した。

「どうぞ、非難した民間の人達です」その部屋には、普段街で見かけるような男女が、肩を寄せ合い座りこんでいた。

「貴方同様、街で保護した人達です。安心してください」そう言うと、男は部屋を出ていこうとした。輝は慌てて男の腕を掴み、早口で話し始めた。

「この指揮官に合わせてください。とても重要な事です」

「指揮官はとても忙しい。私で良ければ聞きますが」男は冷静に言葉を返した。

「急いで話さなければ。その為に私はきたのです。それにここでは……」輝はチラッとあたりを見回したが、気に留めている者はいなかった。皆、うつむき頭をうなだれているだけだった。男は一瞬ためらったが、ここで待つようにと一言残し、部屋をあとにした。

部屋の中では、すすり泣く声や、溜息混じりのひそひそ声が聞こえるだけだった。人々は絶望の淵に立たされた難民そのものだった。五分程して男が戻ってきた。

「こちらに」輝は男のあとに続いた。長い通路を更に奥へと進むと、大きな会議室だろうと思える部屋にたどり着いた。そこには見た事も無い機械が並び、世話しなく動く兵士と、数人の将校らしき人物が立っていた。部屋の中央のテーブルには、見るからに上級士官と分かる男達が席についていた。

「どうぞ腰掛けて」入り口付近の将校に促され、輝は椅子の一つに腰を下ろした。

「指揮官の山中です。何か重要な話があるとか？こんなときにはどんな些細な情報でも役に立つでしょう」正面の紳士然とした男が口を開いた。

「はい、東京湾で戦艦と空母を見ました」輝は簡単に答えた。

「それは我々も確認済みです。海の底にも同志はいるのです。あれを御覧なさい」壁にはめ込まれた日本地図に、無数の赤い点が光っていた。

「全て、同志です。心配なさらなくとも、必ずや現状を打開するつもりです」山中の言葉には自信が満ち溢れていた。

「生活に不自由があるでしょうが、ここにいれば安全です」

「ロシア人兵士のことは、ご存知ですか」輝は山中を見据え言葉を発した。徐々に山中の顔にかげりが浮かぶのを、輝は見逃さなかった。

「特殊部隊でしょう。認識票すら持っていないませんでした」

「確かにロシア兵かね」山中の口は重かった。

「自ら話したそうです。それから」輝は腰から銃を取り出し、テールを滑らせた。

「ロシア製 P S M 拳銃、これを持っていました」山中は拳銃を手に取り、将校に渡した。その将校は一瞬に判断を下し、はつきりと頷いた。

「そのロシア兵はどうしたのかね」山中の問いに、輝は簡単に答えた。

「死にました」

「君が殺したのかね」

「いいえ」

「では、事故かね」暫く輝は考えてから、事の成り行きを山中に伝えた。

「すると、アメリカから日本を守る為来たと言うのか。信じられん」山中は腕組みをし、考えこんでしまった。

「どちらにしても、日本の中で大規模な戦闘が起きたら、しかも、アメリカとロシア、この二大国が始めたら、我々だけの問題では済まなくなり、全世界をも巻き込むでしょう。それだけはなんとかして避けなければなりません」輝の言葉には、何時になく力がこもっていた。山中はじつと上目使いに輝を見つめていたが、やがて静か

に口を開いた。

「我々としては、ロシアと共同してアメリカを駆逐したい。そうすれば日本の国は生き延びる、滅びずに済む。しかしロシアが日本の味方に付いたからと言って、アメリカも簡単には諦めないだろう。逆にチャンスとばかりにロシアにも戦闘を仕掛けるかもしれない。必然的に君の推測通りの結果になるだろう。とにかく私一人では答えを出せない。君には礼を言う、戻って休んでくれ、それと、この件はくれぐれも内密に」

「分かりました。でも、仲間の所に戻ります」輝が立ちあがると、隊長、と呼ばれていた男が部屋に入ってきた。そして山中はその男に言った。

「一緒に行つて、彼の友人を保護してきたまえ」男は山中に敬礼を返すと、輝に向かって頷いた。歩きながら男は自己紹介を始めた。

「私は黒部といい、陸上自衛隊の特殊部隊に所属していました。報道のあつた日からずっとここにいます」輝はゆっくりと手を差し伸べた。

「私は長田 輝と言います。小説を書いています」黒部は少し考えてから輝に言った。

「すいません。自分はあまり本を読まないので、存じ上げていません」

「構いません。どうか食っていける程度の作家ですから」輝が小さく笑うと、黒部も微笑んだ。しかし輝は一人で戻りたかった。もしリチャードが戻ってきていたら、そう思うと黒部にいて欲しくなかった。

二

杉本は風の音にも、敏感に反応していた。

「神経が壊れる」杉本の独り言に、洋子は笑っていた。

「あら、人をたたく割には随分と弱気な事を言うのね」洋子に言わ

れ、杉本は少々頭に來たが、その屈託の無い笑顔を見ると、不思議と気持ちが落ちついた。

「そうですね、今は頑張つて貴方を守らないといけないのに、恥ずかしい限りです」杉本が頭を掻く姿を、洋子は黙って見ていた。やがて洋子は杉本を見ながら話し始めた。

「二人はどこに行くつもりだったの。何か当てがあつたのかしら」洋子に尋ねられ、リサの事など話してもいいものか、思案しながら杉本はためらいがちに答えた。

「実はある人と待ち合わせているのです。力になってくれると言うので」

「他にも誰か来るの、ここに」洋子は慌てて問いただした。

「いえ、この近くにです。でも安心して、我々の味方です」

「私の味方は、今は貴方達だけ。他の人は絶対に信用しないわ」洋子は自分に起きた出来事を思いだし、身を振るわせた。杉本には、洋子の気持ちが痛いほど分かったが、どうしても理解して欲しかった。

「ずっとここに居るわけにはいきません。誰かに力を借りなくてはならないのです。分つて下さい。貴方を危険な目には合わせません」杉本は必死に説明しようとした。

「その人達に会わなければ、今、私はここには居ません。私達二人にも、いろいろな事がありました。まだ元気に生きています。私の味方は、貴方の味方でもあります」そして今までの、一部始終を洋子に伝えた。相手がアメリカ人と知つて、洋子は恐怖の色を顔に浮かべた。洋子は爪をかみ、暫く考えたが、やがて笑顔で杉本に言った。

「信じるわ、その人じゃ無くて、あ、な、た、を」杉本の鼻を指で突つき、話を続けた。

「でももしも輝さんの出会った人が、私を襲った男だったら、また襲ったらどうする、私を守ってくれる」洋子に言われ杉本は即座に答えた。

「必ず守ります。命にかえても」

「じゃあ、二人で逃げましょう、お願い」洋子に言われ杉本は困ってしまった。返す言葉を搜していると、杉本の顔を覗き込み

「うそ、貴方を信用するわ。だから裏切らないでね」洋子は目一杯可愛さを強調した。

「誓います。貴方を裏切りません」杉本は直立不動で胸に手を当てた。そんな杉本を洋子はほほえましく思った。だが同時に疑問も湧き出した。

「でも、会ったばかりで何故そこまで言えるの」洋子は質問した。

「貴方は私を知らないが、私は貴方を知っています。何時もテレビで見えていました。好みの食べ物や、趣味も、特技も知っています。私にとっては初対面ではありません」杉本の答えは、洋子の気持ちを和らげるのに十分だった。

「ありがとう、本当にファンだったの。でも、ほとんど作り話よ、イメージが大切だってね。弾けもしないピアノが特技とか、したこともない料理が趣味とか、取材のたびに気がおもったわ。」そう言う洋子は、遠くを見つめた。それから静かに語り始めた。

「私がこの芸能界に入った時は、まだほんの子供だった。ただ監督の言われるままに動いていたのに、回りは私を褒めちぎった。今考えると馬鹿みたいだけど、いい気になっていたのね、私も。でも年頃になって分かったの、私みたいのはいくらでも居るって。落ちこんだなあ、その時は。でも一度でもスポットライトに浴びた人間は、なかなかその光から抜け出せないの。だから何でもしたわ、監督やスポンサーに気に入られるように、・・・そう何でも」杉本は黙って聞いていた。

「今度の事だって、生き残る手段としては、今までと何ら変わりのない事だったのよ。それなのに泣くなんて、恥ずかしいわ。泣くのは演技の中だけで十分なのに」洋子の頬に涙が細い光の河を残した。「そう十分なのに、でも、でも悔しいの、こんな時だから余計悔しいの、お願いもう一度だけでいいから泣かせて」洋子は杉本の胸に

額を埋め、声も無く泣いた。洋子の手は強く握られ、必死に悔しさに耐えているようだった。そんな洋子を、杉本は無言で強く抱きしめた。時がたち、二人は無意識のうちに、激しく唇を求め合った。

三

明るくなり始めた街を、輝と黒部は慎重に移動していた。

「昼間の行動は危険です。戻りますか」黒部の言葉を輝が遮った。

「仲間は常に危険です。私一人でも戻ります。貴方は帰って下さい」語尾を強めて言ったが、黒部は気にも止めない様子だった。

「では、しっかりとついて来て下さい。少々遠回りになりますが、できる限り安全な道を探します。それに加えて民間のゲリラ部隊も激しく戦っているようです」そう言うと、黒部は歩調を速めた。今では銃声も絶え間無く響くようになっていた。輝は慌てて黒部の服を掴み、崩れかけた建物へ引きずりこんだ。

「民間だって、同じ日本人でしょう。助けないのですか」輝の質問に、黒部は答えた。

「助けたくても、出来ません。彼らは我々の指揮下に入る事を拒み、すぎ放題、勝手気ままに活動しています。監視は付けていますが、取り締まりは出来ないのが現状です」

黒部の言葉で、輝は渋谷のゲリラを思い出していた。外国人を拉致し、玩具にしていた部隊の事を。輝が気を静めると黒部が話し始めた。

「貴方は運がよかった。昨夜、我々はあのアメリカ部隊を監視していた。そこに貴方が乗り込んできた。正直言って驚きました。しかし無謀な行動には、何か秘密があるのでは無いですか。司令官とどんな話をしたのか、個人的に興味を引かれます」黒部には知らされていない様だった。しかし、これからいく所には、ロシア人の死体があり、武器があり、有名女優が輝の帰りを待っている。黒部だけには話す必要があった。

「日本には、どのくらい仲間が活動していますか」

「陸にも、海にも、至るところで展開しています。アメリカ軍の行動は常に監視され……」

「ロシア人は」黒部の言葉を輝は遮断した。

「ロシア人ですか」黒部は、輝が何を言うのか、見当も付かない様子だった。

「そう、ロシア人、しかも訓練された兵士です」崩れかけたビルが、砲撃に大きく震えた。

「いいえ、ロシア軍兵士は確認されていませんが、まさか」

「その、まさかです。日本国内に侵入しています。特殊部隊でしょう」

「でも、何故」黒部も、さすがに驚いた様子だった。

「一応は日本の味方だと云う事ですが、はっきりとは分かりません。私が話したわけではないのですが、ただ暗躍している事は事実です」輝の言葉に、黒部は何か納得したようだった。

「分かりました。とにかく急ぎましょう。お仲間のところへ」

「それと、何があっても驚かないで下さい」輝の言葉に、黒部は一瞬眉をひそめたが、ゆっくりと頷いた。

日中の移動には細心の注意が必要だった。どこでアメリカ兵と出合い頭で衝突するか、ましてやロシア兵まで暗躍しているとすれば、黒部の行動も自ずと慎重にならざるを得なかった。銃声、砲撃の音に混じって、多分軍用ヘリの音だろうか、バリバリと近づき、そして去っていった。いまや戦場は至るところで始まり、日増しに激しくなっていく。さらに、他国の介入が一層の拍車をかけているようだった。もしかしたらロシア軍は既に、民間のゲリラ部隊と接触しているかも知れない。少しでも危険を避けるため、商業地やオフィス街に比べ、さほど破壊されていない住宅地を、二人はゆっくりと進んでいった。静寂が流れる中、唯一、置き去りにされたであろう犬の鳴き声だけが響いていた。黒部の歩調も幾分早まったように感じられた。

「この辺には、多分誰もいないでしょう。前回の搜索の時には、確認されませんでした」

「前回とはいつですか」輝の問いに、黒部は簡単に答えた。

「二日前です」

「一軒、一軒調べたのですか」更なる問いに

「それは、無理です。ただ人の気配は、隠せるものではありません」と、黒部は答えた。その声には、訓練された兵士の自信が溢れていた。そんな黒部の言葉に輝は納得し、黙って黒部の後に従った。しかし住宅地が終わりを告げようとした時、黒部の足が突然止まった。前方には、またも大通りが見えてきた。黒部に身を伏せるよう指示され、輝の心臓は大きく鼓動し始め、辺りを見回した。しかし黒部の視線は、通りではなく、長い垣根に覆われた屋敷へと注がれていた。

「誰かいます。この中に」葉に覆われた垣根越しには、中の様子は確認出来ないが、黒部は気配を感じ取っているようだった。そしてゆっくり銃先を葉の間に差しこみ、静かに押し広げ、中の様子を確認しようと更に身を伏せた。

「カーテンが動いています。多分侵入者でしょう。気づかれる前に行きましょう。無駄な衝突は避けたほうがいいでしょう」

黒部が小声で輝に言うのと、突如として垣根越しに初老の男が顔を覗かせた。

「人の家の前で、何、ブツブツ言っているんだ」その男の手にも、しっかりと拳銃が握られていた。黒部は一瞬にして男に振り向き、銃を向けた。

「なんだ、兵隊さんじゃねえかい、ご苦労さん」そう男は言うのと、拳銃をそらせた。

「あんたは、ここで何をしている」黒部は銃をそらさず、男に尋ねた。

「何って、俺の家じゃ、文句は無いはずだが」男はにやりと笑った。「しかし危険ですよ」黒部がそう言った時、通りから重く響くエン

ジン音が聞こえてきた。

「ほれ、そんなところで話しこんでいると、見つかるぞ。回って入って来い」男はそう言うのと、裏手を指差し手招きをした。黒部と輝は素早く回り込み、裏手の格子戸に手を掛けた。芝生の手入れされた庭には、やはり銃を手にした、見るからに人相の悪い男達が三人いたが、不思議と二人を丁重に出迎えた。

「急いで中へ」一人の男に促され、勝手口から屋敷の中へと招かれた。広い母屋には幾つもの部屋があるようで、屋敷と呼ぶに相応しい佇まいだった。二人は応接間の奥へと通されたが、暗い座敷には座卓と、数点の美術品があるだけだった。おもむろに男が掛け軸に手を掛けると、どこかでロックの弾ける音が微かに聞き取れた。

「こちらへ」男が壁を押すと、漆喰の壁に小さく区切られた扉が出現し、そして音も無く開いた。男に続き、狭い階段を降りると、二十畳程の空間が二人の前に現れた。

「地下シェルターとは驚いただろう」先程の初老の男が、奥の椅子から笑いながら話しかけた。他にも十人ほどの武装した男達が、初老の男を囲むように立っていたが、とてもシロートには見えなかった。輝の顔には緊張の色が浮かんだが、黒部は冷静さを保っていた。「ここは、元々わし等の武器庫に使っていた。勿論、核シェルターにもなつとる。言わば隠れ家、非難場所だな」初老の男は、二人に椅子を勧めた。

「わしは、中村ゆう者で、ある種の人間にはちよいと有名なんだが、知らんだろうな」輝と黒部は、椅子に腰掛けてから、じつと男を見つめた。

「すいません、存じ上げないのですが」輝が言うと、中村は大声で笑い出した。

「あんたは、間違い無く普通のお人の様じゃ、サラリーマンかい」

「いえ、物書きです」輝の言葉に、中村の目が光った。

「ほう、物書きかい、わし等の悪口も書くか」中村に言われ、輝は慌てて否定した。

「いえ、物語です。架空の物語です。ジャーナリストではありませんせん」

「物語か、夢があつていい」中村は頷き、黒部に視線を移した。

「あんたは、自衛隊のようだが」

「陸上自衛隊です」黒部は、至つて冷静に答えた。そして逆に中村に尋ねた。

「何故、非難しないのですか」

「ふん、どこへ逃げると言うんだ。あんた等、国家の人間のせいであつたんだらう」

中村の目に、怒りの色が浮かんだが、直ぐに色褪せ消えていった。

「まあ、あんたに言つても仕方ない。とにかくわしには、まだこれだけの子分がある。こいつ等を置いて逃げ出せまい。皆、行く所なんか無い。それに、対暴法で縛られた上、ただでさえ外人マフィアに手を焼いておるのに、今アメリカになつたら、更に本土からも大量にやつて来るだらう。わし等は食つていけん様になる。だから、微力ながらも抵抗する為に残っている。まして、それで死ねれば本望じゃ」それから中村は、他にもそんな団体がいることを黒部に話した。暫くしてから黒部が口を開いた。

「中村さん、貴方に頼みがある」

「国家権力がヤクザに何を頼むつもりじゃ」中村は笑っていたが、黒部は話しを続けた。

「どうにか組織をまとめてくれないだらうか」

「どう言つことだ」

「我々の相手は軍隊です。統制の取れた最強のアメリカ軍です。日本を守る為には個別に対抗しても勝てません。犬死するだけです」

「あんた名前は」中村は少し考えてから尋ねた。

「はい、黒部です」

「よし、黒部さん、あんたの言う事は良く分かる。しかしそれは無理な事だ。組織間の抗争には根深いものがある、一つにはなれん。第一誰が指揮を取るつもりじゃ」

「私達です」

「君ら二人か」驚いた様に中村は、二人を交互に見据えた。

「いえ、実は……」黒部は、国家保安局の実態や、活動を細かく中村に聞かせた。驚きながらも話を聞いていた中村が、突然笑い始めた。「まだ日本も捨てたものでも無いな、そんな軍隊があるとは」

「ですが人手が足りません。お願いです我々の指揮下に入る様、皆をまとめて下さい」黒部の声は、いつしか大きくなっていた。

「他人に指図されるのは性に合わないだろう。こうなつては仕方あるまい。失敗するかもしれないがやる価値はある様じゃ、一般市民が戦っているのに、そつぽも向けないし、日本の未来の為団結するのは今しかないな」中村は、輝を見つめてから回りの男たちを見まわした。男たちは一斉に頷き、中村の意思に従う気持ちを固めた。軽い食事をだれた後、通信機を中村に預け、二人は屋敷をあとにした。街はあちらこちらから立ち上る煙に覆い尽くされ、午後の日差しを遮っていた。冬の凍てつく寒さは倍増し、街全体を震わせていた。

十四

杉本と洋子は肩寄せ合い、微動だにしなかった。その分二人の耳は研ぎ澄まされ、微かな音も聞き逃さなかった。しかし二人の顔には不安など無いようで、むしろ安堵の表情を浮かべていた。リチャードも輝も戻らずにいたが、杉本はこうして二人でいることに、不思議な幸せを感じていた。洋子も女優と言う殻を脱ぎ捨て一人の女となり、今を噛み締めていた。入り口からは死角になる場所のソファーに座り、壁にもたれ掛かっていた二人を、闇が支配し始めた時だった。扉の開く僅かな金属音に、杉本はいち早く反応し、自動小銃を構えた。洋子もナイフを片手に咄嗟に身構えた。

「杉本」闇の中、輝の声が小さく流れた。杉本は銃を下ろし死角より歩み出た。

「無事でしたか」そうは言ったものの、二つの影に思わず銃を構えた。
「大丈夫、こちら黒部さん。自衛隊の人間だ」輝の声に杉本は落ち着き、銃を下ろした。

「接触出来たのですか」

「ああ、聞いたら驚くぞ、とにかく奥へ」輝の言葉は、洋子には通じなかった。洋子はナイフを構え、じつと黒部を見据えていた。

「大変な目に会われたようで、しかし我々とは無関係です」黒部の言葉も、洋子の警戒を解くことは出来なかった。

「私はまだ貴方を信じません。味方は二人だけです」洋子の意思は固かった。黒部はジッポライターを取りだし、自分の顔を闇に浮かび上がらせた。

「この顔でしたか」

「分かりません。だって暗かったし、五人もいたので」しかし、洋子の気持ちも幾分落ち着いた様だった。

「洋子さん、とにかく奥へ」輝に言われ、洋子はナイフを下ろした。事務所で例の死体を見せられ、黒部は納得した様だった。そんな時、灯した明りの中で、洋子の姿を確認した黒部は、正直驚かされた。

「もしかして」黒部の言葉を、杉本が遮った。

「そうです。しかし、今は洋子です」黒部は咄嗟に状況を把握した。
「分かりました。洋子さん、よろしく」黒部の差し出した手を、洋子は握り返し答えた。

「私を見て驚いたのなら、例の悪党とは違う様ね」

「お目にかかれて光栄です」黒部も、洋子の味方と認められた様子だった。

「遅れまして、私は、杉本です」杉本の手を黒部は握り答えた。

「話しは聞いていました。有能な編集者だとか」杉本はテレながらも、輝を睨みつけた。

「ところで彼は」輝に小声で尋ねられたが、杉本は首を振るだけにした。

「そうか、まあ、話を聞いてくれ」輝の説明に、黒部が付け足す形

で、話しは進んでいった。杉本は、驚きと、喜びの表情で聞き入っていた。が、根本的な疑問を感じていた。

「それで日本は救われるのでしょうか。戦いがエスカレートする事は無いのでしょうか」

「国家保安局が、ロシアをどう対処するのか、またアメリカがロシアの介入を知った時、どんな行動を起こすのか、予測不可能な状態でなんとも言えません」一息ついて、黒部は自信に満ちた表情で話しを続けた。

「ただこれは、明らかに侵略戦争だと言うことです」

「確かに日本は、アメリカになった訳ではありません。軍隊を他国に送れば侵略と見なされて当然です。極秘にですが、現にロシアも介入しています」杉本のジャーナリズム精神が頭をもたげ始めた。

「多分、近日中にも公式発表されるでしょう」黒部の言葉に、杉本はゆっくり頷いた。

「しかし、戦いを始め、外人の殺戮を始めたのは、日本人です」輝は、渋谷での出来事を思い出していた。リサの悲しげな目を忘れる事は出来なかった。

「それは、我々の判断の謝りでした。しかしこれを見てください」黒部は、一枚の印刷物を取り出し、輝に見せた。そこには日本語で（反乱軍諸君、速やかに武器を捨て、投降せよ、諸君に勝利は無い）と書かれていた。

「これは」輝が尋ねると

「三日前に撒かれた物です」と黒部は答えた。

「随分と威圧的な文章だな。内乱と思っているようだ」輝の言葉に、黒部は頷いた。

「アメリカ本土のラジオでは、国外向けに（内乱につき、手だし無用）と、伝えています。アメリカ国内では、反日感情が日増しに高まり、日系企業や、在米日本人、二世までも被害が及んでいるようです」黒部の話から、輝は虐待される日本人を思い浮かべた。

「戦場、つまり日本に来ている兵士や、ビジネスマンの家族ならば、

大人しくアメリカに属さない日本人を恨むのも当然でしょう。しかし、内乱としてしまうのは早計ですね」

「他国による軍事介入を防ぐ為の、布石でしょう。しかし、EU諸国は、アメリカに不信感を持っている様です」黒部の言葉に、杉本が付け加えた。

「日本を手中に収めれば、大国アメリカが、更なる力を手に入れることは明白です。経済力、軍事力、アジアににらみを効かす前線基地、どれをとっても他国には脅威です。世界はアメリカの意志で動く様になるでしょう。大変危険な事です。EU諸国の懸念も当然でしょう。先生の言葉とおり、世界大戦になるのでは」

「そうならぬよう、平和的解決を望みましたが、武装解除をしなければ、話し合いには応じない、と回答が送られました。しかし、話し合いが決裂しても、武器を放棄したあとでは、二度と抵抗出来なくなります。それは、われわれの敗北と、日本の消滅を意味します」黒部は、きっぱりと答えたが、重い沈黙が辺りを包んだ。

「アジア諸国はどうでしょう」突然の輝の問いに、黒部は暫く考えた。

「アジア諸国の話しは聞き及んでいません。しかし私の考えでは、反アメリカ思想がつよいと思います。が、過去の日本に対する恨みも、現在も根強く残っています。多分、傍聴席に座るのではないかと思われます。ただ、北朝鮮は参戦するでしょう。問題はどちらにも付かず恐らく日本の侵略を考えてくるでしょう」黒部の答えに、輝は同意する様頷いた。

「やはり一刻も早く、アメリカ側と話し合いをするべきでしょう」輝は、そうは言ってみたものの、計画の一部も見出す事が出来なかった。そんな時、黒部のレシーバーに通信が入った。どうやら中村からの通信で、一通りの話を終えた後、黒部の顔に笑みが浮かんだ。「一つの組織が味方になったようです。通信機を多量に持つてくる様頼まれました」

「よかったですね。早急に日本をまとめる為にも頑張つて欲しいで

すね」黒部は頷くと

「一般のゲリラ組織も、まとめる事が大事です」と、輝に呟いた。

「私は本部に戻って報告をした後、中村さんのところへ行きます。

ここでは危険でしょう、行きましょう」黒部の言葉に、輝は首を振った。

「私は残ります。ある人物と待ち合わせがあるので。杉本君は、洋子さんと共に行きなさい」輝に言われ、杉本は大きく頭を振った。

「私も残ります。戦闘が激化する中一人では危険です」輝は、杉本の言葉に大きく頷いた。

「そう、激化してきた。だからこそ洋子さんと行きなさい。ここから、本部までの道のりも、決して安全ではない。洋子さんを守る為にも」杉本は、暫く考えてから答えた。

「分かりました。しかし、決して無理をなさらぬ様、あとで合流しましょう」

「黒部さん、二人を頼みます」輝の言葉に、黒部は一礼を返した。

「では、これを持っていて下さい。予備の通信機です」黒部は、輝に通信機を渡すと、事務所を後にした。

「十分気を付けて」杉本は、それだけを言うと、輝と固い握手を交わした。洋子は、輝に向け深く頭を下げてから二人に続いた。それから辺りには完璧な闇と、静寂が訪れた。

危機を乗り越え

危機を乗り越え

—

都心部から時たま聞こえる爆発音のほか、輝の耳に入る音は皆無だった。輝はなぜか子供の頃を思い出していた。幼い頃に出ていった父の思い出と言えば、怒られたときに押入れに入れられた事だった。まさに今の状況が似ていた為であろう。真つ暗闇の中、孤独だった自分、ただ一つの違いは、涙を流していない事だった。母は苦労した拳、輝の成人を待っていた様にこの世を去った。人一倍他人を気遣う母が今の状況を見たら、さぞ悲しんだ事だろう。こんな日本を見なくて良かった、と思うと、輝の気持ちは幾分安らいだ。その時、輝の耳にヘリの音が聞こえてきた。しかも、猛スピードで近づきつつあった。傘に大粒の雨を叩きつけるような音が、どんどんこちらに向かってくるのに輝は身震いした。急いで表に飛び出し、空を見上げると、一機のヘリがサーチライトを輝かせ蛇行していた。まるで何かを追いかけている様子だった。物陰に身を伏せる輝の耳に、激しい銃声の嵐が轟いてきた。何かを追っているのは明確だった。地上に向けて発射される弾は、通り脇の建物を破壊していた。同時に、輝の目にトラックが飛び込んできた。輝は咄嗟に、リチャードのことを思い出した。案の定、トラックは、輝と杉本を下ろした場所で急停車した。そして輝の目には、トラックから転げ落ちる人影を捕らえていた。その人物が向かいの建物に飛び込んだ時、一発のロケット砲がトラックを木っ端微塵に吹き飛ばした。暫くヘリは辺りを旋回し、サーチライトを照らし続けたが、やがて飛び去っていった。ヘリが去ると、輝はダッシュで通りを渡り、人影が飛びこんだ建物に近づいた。建物に沿う様に近づく輝は、いきなり誰かに肩をつかまれ、路地へと引き込まれた。

「無事でしたね」なに事も無い様に、リチャードは笑っていた。

「どうしたんですか」輝の問いに答えもせず、リチャードは輝の手を掴み走り始めた。暫く走って民家に飛び込んでから、やっとリチャードは口を開いた。

「検問で、停止命令を聞かなかったら追ってきました。折角、燃料も入れたのに、もったいない」リチャードは殺されそうになった事など、なんとも感じていない様子だった。

「今ごろ、陸上部隊が到着しているでしょう。杉本さんは無事です。何処にいますか」

「杉本は無事です。安全な場所に避難しています」輝が答えると、「良かった、あの近くは危険です。探し回るでしょうから」そういつて、リチャードは大きく息をはいた。

「リサと、エリザベスは大丈夫ですか」輝の問いに、リチャードは片目をつむり、親指を立てた。

「無事、基地に送り届けました。ワシントンと連絡が取れたら、私にも連絡があります」

そう言つて、リチャードは小型のレシーバーを輝に見せた。

「ワシントンには、なんと言つつもりですか」

「自信が無いのでまだ内緒です。上手く行けば話します。杉本のところへ行きましょう」自分の言葉に反応しない輝を見て、リチャードは首を傾げた。

「どうしました。早く杉本のところへ行きましょう」輝は、躊躇いながらも今までの経過を話し始めた。

「まだそんな軍隊がいるのですか」リチャードは、はっきりと驚いていた。

「そんな簡単に、一つの国を買収できるとは思っていませんでしたよ」

「双方とも甚大な被害は、免れないでしょう。その為にも平和的解決が出来る事を願っています。でもどうしたらいいのか」考えこむ輝に、リチャードが話し始めた。

「私を連れ行つて下さい。ワシントンと連絡が取れば、お互い都合だと思えます。アメリカだって争いは避けたいはずです。ましてロシアまで介入しているとなれば、尚更でしょう。今までアメリカは多くの血を流しすぎました」リチャードの言葉に、輝は驚いた。「知っているんですか、ロシアの事を」

「アメリカの情報網は、世界一です。大分前から分かっている、事務レベルでは何度も話し合いがあったそうです」リチャードは、話を続けた。

「軍の中では、ロシアの参戦発表の前に核を撃ちこめ、との意見出しています。今のところ上院では否決されていますが、大統領の気持ち一つと言つても、過言ではありません。それに、ミサイル防衛システムの導入により、ヨーロッパ諸国の反応も微妙な段階で、アメリカは今、最も慎重に対処する場面を迎えています。仮に一発の核を発射すれば、その後アメリカは各国から標的にされるでしょう。平和的解決を望む声も多く出ています」リチャードの話が終わると突然、輝のレシーバーが声を発した。

「黒部です、応答してください」

「はい、聞こえます」教えられたとおり操作すると、容易に話す事が出来た。

「大丈夫ですか、こちらは無事付きました。どうぞ」

「こちらは、無事です。ありがとう」そして、輝はリチャードの事、案内しても構わないかと、黒部に尋ねた。

「私の判断では答えられません。そのまま待機して下さい」黒部がそう言つと、レシーバーから雑音が消えた。はやる気持ちを押さえ待っていると、再びレシーバーが声を発した。黒部とは違う声に一瞬戸惑ったが、聞き覚えのある声に人物が頭に浮かんできた。

「山中です、聞こえますか」

「はい、聞こえます」

「貴方を信じ、許可します。迎えを出しますか」山中の好意は嬉しかったが、輝は丁寧に断った。

「場所を移動しました。何とか行けると思います。ありがとうございます」

「それでは、くれぐれも気を付けて、激しい戦闘が続いていますので」山中の声を最後に、レシーバーは沈黙した。輝とリチャードは慎重に歩き始めた。都心に近づくにつれ、激しい銃声が響き始めてきたが、二人は上手く闇に紛れ、日が昇る前には地下鉄にたどり着いた。普段地下鉄など利用しないリチャードは、改めて感心して話し始めた。

「なるほどそう言えば、東京には地下鉄が縦横無尽に走っていましたね」ホームに向かう階段で、その声に反応する様に人影が飛び出し、ライトが二人を包んだ。

「大丈夫、見方です」人影の一人が発した言葉で、ライトは音も無く消え去った。

「杉本」輝の声で、相手がわかったらしく、

「おー、杉本さん」と、リチャードも喜んでいた。

「無事でなによりです。間違われると大変だと思い、待っていました」杉本と輝は、しっかりと抱き合った。それから杉本はリチャードとも固い握手を交わした。

「ありがとう、君には迷惑をかけてばかりだ」

「いやですよ、先生、私だって、あの時先生と会わなければ、あの後どうなっていたか、先生には感謝しています、本当に。でも無事会えて安心しました」暗闇の中、杉本の目に光るものを、輝は見た気がした。

「洋子さんは」輝の問いに、杉本は鼻をすすりながら答えた。

「ぐっすり寝ています。余程疲れていたんですね」と。

「彼女の無事は、君のお蔭だな」杉本は笑っていた。

二

山中は丁重にリチャードを迎え入れ、紳士的に握手を求めた。緊張気味のリチャードも、落ち着きを取り戻していった。

「まず、君にお礼を言いたい」山中は、輝にも握手を求めた。

「黒部小隊長は、通信機を持って出かけたが、じき戻ってくると思う」

「黒部さんの功績です」山中は、輝の言葉に頷いた。

「そうかの、わしゃ、あんたの瞳に惚れ込んだつもりだが」背もたれの高い椅子が回転すると、初老の男、中村が輝を見つめ笑っていた。

「驚くな、こいつとは同級じゃ」中村は、無造作に山中を指差した。「夕べ、黒部さんが寄ってくれてな、来てみて驚いたよ、お互い老けたが、すぐ分かったよ。昔は一緒に馬鹿をやったもんじゃ。それと更に、五つほどまとまったぞ、まだまだ小規模だが、全国に広がる勢いじゃ」中村は大声で笑っていた。

「それで、リチャードさんでしたね、話を聞かせて下さい」今までのやり取りをぼんやり聞いていたリチャードは、不意に話しかけられ戸惑った。が、やがて静かに話し始めた。

「アメリカは、最後の決断に迫られています。このまま戦いを続けるのか、手を引くのか、最終結論にも色々意見があります。軍部からは、核を使用しろ、との意見も出ています。しかしそうなれば、世界全土を巻き込むでしょう。アメリカ政府は諸外国の対応に翻弄しています。大半は日本から手を引け、との意見ですが、今のところ成り行きを見ている様です。しかし、長引かせる事は出来ません。ロシア同様、アメリカに対し、軍事行動を起こす国も出てくるでしょう」ロシアと聞いて、山中は頷いた。

「そのロシアですが、我々はコンタクトを取りました。十分な支援は出来ないが、このまま戦いが続けば新年早々にも、アメリカに戦線布告するつもりだといっています」リチャードは、山中の言葉を予期していたように、少しも驚かなかった。

「問題の一つは、日本です。ほとんどの政治家は逃げ出したと聞きました。まとめる事ができますか。政府の無い国は、ゲリラと思われるわれでも仕方ありません。それがアメリカの考え方です。だから、

どの国も参戦してこないのです。臨時で構わない、とにかく政府を機能させて下さい。政府が無ければ、話し合いも出来ません」

「しかし、アメリカ側からは、武装解除しなければ、話し合いには応じられないと通達があった。どうしろと言うのですか」山中に尋ねられ、リチャードは即座に答えた。

「問題の二つ目は、一般のゲリラです。抵抗をやめさせてください」「彼らに死ねと」山中は驚いた。

「いえ、保護して下さい。指揮下に入れるのです、鎮圧だけでもして下さい。彼らが好き勝手にアメリカ兵を殺していたら、話し合いなど到底出来なくなります。アメリカという国は、同胞が殺されたら黙ってられないのです。」

「それは既に試みましたが、失敗に終わりました。彼らは暴走しています。彼らまで敵に回す兵力は残っていません」山中の言葉に、中村が口を挟んだ。

「わし等に任せろ。軍隊相手じゃ心許ないが、ゲリラくらいなら鎮圧してやるぞ、わし等に命令を出せ」今度は、輝が口を挟んだ。

「殺すのですか、彼らも日本人です。それに全国に展開しています」「わし等も、全国規模じゃ。それに殺しはしないよ。少々脅すだけじゃ、安心なさい。ついでにわしの経験から言わせてもらえば、一般市民は国家権力には反発するが、わし等の言う事は、結構聞いてくれるものなんだ」どんな経験かは聞かなくとも、輝にも山中にも容易に想像できた。

「とにかく急いでください」リチャードの言葉に山中は頷き、中村に向き直った。のんびり考えている時間は無く、素早く判断を下した。

「中村安治、命令を下す。ゲリラを鎮圧、保護せよ」中村は敬礼一つ残し、飛び出していった。それこそ、まるで水を得た魚、のように意気揚々として。山中は輝に向き直り話し始めた。

「実は他の幹部と話し合った時に、総司令官に任命された。大任だがまっとうしなくてはならない、これから協力してくれ」

「私は、戦い方も知らない素人です。兵士の中や、市民の中にも優秀な人材が大勢いるはずです。これ以上お役には立てると思えませんが」輝の言葉に、山中は素早く答えた。

「しかし君には何かある。人に無い何かがある。年寄りの戯言だと思つて構わないが、今は一人でも人材が必要な時だ、手を貸して欲しい。君も見たと思うが、保護している市民のなかに、君ほど活き活きしている者はいない。銃を持って戦うことはさせない。気づいた事を助言して欲しい、それだけでいい」そこまで言われて輝は断れず、ゆつくりと、しかし確実に首を縦に振った。

「とんでもない、これからの作戦に彼はとても重要です」リチャードに言われて輝は面食らった。

「私に何をしろと、言つのですか」リチャードはレシーバーを取り出し、輝に見せた。

「ワシントンと連絡が取れたら、私にも連絡が来ると言いましたね」輝は黙つて頷いた。

「計画が上手くいったら、私の父、リサの祖父に会ってもらいたい」リチャードの言葉に、輝は尚更驚いた。話しの見えない山中は、二人のやり取りを黙つて見ていた。

「何故、私が」輝の言葉を、リチャードが遮った。

「日本のため、アメリカの為、リサのためです」暫く輝の様子を見てから、リチャードは理由を付け足した。

「リサは、貴方に夢中です。恋しています」輝の顔が、見る見る赤くなるのを見て、リチャードは微笑んだ。

「そろそろ話してくれないか」それまで、黙つて聞いていた山中が口を開いた。

「簡単に言つと、アメリカ政府の重要人物、その人物の最愛なる孫娘が、彼に恋をしているのです。大統領とも親しい重要人物です」リチャードの説明に、山中は理解に苦しんだ。

「だから、どうだと言つのかね。分かりやすく説明して欲しい」

「その人物は、孫娘を溺愛しています。彼女の言つ事なら、何でも

聞きます。上手く事が進めば、アメリカ政府の高官と、話し合えるチャンスだと思いませんか」山中は、少々困惑した顔でリチャードに尋ねた。

「信じられん、政府の高官が、政策に私情を持ちこむかね」

「勿論、始めから手を引くように頼むものではありません。先程も言ったように一つのチャンスです。武器を放棄することなく、話し合えるチャンスです。後は、貴方がたの仕事です。日本をまとめ、政府を機能出来るかにかかっています」山中にも少しは理解出来たが、大きな疑問が残った。

「話し合いの場を作るのには、どうするつもりですか。彼と一緒にワシントンに乗り込むのですか。絶対に無理です」リチャードは、大きく頭を振った。

「違います。その人物を日本に呼ぶのです」

「でも、どうやって」山中の疑問は、更に膨らんだ。

「たとえば」リチャードは、輝に目線を移してから、話しを続けた。「結婚するとか言えば……」

「え、」輝の、驚きは半端ではなかった。

「ちょ、ちよっと待って下さい。リサは、リサは知っているのですか」

「私のメモを見て、さぞ驚いているでしょうね」リチャードは、派手なアクションと共に、笑い出した。確かにリサと分かれる時、リチャードがメモを渡していたのを、輝は思い出した。

「しかし、リサの気持ちはどうなるのですか」輝の問いかけに、リチャードは自信を持って答えた。

「リサの気持ちは痛いほどわかっています。ずっと父親でしたからそれに、これは単なる計画です。貴方に迷惑はかけません」輝は、うつむいてしまった。

「娘さんですか。しかし、まだ解らないのですが」山中の疑問は、まだ残っていた。

「まさか日本人と結婚するとも言つのですか。それと日本に来た

としても、何処で話し合うのか、教えて下さい」

「勿論、相手は言いません。リサも知りません。しかし、今リサは有明のアメリカ軍基地にいます。当然、アメリカの軍人だと思うでしょうね。ならば来ない理由はない。アメリカ人は、神聖なる結婚式を決して軽視しません。どんな場合でも」リチャードは、いったん話を区切った。

「基地まで来たら、後は連れ出すだけです、そこが問題です。何処に、どうやって連れ出すか、私にもまだ策がありません。山中さんも考えてください」会議室は、それから沈黙に包まれた。これと言った計画が浮かばなかったが、輝が小声でリチャードに尋ねた。

「最初から、考えていたのですか」

「途中まではね。ただ、これだけは本当です。リサは貴方を愛しています。だから、貴方を助けたかった。本当に会ってもらうつもりでした。貴方の気持ちも考えずに、何も言わなかったことは、とても反省しています。すいません」リチャードは静かに頭を下げた。「リサを嫌いですか」突然のリチャードの質問は、輝を困らせるのに十分だった。

「嫌いではありませんが、彼女はまだ若い。私よりも若く、魅力的な男はいくらでもあります」確かにリサの事を思うと、輝の胸は熱くなった。しかし、それ以上のことを輝は考えた事もなかった。それが、こうしてリサの気持ちを知るにつれ、リサへの思いは高ぶる一方だった。そんな輝に、リチャードは優しく話しかけた。

「貴方だってまだまだ若い、私から見ても、十分魅力的な男性ですよ。何よりも二人は仲がいい、本当はリサに好意を持っているのではないですか」リチャードには、輝の気持ちが見抜かれているようだった。

「確かに、好きです。でも……」観念して吐き出した言葉を、リチャードが遮った。

「今は、その気持ちだけで十分です。リサも喜ぶでしょう」リチャードの真剣な眼差しに、希望の光と笑みが戻った。

「ただいま戻りました」静かな室内に、黒部の元気な声が響き渡った。

「ご苦労、休んでくれ」山中の言葉に、黒部はきっちりと敬礼を返した。そんな黒部に輝は近づき、握手を求めた。

「二人の事、ありがとうございました」輝の手を取ると、黒部の顔に笑みが浮かんだ。

「ご無事で何よりです」それから、黒部はリチャードに視線を移した。

「あの方ですか」輝は、黒部とリチャードを引き合せ、互いに紹介した。

「休養はなしだ。ここに一緒に座ってくれ」何を思ったのか、山中は黒部に新たな命令を伝えた。

「一緒に考えて欲しい計画がある」それから山中は、輝に言った。

「一人でも多い方が、いい知恵がでるものさ」山中の意図を知った輝は、急いで立ちあがった。

「私の参謀にも参加してもらいましょう」そう言つと、輝は会議室を走り出ていった。洋子は起きたばかりらしく、コーヒーを口に運んでいた。輝の姿を見ると洋子は立ち上がり、満面の笑みを浮かべてから頭を下げた。

「なんとお礼を言つたらいいのか」

「とんでもない、お礼なんて。大丈夫ですか」

「丈夫だけが、私の取り柄ですわ」洋子は小さなガッツポーズを作つて見せた。

「頼もしい。ところで杉本は」輝の質問に、洋子は首を傾げた。

「私が起きた時には、いませんでした」

「何処行つたんだろう。トイレかな」輝が言つと、洋子が笑った。

「だったら、相当長いですわ、難産ね」洋子のユーモアに輝も笑っている、突然杉本が戻ってきた。

「私の彼女を取らないで下さいよ」冗談の中にも、自信ありそうな杉本の態度に、輝は驚いた。洋子はただ顔を赤らめ、下を向いてい

るだけだった。

「君達、もしかして……」輝の質問に、杉本は照れながら答えた。

「落ち着いたら、結婚します。本人にはまだ、プロポーズしていませんが」杉本はそう言つと、深呼吸をしてから洋子に近づいた。

「目が覚めたら、言うつもりでした。僕と一緒に下さい」暫くうつむいていた洋子は、杉本を見上げ、小さく口を開いた。

「でも私は、汚れ……」杉本は人差し指で、洋子の口を塞いだ。

「何も言わないで、答えだけ下さい」杉本を見つめる洋子の目には、涙が溢れ、そして頬を伝い床に落ちた時、洋子は答えた。

「はい」か細い声でも、杉本にも輝にもはつきりと聞き取る事が出来た。

「やったー、先生聞きましたよね、ありがとうございます」

「おめでとう杉本君、幸せにな」余りに喜びはしゃぐ杉本を見て、洋子の顔にも笑いがこぼれた。輝は暫くの間、幸せの時を楽しむ二人を、黙って見ていた。それから計画の話しを伝え、何か策がないかと尋ねた。そして洋子から素晴らしいアイデアを聞き、輝は会議室へと戻っていった。本当は、杉本にも参加させるつもりだったが、今は二人だけにしてあげたかった。

「いいアイデアを聞いてきました」部屋に入るなり、輝は話した。

「おう、計画を聞いたぞ、わしの孫娘にと思ったんだが、残念じゃ」中村の大きな笑いが、会議室を包みこんだ。

「お疲れ様です。どうですか」中村の笑いに圧倒されながらも、輝は尋ねた。

「東京は二日ぐらいで、鎮圧出来るそうです」山中が代わりに答えた。

「随分と早かったですね」今度は、中村が答えた。

「わしの部下は優秀でな、素直に話しを聞いてくれたと連絡があった。奴らも大分やられたらしい。武器も人手もギリギリで壊滅状態だったらしい。直ぐに指揮下に入るとさ」中村は満足そうな顔をしていた。

「君のほうは」山中に尋ねられ、思い出した様に輝は話し始めた。
「教会です。基地からそんなに離れていない、教会に呼ぶのです。それならばあまり疑われないでしょう。ただ、近すぎると我々が危険です。適当なところを知りませんか」皆が考え始めた時、中村が口を開いた。

「教会なら知っているぞ、有明の近くだろ。おいおい、そんな目で見ると、わしゃこう見えてもキリスト教徒じゃ」中村の発言は、一同を目一杯驚かせた。それから検討の結果、中村の提案した教会が最善の場所と決定された。

「後は連絡を待つだけです。山中さんは急いで交渉人の人選に当たってください。二日の間に東京が静かになれば、私の父も日本に来易くなるでしょう。軍隊も行動制限されます。早ければ、三日後には行動開始です」リチャードの言葉で、それぞれ散らばり会議は一旦終了した。

三

山中は政府の再建と、人選に追われていた。黒部と中村は、共に協力しゲリラの保護に走り回っていた。リチャードは会議室で、レシーバーを抱え連絡を待っていた。輝にはする事がなかった。杉本たちの邪魔をする気もなく、司令部内を当てもなく歩いていた。行き違う兵士が輝に敬礼しても、何故自分が敬礼されるのか見当もつかなかった。自分は単なる小説家で、普通の人間と変わらない。それが日本の未来を左右する事柄に、首を突っ込んでいいものか、輝の気持ちは不安で一杯だった。急に普通の会話がしたくなった輝は、市民が非難している部屋に向かった。最初に訪れた時同様、人々の目に活気はなかった。皆、虚ろな目をして黙っていた。輝は奥に向かい歩き始めた。人の群れは遙か先まで続き、とてもこれ以上進む気になれなかった。ここに足を踏み入れた事を、後悔しながら戻り始めると、輝の足を掴む老婆がいた。

「煙草持つてないかね」輝も、暫く自分が煙草を吸っていない事に気が付いた。ポケットに手を入れると、形の崩れた箱が確認できたが、出さずに老婆に伝えた。

「ありますが、ここでは駄目です。表に行きませんか」輝に言われて、老婆は目を輝かせたが、静かに首を振った。

「ここから出てはいけないと言われています」

「大丈夫、いきましよう」輝は老婆を立たせ、部屋から出ていった。そんな二人に注意を向ける者は、一人もいなかった。部屋を出ると、老婆は大きな伸びをしたが、なにぶん腰が曲がっているせいで、伸びたのか、縮んだのか輝には分からなかった。しかし、老婆の目には生気が呼び戻されたように、輝きが溢れていた。

「早く何とかしてもらいたいね」輝と老婆は、壁にもたれ腰を下ろした。輝の差し出した煙草を、老婆は美味そうにふかした。

「歳をとつても、これだけは止められなくてね」輝は、自分の煙草に火を点けなかった。と言うよりは、吸う気になれなかった。二人の前を兵士が敬礼をしてから、通り過ぎていった。

「あんた、偉いのかい」老婆に言われ、輝は首を振った。

「私は、小説家です。偉くなんかありません」暫く輝を見ていた老婆は、小さく頷いた。

「軍服も着とらんし、政治家でもなさそうじゃ」老婆の言葉を見無視するように、輝は尋ねた。

「ご家族は」輝は普通の会話を楽しみたかった。

「大阪におる、連絡はつかないし心配なんじゃが、息子はどうでもええ、孫が心配じゃ、かわいい孫でね。そうそう、写真を見るかい」老婆は、帯の間から一枚の写真を取り出し、輝に見せた。ブランコに乗った、小さな女の子が写っていた。

「可愛い子ですね」輝の言葉に、老婆はにつこりと笑った。

「もう三年も前の写真でね、もう小学校に入っているはずだけど、全然会えなくてね」

「そうですか、今ではもつと可愛くなっているでしょうね」

「優しい子で、息子が転勤するまでは、良く家にも遊びに来てね。でも嫁というのがとんでもない嫁で……」そこで老婆の言葉は途切れた。

「あんたに言っても仕方ない」それから老婆は、遠くを見つめた。

「誰かが日本を救ってくれば、孫に会えるかもしれない。死ぬ前にもう一度会いたいね」

老婆の涙が、皺の刻まれた頬を静かに流れた。この時、輝の気持ちはしっかりと固まった。何が出来るか分からないが自分の出来ることはやってやろうと、心に深く刻みこんだ。そして輝は煙草に火を点けた。まもなくして、兵士が輝を迎えにきたとき、輝は老婆と硬い約束を結んだ。

「必ずお孫さんに会えますよ。それまでお婆さんも頑張っていてください」老婆は何度も頷き、輝を見送った。会議室に戻ると、リチャードが駆け寄ってきた。

「連絡が来ました。リサから連絡がありました」興奮するリチャードを椅子に座らせ、輝は、静かに尋ねた。

「それでなんと、言っていました」

「上手く行きました。日時は追って連絡がありますが、日本に来ます。自分が行くまで式を挙げるなど、言われたそうです」

「第一段階は成功ですね」輝の言葉に頷いてから、リチャードは話しを続けた。

「リサにだいぶ怒られました。しかし相手が貴方と知ってリサは黙ってしまいました。照れているのが、私には良く分かります。もう貴方の無事ばかり気にしていました」輝も、リサの無事が分かりホッとした。

「ともかく次の連絡まで、待ちましょう」輝は頷いた。

接触の危機

二日後、リサから連絡があり、輝も暫くぶりにリサとの会話を楽しんだ。しかも、祖父は明後日にはやってくる、と言うことだった。今では東京も静かになり、時折、アメリカ兵が偵察する程度だと、黒部の報告が届いたところだった。

「山中さん、政府の再建と、人選はどうなりました」リチャードの質問に、山中は頭を抱えた。

「政府のほうはどうになる。残っている若手議員もいるのだが。人選は難航して進まない。身の危険があるから仕方ないが」

「もう時間がありません。急いでください」リチャードに言われ、さらに頭を抱えてしまった。

「リチャード、山中さんを責めてはいけないよ。まだ二日ある。みんなで知恵を絞るしかない。協力してくれ」輝の言葉に、リチャードが反発した。

「あと、二日しかない。それに私には協力出来ません。どうやって協力するのか分かりません」

「リチャード、あなたに人選を頼んではない、ただ、お父さんの趣味とか、気に入るような人物像を聞かせて欲しいだけです」輝の話で、リチャードは納得した。

「それなら簡単です。趣味はゴルフに釣り、ジョギングに読書です。まじめで勇敢な男を好みます。そう、輝、貴方のような」リチャードの言葉に、山中は敏感に反応した。

「それだ」皆が山中に注目した。

「何故、気が付かなかったのか、君こそうつてつけど」山中の目は、じつと輝に向けられていた。リチャードも気づいたらしく、輝を見つめた。

「まっ、待つて下さい。私は、リサの相手として会わなければなりません。それだけでも大変なのに、それ以上無理です」慌てて反論した輝に、リチャードは言った。

「丁度いいではないですか。日本の高官が、リサの相手なら尚更話しやすい。それに私が気に入るくらいです。父もきつと気に入るで

しょう」観念した様に、輝は話し始めた。

「私に出来る事なら、何でもすると心に誓いました。しかし本当に私で大丈夫でしょうか、政治の事など分かりません」山中が答えた。「リチャードのお墨付きです。あなたなら出来るでしょう。補佐役もちゃんとつけます。それに内容はこちらで考えますから、きつと上手く行きます、それに貴方の役目は、公式の場にアメリカ政府を引っ張り出す事です。細かい政策など話す必要はありません」

「少し考えさせてください」輝は一言残し、会議室を出ていった。何故か杉本と話しがしたかった。あれ以来二人とは顔を合わせていなせいかもしれないが、なんでもいい助言が欲しかった。杉本と洋子は仲良くやっている様子で、輝は安心した。

「何処にいたんですか」杉本に言われ、輝は頭を掻いた。「氣を使っていた、なんて言わないで下さいよ」杉本も輝の気持ちを、すっかりと見抜いていた。

「別にそうではないが」輝は口籠もってしまった。

「いいんです。悩みですか」

「分かるか」輝が言くと、杉本は笑った。

「長い付き合いです。ネタが出ない時と同じ顔ですよ」そこに洋子がコーヒーを持ってきてくれた。輝は例を言い、一口飲んでから話し始めた。

「悩んでいる」そう言うってから、会議室での話を杉本に伝えた。

「大丈夫、先生やって下さい。お願いします。でも一つ条件があります」話を聞き終えた杉本は輝に言った。

「条件とはなんだい」輝は尋ねた。

「私を連れて行く事です。秘書でもなんでもいいですから、連れていってください」話を聞いていた洋子が、立ちあがった。杉本は洋子を止める様に手を出し、話し始めた。

「洋子、それに先生、良く聞いて下さい。危険なのは良く分かります。しかし日本の将来が懸かった場面に立ち会いたいのです。好奇心とかではありません。命を粗末にするつもりもありません。落ち

着いたら、本当に結婚するつもりです。だからこそ成功させたいのです。洋子を幸せにする為にも、日本を滅亡させるわけには行きません。手伝わせてください。洋子、分かってくれるね、二人の為だ」洋子は涙を流し頷いた。しかしその顔には、悲しみの色はなく、誇り高き未来の夫を尊敬する顔だった。

「分かった、条件を飲もう。と言うか、私からもお願いする。一緒に来てくれ」輝の気持ちは、晴々としていた。会議室には、下見から戻った黒部がいて、地図を見ながら配置や、段取りを決めていた。杉本を連れて戻った輝は、山中にはつきりと頷いた。そして秘書として杉本を連れて行くことを伝えた。山中は二つ返事で了解した。この時点で、輝の外務省事務局長としての、活動が始まった。まずは最低限度覚える事と、相手の長所、短所を頭にたたきこんだ。挨拶の仕方から、会話の進め方まで、考えうる全てを覚えさせられた。瞬く間に時間が過ぎ、彼が来ると言う前日、リサから連絡が入った。リチャードは粗方の説明をした。そして、いつ何処に連れ出すのかリサに告げた。しかしリサの答えは悲観的だった。とてもじゃないが連れ出せない、と言う内容だった。暫く考えリチャードは、ある結論に達した。

「山中さん、私は基地に戻ります。やはり娘と家内には、荷が重いです。私が上手く話をつけて連れ出しますので、予定どおり行動して下さい。通信機は置いていきます」山中は、リチャードを途中まで送る様、部下に命令を下した。作戦遂行の時は、刻一刻と近づきつつあった。

二

基地に着いたリチャードは、案の定、衛兵に捕まったが、エリザベスの夫と分かり、丁重に迎えられた。

「リチャード」

「パパ」二人の歓迎は、今までの疲れを吹き飛ばす勢いだった。

「怪我はない」エリザベスは、リチャードの身体をくまなく調べた。
「輝は、ねえ、輝は」リサの質問は、輝のことばかりだった。

「大丈夫、元気だよ。もうすぐ会える」三人には、特別に部屋が与えられていた。夕食を囲むテーブルで、リチャードははつきりとリサに聞きたかった。

「リサ、これからの質問に、答えてくれるね」リサはフォークを見つめ頷いた。

「輝のことは諦められるか。計画は上手く行くとは思えない」

「リチャード」エリザベスは困惑した顔で叫んだ。

「君は黙っていなさい。どうなんだ、リサ」リチャードに問い詰められ、リサは口を開いた。

「いやよ、諦めるなんて、助けるって言ったじゃない」フォークを持つ手が震えていた。

「リサ、お前はまだ若い、男なんていくらでも知り合える。私から言うのもおかしいが、とてもチャーミングで魅力的だよ。これじゃないか。彼も若いとはいえ、だいぶん年上だ、リサには似合わない」リチャードの語尾は、次第に強くなっていった。

「いやよ、私は彼を愛しているの、もう子供じゃないわ、本当の愛も区別できるわ」リサの想いは、予想以上に強かった。

「本当に結婚でもするつもりか」リチャードは、更に口調を強めた。
「パパが反対しても、結婚するわ。日本が無くなれば、同じアメリカ人よ。それからでも結婚するわ」リサはフォークをテーブルに叩きつけた。そんなリサを見ていたリチャードは、急に大声で笑い始めた。エリザベスもリサも、訳が分からずリチャードを見つめた。

「明日は、本当に牧師を用意しよう」

「えっ、どう言う事」笑い続けるリチャードに、リサは首を傾けた。
「本当に結婚してしまえ」それから優しくリサに伝えた。

「彼も、お前を愛している。いい青年だ。私は賛成するよ」リサは、はっと気が付いた。

「パパ、私を試したのね、ひどいわ」にらみつけるリサの顔に、笑

顔が戻った。

「でもありがとう、愛しているわ、パパ」リサはリチャードに飛びついた。エリザベスは、ナプキンで目頭を押さえ、抱き合う二人を見ていた。

「明日は大変な一日になるぞ、二人とも私の言う事を良く聞いて、間違わない様に行動して欲しい。リサは未来の夫のために、私達は未来の息子のために、乾杯」グラスは、きれいな音色を響かせた。

翌朝、三人の元への伝令が訪れ、リサの祖父が乗った飛行機の到着時間を伝えた。リチャードはレシーバーで状況を伝え、細かな打ち合わせをした後、輝とリサに話をさせた。リサの楽しそうな顔を見つめ、リチャードは自分が間違っていない事に満足した。それから各自段取りのため、行動を開始した。ぶつつけ本番は一七〇〇時。失敗は許されなかった。リサの祖父は定時に到着した。

「おじいちゃん」声のするほうに視線を向け、目を細めると、リサの笑顔が飛び込んで来た。すると突然、いかつい顔がくしゃくしゃに崩れた。

「おー、リサ、久しぶりだね、元気そうだ。おっと、それよりおめでとくと、言うのが先かな」決して背は高くないが、体格のいい老人は、リサと抱き合った。

「義父さん、ご無沙汰しています」

「元気そうだな。リチャード、でも何故、帰ってこなかった」

「色々ありまして」リチャードは話を濁した。

「お父さん、元気そうね」エリザベスの助け舟は、丁度いいタイミングだった。

「お前こそ元気そうだな。心配していたぞ」

「あら、私はお父さんを心配していたわ。過労で倒れてないかしらってね」

「ははは、まだまだ元気だよ」四人は車から離れ、歩き出した。

「ところで、リズ、リサはまだ十六だったろう。ちと早過ぎると思うが」リサには聞かれないように、小声で話した。

「あら、私だって、十七で結婚したのよ、忘れたの」

「いや、だが、時代が違う」

「時代が違っても、乙女心に違いはないわ」

「親はお前達だ。わしの出る幕じゃないか。ところで、相手はどんな人間だ」

「とてもいい人よ、お父さんも気に入るわ」

「式の前に会いたいんだが」

「彼は今、任務で出ております」リチャードの助け舟も、絶妙なタイミングだった。

指令所の前で、基地の司令官が待っていた。

「パッカー上院議員、お待ちしておりました。司令官のウエスナーです」

「家族が世話になっている、ありがとう」

「本日は、視察か何かですか」明らかに緊張しているのが、目に見えた。

「いや、私事だ、気を使わないでほしい」パッカーの答えは、ウエスナーの顔から緊張の色をなくさせた。

「では、何かありましたら、ご遠慮なくどうぞ」ウエスナーはそう言って、建物に入ってしまった。

「どうもわしは軍人は苦手だ」つい発した言葉に、パッカーはリサを見た。リサはリチャードと話をしていて、気にも留めていなかった。やはりリサの相手は、軍人だと思いこんでいると、隣にいたエリザベスは確信した。リサとエリザベスは、衣装合わせに忙しかった。

パッカーは、娘と孫娘の幸せそうな顔を見て、無理をしても来た甲斐があったと、心から思った。たった一人の娘を嫁に出した時、パッカーの妻はまだ元気だった。しかしたった一人の孫娘の式には、彼は一人で参列する事となった。二人の姿を見ていると、自然と涙が溢れてきた。リサの結婚式を見ることなく、三年前に彼の妻は帰らぬ人となった。

「今日は、お前の分まで祝ってやるよ」パッカーは胸の中で、亡き妻に語りかけていた。

二人は、髪の手入れに夢中だった。おもむろに立ち上がったパッカーは、リチャードのいない事に気が付いた。

「リチャードはどうした」

「準備に忙しいのよ」リサの髪をとかしながら、エリザベスは答えた。

「世話役はいないのか。花嫁の父だぞ」

「お父さん、ここは軍事基地よ。皆、任務があるわ。それに質素にしたいの。身内だけで」

「しかし、式の直前まで父親が動き回っていては、都合が悪いだろう。わしが頼んでくる」

パッカーが部屋を出ようとした時、リチャードが戻ってきた。

「父親が何している。最後の時間も作れんではないか」

「すいません、段取りの打ち合わせをしていました」リチャードの答えに、

「そんなもの誰かに頼め、わしからウェスナーに頼んでこようか」と、パッカーが言った。

「おじいちゃん、私達に任せて、座ってなさい」リサに言われて、パッカーは渋々腰を下ろした。

「素敵な式になるわよ、でも来てくれて本当に嬉しいわ。ありがとう、おじいちゃん」リサに言われると、パッカーの顔は、またもくしゃくしゃに崩れた。

「ところでリチャード、基地に教会はあるよな」

「ありますが、基地の教会は使いません。すぐ近くの教会です。基地から五分程度ですが」リチャードの言葉に、パッカーは驚いた。

「基地の外で行うのか。こんな時に危険だぞ。基地の教会で行いなさい」

「もう、おじちゃんたら、大丈夫よ。既に東京は静かよ、反乱軍もないわ。新年と共にアメリカになるのに」しかし、これだけはパ

ッカーも譲れなかった。

「それだけは、許さんぞ。何か起きたらどうする」

「私の夢よ、素敵な教会で結婚するのが。前から気に入っていた教会なんだから。基地の仮設の教会だったら結婚しないわ」リサも一歩も譲らなかった。暫く考え込んでから

「本当に安全か、聞いて来る」パッカーは、そう言つて部屋を出ていった。

「パパ、どうする」リサは不安げに尋ねた。

「大丈夫、抵抗する組織は、もう居ない筈だ。この日の為に今まで頑張つてきたんだ、輝たちを信じよう」暫くして、パッカーは戻ってきた。

「確かに、抵抗は収まつたらしい。しかし、本当に大丈夫だろうね」パッカーは念には念を入れる性質だった。

「大丈夫よね、パパ。それに牧師さんも手配済みよ」パッカーは、リサの言葉に頷いた。

「よし、分かった。リサの夢を壊す事など、わしには出来ん。ちゃんと参列するよ」リサの喜び様を見て、パッカーは満足だった。しかし、その後の言葉は三人を地獄の底まで突き落とした。なんと、パッカーは、ウェスナーに護衛を頼んできたと、三人に伝えたのだった。リチャードは急いで山中に連絡を入れた。しかし、山中は予想をしていたように、少しも驚かなかった。予定通りの行動から、ほんの少しの変更で乗りきれると伝えてきた。

リチャードの説明を聞いて、リサも安心した様子だった。

三

リチャードは、一足先に基地を出た。もうパッカーもリチャードのことなど気にも留めずに、リサと楽しいひとときを過ごしていた。どんな相手だろうが、人の妻になれば、こうして過ごす時間も無くなるだろうと、パッカーは心から今を楽しんでいた。

「そろそろ時間よ」エリザベスの声に、二人の笑いが途切れた。

「おじいちゃん、本当にありがとう。結婚しても、私はおじいちゃんの孫よ。いつでも遊べるわ」リサの言葉にパツカーは涙流し、リサを抱きしめた。

「そうとも、お前が誰と結婚しても、わしの可愛い孫には変わらない。いつまでも」リサの目にも涙が溢れ、パツカーのタキシードを濡らした。

護衛の兵士は宿舎の前で待っていた。真新しい制服を着込み、ジープを飾り付け、花嫁の現れるのを待っていた。リサを連れて、パツカーが現れると、一同最敬礼を執り行なった。ウエスナーも、勲章を飾りつけた制服に着替え、最前列で敬礼していた。リサをジープに乗せると、ウエスナーがパツカーに近づいた。

「私は任務があるので御一緒できませんが、護衛の兵士は優秀な者ばかりです。ご安心下さい。それと、素晴らしい式になることをお祈りしています」

「ウエスナー君、ありがとう、君の好意には感謝している。わがまま言って許してくれ」ウエスナーは気分を良くしたように、笑みを浮かべた。

「ところで、幸運なお相手は、誰ですか」

「わしは知らんのだ。きみも知らんのか。基地の人間だと思っているが」パツカーは不思議に思い、首を傾けた。

「他の基地の者かも知れません」

「それならいいが」パツカーはなんとなく引つかかったが、納得しようと思がけた。

「では、行つて来る」

「お気をつけて、それからお嬢さん、お幸せに」ウエスナーはそう言つて、出発の合図を出した。ジープはゆっくりと走り始めた。先導のジープに兵士が四人、後続には、二台のジープにそれぞれ四人の兵士が乗っていた。勿論、完全武装の兵士だった。しかし、街はシーンと静まり返り、ジープのエンジン音だけが、ビルに反響して

いた。ジープは速度を上げずにゆっくりと街を進んでいった。やがて、パッカーの不安も取り去られていった。そして、アメリカの勝利を確信していた。

四

輝は祭壇の前で、落ち着かない時間を過ごしていた。

「落ち着いて」一足先にやってきたリチャードが、輝を励ました。

「大丈夫、緊張していません、といっても無理ですね」輝の笑いは何処かぎこちなかった。

「普通の結婚式でも緊張するのに、重要な使命もこなさなくては行けない。頑張ってください」

「リチャード、励ましているのですか、からかっているのですか」輝は、強い口調で話し始めた。

「ごめんなさい、でも、可愛い娘を奪う男に、少しくらいは皮肉を言わせて下さい」輝には、リチャードの気持ちも痛いほど分かった。「でも、本当に結婚式を挙げるのですか」輝は、リチャードに尋ねた。

「リサの望んだ事です。そして、貴方も、先のことなど分かりません。だから、今挙げるのが最善だと思います。私は輝を信じます。必ずや良い結果を出してくれることを、そして、リサを幸せにしてくれることを」輝とリチャードには、誰にも崩すことの出来ない信頼関係更に強く結ばれていた。そこに黒部が走って来た。

「基地を出発したそうです。ゆっくりと向かってきます」三人はしっかりと頷いた。それから黒部は振り向いて、大声で叫んだ。

「作戦開始」その声で教会内は静まり返り、各自決められた場所へと、配置についた。なるべく目鼻立ちのはっきりとした者が集められ、一目では日本人と区別出来ない様にと、金髪のかつらまで被っていた。ピアノの奏者は、髪をG Iカットして顔に靴墨まで塗っていた。

「さあ、本番です」リチャードはそう言って入り口に向かった。輝は黙って祭壇に向き直り正面を見つめた。キリスト教徒ではないが、輝は大きな十字架に祈りを捧げずにはいられなかった。

「まもなく到着します」何処かで誰かが小声で伝えた。リサとパツカーとエリザベスを乗せたジープは、ゆっくりと教会の敷地に滑りこんだ。

「いい教会だ。日本にもこんな教会があるとは」人目見てパツカーは、気に入ったらしかった。リサも初めて見たが、やはり、気に入ったようだった。扉の前ではリチャードが待っていた。

「やありサ、とても綺麗だ」そして手を取り、静かにジープから下ろした。ウェディングドレスが静かに揺れた。

「さて、わしは先に中に入るぞ」パツカーが扉を開けようとするのを、リチャードは止めた。

「義父さん、リサのエスコートをお願いします」

「ばか、それは父親の役目だろ」

「いえ、是非ともお願いします。リサの希望でもあります」

「リサ、本当にわしで良いのか」パツカーはリサに尋ねた。

「うん、おじいちゃんにエスコートして欲しいの、お願い」リサの願いを、パツカーは断ることなど出来なかった。

「さあ、エリザベス」そう言うと、リチャードとエリザベスは教会へ入っていった。護衛の兵士は、車から降りたが、直立不動のままジープの脇に立っていた。

「音楽を」教会に入り、リチャードは演奏者に告げた。扉の外では、リサとパツカーが音楽に胸躍らせていた。

「いよいよだ、リサ、お前の幸せが待っている」リサはパツカーの腕を、強く握り締めた。結婚への緊張と、作戦遂行の重圧に今にも押しつぶされそうな思いにリサは必死に耐えていた。

「そんなに緊張するな」パツカーは、震えるリサの頭に優しくキスをした。音楽が第五小節に入った時、教会扉は大きく開け放たれた。パツカーはゆっくりとリサをエスコートし、一步一步歩き始めた。

大事な孫娘の式に、参列者の数はまばらだった。ワシントンで挙げれば、盛大な式になっただろうと思うと、パツカーの気持ち微妙に揺らいだ。正面には、祭壇に向かう一人の男と、二人を見つめる牧師が立っていた。最前列にはエリザベスとリチャードが、バージンロードを進む二人に笑顔を向けていた。しかし、パツカーは不思議に思った。参列者のほとんどは、バージンロードより遠くに離れ、二人に目を向ける者はいなかった。そして、教会の扉が杉本によって閉ざされたが、パツカーの知る由もなかった。祭壇の手前でリサの腕を放し、パツカーはリチャードの隣に腰を下ろした。リサはそのまま、真直ぐ前を向く男の隣まで進んだ。いつのまにかパツカーの後ろには、黒部が座っていた。しかし今のパツカーは、リサの姿にくぎ付けで、気付きもしなかった。音楽が鳴り止み、牧師の説教が始まり、式は滞り無く進んでいった。しかし指輪の交換まで進み、正面を向きつづけていた男がリサに向き直った時、パツカーは驚きのあまり立ち上がったしまった。しかし、黒部に銃を突き付けられ、パツカーは思わず座りこんだ。何がなんだかわからずにいたパツカーに、リチャードが囁いた。

「義父さん、驚かずにちゃんと見守ってください。リサの晴舞台です」

「お願いお父さん」リチャード越しに、エリザベスが話しかけた。「お前達、知っていたのか」パツカーは怒りに震えたが、銃を突き付けられ、どうする事も出来なかった。いつのまにか日本人に囲まれていたパツカーは、観念した様に黙りこんだ。式は滞り無く進み、誓いの口付けが交わされた時、パツカーの目に涙が浮かんた。騙されたという思いも有ったが、輝く孫娘の姿に涙を止める事は出来なかった。そして、永遠の愛を誓った二人が、パツカーの前に歩み寄った。

「どうか、許してください。騙した訳ではありません。私達は愛し合っています。必ずリサを幸せにします」輝は、深く頭を下げた。黙りこむパツカーにリサが語り掛けた。

「おじいちゃん、本当よ、彼を心から愛しているの。信じてちょうだい」パッカーはやつとの思いで、口を開いた。

「なぜ、こんな手の込んだ事をする」

「国家保安局の山中です。」不意に隣から声をかけられ、パッカーは面食らった。

「貴方に危害を加えるつもりはありません。こんな手段をとって申し訳ありませんが、話がしたいのです。分かってください」

「私に何を話すというのだ」

「アメリカ政府は、我々の話し合いに応じません。話し合いがしたいのです」山中の言葉を、パッカーは笑い飛ばした。

「話し合うものにも、日本には政府がないか。誰と話すのだ」
「今は彼と話して下さい。外務省事務局長の彼と」山中は輝を指差した。

「君が事務局長か、笑わせるな」パッカーの怒りは、頂点に達した。
「確かに若いと思われるかも知れませんが、実際、現日本政府は若手ばかりです。過去の主だった要人は所在不明です。しかし我々は立ちあがりました。ゲリラを鎮圧したのも我々です。日本を再建するためにも力を貸してください」輝の言葉にパッカーは答えた。

「日本は、再建できるのか。国の借金はどうする」

「そう言う話し合いをして欲しいのです。新たに始動した日本政府と」

「ならば、直接アメリカ政府に言ったらどうだ。新政府が発足したと、わしに言ってもどうにもならん」パッカーの言葉は、冷たく輝を突き放した。

「先ほども言ったように、我々との会話を拒んでいます。武装解除しなければ話し合いに応じないと言っています」輝は必死に話し続けた。

「ならば武装解除すれば良からう」相変わらず、パッカーの答えは冷たかった。

「そんな事をすれば、敗北を認めた事になります。その場で日本は

消滅します。お願いします。現状で話し合う機会を作ってください」
パッカーは鼻で笑って答えた。

「わしにそんな力はないよ」

「お父さん、はじめに聞いて」それまで、黙って聞いていたエリザベスが口を開いた。

「祖国を裏切りおつて、お前など、知らん」パッカーは、エリザベスを鋭くにらんだ。

「リサの命を救ったのは彼なのよ。協力して」とうとうエリザベスは、泣き叫んだ。

「命だと」突然の単語に、パッカーは驚いた。

「本当です」泣き崩れるエリザベスを抱え、リチャードが話し始めた。パッカーはリチャードの話しを、黙って聞いていた。一部始終を聞き終えてから、パッカーは口を開いた。

「そんな事があつたとは、信じられん」

「事実よ、今、私がおじいちゃんに会えるのも、彼のお蔭なの、命の恩人なのよ」リサの目には、大粒の涙が光っていた。

「リサ」リサがそんな辛い目に会っていたと思うと、パッカーの目頭も熱くなってきた。

「日本人狩りと称して、無差別にだいぶ殺されました。私達は、その中でも平和的に解決する事を望み、活動してきました。争いはもう十分です」パッカーはそう話す輝をみつめ、ゆっくり頷いた。

「わしは、軍人とは違う、戦いは好まん。わしが大統領とも親しい間柄なのは聞いていると思う。しかし話し合いをしても、上手く行くかは保証できん。それでも良ければ話し合いの場所を作ろう」

「十分です。ありがとうございます」輝は深々と頭を下げた。

「しかし軍部がそんな事をしているとは、わしは、知らされていないなかつた。その事は、アメリカの上院議員として謝る」パッカーも頭を下げた。

「だから軍人は好かん。で、これからどうするつもりだ」パッカーに、山中が答えた。

「まず、表の護衛を返して下さい。ジープを一台残して」

「ジープをどうする」

「貴方がた三人の車です。私達が去ってから、基地に戻ってください」

「リサは」パッカーは訊ねた。

「彼女は、我々と一緒です。花嫁が一人で戻ったら、基地の人間はそれこそ不信に思うでしょう」

「分かった、しかしその後の連絡はどうする」

「リチャードに話してください。我々とは連絡がつきます」

一連の段取り話してから、パッカーは輝に話しかけた。

「失礼な態度をとって、済まなかった。リサを、リサを頼む、幸せにしてやってくれ」

「こんな状態でなければ、誰も辛い思いをしなくて済むのですが、すいません。しかしこの先何があってもリサを守り、幸せにします」パッカーは輝を抱きしめ、耳元に囁いた。

「エリザベスが気に入るのも分かったよ。君の熱意と勇氣はしっかりと伝わった。わしも気に入った。リサを頼むぞ」そう言って、パッカーは扉に向かった。

大戦の危機

—

司令部内は興奮に包まれていた。第二段階の成功と、輝の結婚を皆が祝った。

「結局、僕の出番は無かったですね。扉を閉めたただけなんて」杉本の言葉に、輝は笑いながら答えた。

「君が活躍するような事態にならなくて、作戦は成功なんだよ」

「そうですね。でもジャーナリストとしては、すばらしい場面に立ち会えました」杉本の顔にも笑みがこぼれていた。そしてリサに向き直り、抱きしめた。

「リサ、おめでとう」

「杉本さん、ありがとう、貴方にはとても感謝しています」リサの笑顔は、最高に輝いて見えた。続いて杉本は、一人の女性を引っぱり出した。

「リサ、彼女は洋子だ、私達も結婚するよ」驚くりサの前に、洋子が歩み出てきた。

「初めまして、洋子です。彼から話しは聞いていました。素敵なお花嫁に、お祝いのキスをしてもいいかしら」洋子から祝福のキスを受けると、リサの顔に驚きの色が浮かんできた。

「間違ったらごめんなさい、もしかして……」リサの言葉を、輝が遮った。

「今は、単なる杉本の婚約者、洋子さんだよ」

「ごめんなさい、でも、綺麗な人ね」リサは、杉本に笑って見せた。

「リサ、君もとっても綺麗な」杉本に言われ、リサは真っ赤になった。

「綺麗ななんて、言われた事無かったわ」

「結婚すれば、もう大人よ、可愛い卒業しなきゃ」洋子の言葉に、リサは小さく頷いた。と同時に、洋子に親近感を覚えていった。

「落ち着いたら、早く式を挙げろよ。新婚旅行は一緒に行こう。リサ、それまで旅行はお預けだよ」リサは、輝の言葉に、にっこりと頷いた。

「責任重大だ、急いで式を挙げなくちゃ」杉本の大笑いは、皆の気持ちを和らげた。そして、中村や黒部も集まり、楽しいひとときが過ぎていった。そんな笑顔の輪を、早足で近づく、山中が吹き飛ばした。それほどまでに山中の表情は、緊迫していた。

「会議室に来てくれ」それだけを言い残し、山中は去っていった。

「心配無い、洋子さんとここにいなさい」輝はそう言うと、杉本、黒部、中村と共に、会議室へ向かった。リサと、洋子の心配そうな顔をよそに、まわりではお祭り騒ぎが続いていた。会議室には、不安顔の山中と、三人の将校が既に集まっていた。

「どうしたんですか」輝の質問に、山中は力無く答えた。

「とにかく座ってくれ」全員が席につくと、山中は話し始めた。

「ロシアが、正式に参戦を表明した」その言葉は、全員に重くのしかかった。

「年明けの参戦予定だったはずです」輝の言葉に、山中は一言返すだけだった。

「そうだ」

「では、なぜ今発表したのですか」輝の質問に、山中はむなしく首を振るだけだった。

「おそらく、我々の抵抗が弱まったのを見て、参戦を早めたのではないかと、思われる」山中の、隣に座る将校が答えた。

「どうにか止められませんか」黒部の問いかけには、山中が答えた。

「一つの国が公式に参戦発表したんだ、簡単に撤回など出来まい」

「どうするつもりですか」輝が言うと、先ほどの将校が答えた。

「我々も必死にロシアと連絡をとっているが、今のところどうしようもない」その時、リチャードとの連絡用レシーバーが声を発した。

「聞こえますか、応答して下さい。リチャードです」

「山中です」急いでレシーバーを掴み答えた。

「山中さん、ロシアが参戦しました」

「我々も聞きました。今、会議中です」

「既に北海道のアメリカ軍基地が、攻撃を受けました」

「本当ですか」

「間違いありません。あつ、ちょっと待って下さい」一旦途切れたレシーバーの音が、すぐに戻ってきた。

「パッカーです」

「山中です。上院議員」

「制空権を取られた。私も本土に戻れない」パッカーの声にも、緊迫した様子が漂っていた。

「とにかく、ワシントンと連絡をとってください。ロシアと話し合います」

「分かった、出きる限りのことはする。君らも頑張ってくれ。それから、輝はそこに」山中からレシーバーを受け取り、輝は答えた。「はい、ここにいます」

「何があっても、リサを守ってくれ。それと、決して、君も無理をしてはいけない」パツカーの声には力がこもっていた。

「分かりました、必ず守ります」輝も、力強く答えた。

「うむ、頼んだぞ、また連絡する」そう言つと、レシーバーは静かになった。

「黒部、中村君と偵察に出てくれ。ただし、戦闘はしてはならない。偵察のみだ」山中の命令に、中村が反発した。

「身を守る為でも、戦つてはイカンのか」

「これ以上、アメリカと問題を起こせない。見つからぬように行動してほしい」

「了解」黒部は、敬礼して会議室をあとにしたが、中村は渋々ついて行つた。

「司令官、ロシアと連絡が取れました」通信兵の声に、全員が一斉に振り向いた。

「チエルネンスキー極東司令官です。同志諸君、いかがお過ごしかな」屈託のない言葉に、一同ア然としてしまった。

「国家保安局、総司令官の山中です」

「これは、同志、初めまして」チエルネンスキーの言葉には、笑いが含まれていた。

「何故、参戦したのですか」山中の質問に、チエルネンスキーの声は驚いた様子だった。

「何故だつて、我々は、日本の味方ですよ。既に北海道では戦闘が始まっています。共にアメリカを駆逐しようではありませんか」山中は、ゆつくりと、しかしはつきりと答えた。

「好意はありがたいが、日本政府は、ロシアの参戦を承認しません。すぐに日本から撤退して下さい。わが領土内での戦闘を認める訳にはいきません」

「感謝されても、非難される覚えはない。それに政府などあるのかね」チエルネンスキーの言葉には、怒りが感じられた。

「新政府が発足されました。これからアメリカとの話し合いに入るところです。停戦協定を結んで、撤退して下さい」とうとうチエルネンスキーは、怒りを爆発させた。

「そんな事をしたら、全世界の笑い者だ。参戦してすぐに撤退とは誇り高きロシア人のプライドが許さない。いい気になっているアメリカ力を潰すチャンスだ。奴らの鼻柱を叩き折ってやる。今ここに、あらためて共に戦う事を要求する」

「我々は、断固拒否します。平和的解決に全力を尽くします」山中は、冷静に答えた。

「君らは知らないだろうが、EU諸国は、我々政府の要請で参戦準備を始めている。アメリカに勝ち目はない。君らも共に戦うのだ」スピーカーまで張り裂けそうな声が、会議室に激しく轟いた。

「人類を滅亡させるつもりですか」山中の声も激しくなってきた。興奮する山中に変わり、輝がマイクに手をかけた。

「外務省の長田です」

「なんだ、政治屋か」チエルネンスキーは素っ気無く答えた。

「チエルネンスキー司令官、ロシア政府と話しをさせて下さい。それまで日本から撤退して頂きたい。でなければ公式にロシアに対し、日本は宣戦布告します」山中は慌てて輝からマイクを奪おうとした。しかし杉本に押さえられ、マイクを取り戻す事が出来なかった。

「何か考えがあるはずです。任せましょう」杉本に言われ、仕方なく山中は頷いた。

「なんだと、裏切るのか」怒鳴り声は、頂点に達していた。

「裏切るも何も、日本政府が参戦要求をしましたか？ロシアに助けを求めましたか？助けに向かった国から、宣戦布告されたら、諸外国はどう思うでしょう。実は侵略だったと思うでしょうね」輝は、至って冷静に答えた。沈黙が流れる中、全員固唾を飲んでスピーカーに注目した。チエルネンスキーの声が戻ったのは、更に時間が経

過してからだった。

「わかった、承知しよう。すぐに撤退するので、公式発表は待ってくれ」チエルネンスキーの声は、落ち着きを取り戻し、怒りのパワーは消えうせていた。

「待ちましよう。ロシア政府と話しをさせてくれますね」

「連絡する」チエルネンスキーの声を最後に通信は途絶えた。輝は額の汗を手で拭った。

「無茶をする」山中の独り言に、杉本が答えた。

「しかし、上手く行きましたよ」山中は、杉本を見つめ頷いた。

「先生、お手柄です、でも正直ヒヤヒヤものでした」輝に歩み寄り、杉本は話した。

「分かっていたけど、正直なところ、私もだよ。全身汗びつしよりさ」

「分かっていたって？」杉本は、理解していなかった。

「EU諸国には、日本に助けを求められたとも言ったのだろう、味方につける為の方便という事さ」

「そうか、でも実際日本は、助けを求めている。日本が宣戦布告したら、ロシアの嘘が露見しますね。EU諸国は怒るはずだ」杉本は感心していたが、まだ疑問が残ってしまった。

「でも、何故ロシアはそこまでするのでしょうか」

「その答えは、私がしよう」山中が立ちあがり、二人に近づいた。

「何故、アメリカが世界のリーダー的存在だと思う」山中の質問に、杉本は首を傾けた。

「先の大戦で唯一戦場にならなかった国は、アメリカとごく僅かな国だけだ。産業にも、商業にも痛手は残っていない。まさに伸び続ける先進国だ。亡命者も多く、あらゆる人種が移り住んでいる。広大な農地を持ち、自給自足だけでも生き延びられるのは、たぶんアメリカくらいだろう。軍事力も世界一、脅威に思わない国はないだろう。しかし対抗できるのは、ロシアをおいて他にない。逆にいえば、ロシアとって一番目障りな存在になっている。東西冷戦後、両

国は和解したが、お互いチャンスを狙っているのは事実だ。相変わらずスパイも暗躍している。今度の事は、ロシアにとって他国と協力して攻撃できる、正当な理由があった。日本を侵略していると言う、正当な理由が「一気に話してから、山中は一言付け加えた。

「日本をダシに使った」

「なんて人類は、浅はかなのでしょう。二十一世紀も戦いに明け暮れるつもりでしょうか」

「そうならない様に、我々だけでも努力しなくては」杉本の言葉に、輝が答えた。

「穏便に手を引かせるにはどうするか」山中は、腕組みをしたまま考えこんだ。結局いい案は浮かばず、ロシアの出方を見る事となった。会議室の外は、あいも変わらずお祭り気分に浸っていた。リサと洋子は壁にもたれ、不安そうな眼差しで語り合っていた。輝たちの姿に気がつくと、二人は小走り寄ってきた。

「なにがあつたの」リサは、なるべく小声で尋ねた。そんなリサを、輝はなにも言わずに抱きしめた。それから二人はリサと洋子の手を取り、人ごみから静かに離れて行った。

「ここならばいいだろう」人ごみから遠く離れたところで、輝は口を開いた。隠しても仕方ない事だと、輝はありのままを二人に告げた。輝の話しに、二人は打ちのめされた。

「私達、どうなるの」やっとの思いで吐き出した言葉は、小さくそして震えていた。

「二人に変わりはないよ、いつまでも一緒さ。その為にも周囲に変わってもらうしかない」輝の優しい語り掛けに、リサは微笑み僅かに頷いた。

「先生、ロシアの出方一つですが、もし我々の宣戦布告に受けて立つたらどうします」

「杉本君、それはないよ、大丈夫だ。日本とアメリカ、両方を敵にするとは思えない。戦闘が長引き、仮に日本がアメリカに吸収されても、日本の軍事力はアメリカに移行するだけだ。EU諸国も参戦

を見合わせるだろう。どっちにしてもロシアは手を引くしかない」
「そうですね、馬鹿な選択をしないように祈りましょう」杉本は言った。

「だが、問題が残る」

「問題とは何ですか」杉本は、尋ねた。

「手を引かせるにも、ロシアの面子を潰す事は出来ない。嘘でした、撤退しますじゃ、ロシアの信用は丸つぶれだ。そうなれば、破れかぶれに戦争を始めるかも知れない。その為にも、綿密な作戦を立てる必要がある」輝の説明は、十分杉本に伝わった。

「まったく、余計な仕事を増やしやがって」杉本は、一言吐き出した。

「ところで、リサの御両親は大丈夫なの」それまで黙って聞いていた洋子が、杉本に尋ねた。

「今のところ心配はないらしい。攻撃を受けたのは、北海道の基地だけだ」杉本の答えを聞いて、リサも少しは安心した様だった。本当はリサが一番聞きたかったことだったが、リサはじっと我慢していた。落ち着かないリサの気持ちが通じたのか、洋子が何気なく尋ねてくれた。リサはそんな洋子に、一層の好意を抱き始めた。そこに一人の兵士が走り寄ってきた。

「リチャード氏から連絡です」輝は一つ頷くと歩き出したが、振りかえりリサに手を差し伸べた。

「おいで」その一言は、リサの顔に微笑をもたらせた。会議室では、山中がリチャードと既に話しを始めていた。

「分かりました、気をつけて」そう言ってレシーバーを切ろうとしたが、山中はリサの姿に気づき、話しを続けた。

「リチャード、ちょっと待って下さい」そしてリサに、レシーバーを手渡した。

「パパ」リサの話し掛けに、リチャードの声は大きく弾んだ。

「おー、リサ、そっちはどうだい」

「いい人ばかりで、優しくしてくれるわ」リサは出きる限り、陽気

に答えた。

「そうだろう、パパも随分お世話になったよ。迷惑をかけちゃいけないよ」

「分かっているわ、でも、パパ大丈夫なの」

「なにが」リチャードは、あきらかにとぼけているようだった。

「聞いたわ、攻撃されたって」リチャードの返事は、少々時間がかかった。

「知っているのか…、でもここは大丈夫、安心して。みんな元気だよ」リサの心配をよそに、リチャードは明るく答えた。

「お願い、気をつけてね」

「分かった、じゃあ、切るよ。また連絡する。輝に宜しく」通信が途絶えると、山中が口を開いた。

「ロシアの攻撃は、どんどん南下しているらしい」

「撤退していないのですか」杉本は、驚いた。

「我々の指令支部の報告でも、次第に激化してきたと伝えている。アメリカの反攻作戦も準備段階に入ったと、リチャードから聞いたばかりだ。このままでは、全面戦争は免れない。今、ロシアと通信準備中だ。作戦を考えて欲しい」山中の緊迫した表情に、会議室には重苦しい空気が流れた。

「連絡が取れました」通信兵の言葉に、山中はゆっくりマイクに近づいた。

「山中です」

「ヤコブ司令官です、初めまして」聞きなれない名前に、山中は困惑した。

「チエルネンスキー司令官は、いかがされました」

「我が同志、チエルネンスキーは臆病風にふかれましてね。私が新任の司令官です」ヤコブの説明は、チエルネンスキーの更迭を知らせるものだった。ロシア政府は、我々の提案を拒否したらしい。山中がことの重大さに無言でいると、ヤコブが話し始めた。

「これから、日本はいかがされますか。我がロシアに宣戦布告しま

すか」冷静だが、挑戦的な言葉がスピーカーから流れてきた。

「EU諸国はどうします」山中の質問に、ヤコブは平然と答えた。

「我々を信じています。参戦しないとしても、ロシアだけでも戦いますよ。一日だけ待ちましょう。二十四時間後には、貴方がたの司令部を攻撃します。勿論、既に発見済みですよ。アメリカに吸収されるか、共に戦い生き延びるか、良く考えてください。仮に日本が滅びても、ロシアは痛くも痒くも無いですがね」通信は、ヤコブの大笑いによって終了した。ロシアの狙いは、やはりアメリカだと確信できた。

「山中司令官、EU諸国と連絡できますか」輝の質問に、山中は首を振りそして答えた。

「日本の通信衛星は機能していない。地球の裏側まで電波は送れない」

「ロシアはそれに気がついたのか」山中の答えに、杉本は納得した。「他国の衛星は使えませんか」輝の質問には、むなしく首を振るだけだった。

「せめて、イギリスかフランスに、連絡が取ればいいのですが」黒部の言葉も、むなしく空回りするだけだった。時間は歩みを止めず、規則正しく過ぎて行った。

「私を有明に連れて行って」その時、リサの口から、思いもよらぬ言葉が出てきた。

「なにを言っているのだ」山中は驚いて、つい大きな声を出した。

そんな山中を制止して、輝が優しく尋ねた。

「リサ、理由を言っってください。みんなに説明してほしい」輝が優しく微笑むと、リサはゆっくりと答え始めた。

「基地からなら連絡ができるわ、ワシントンに連絡したのは私よ。幸いおじい様もまだいるし、力になってくれると思うの」リサの言葉は、みんなの目に希望の光を灯した。

「それしか方法はないようだ。しかし、君を行かせる訳には行かないよ、僕一人で行く」リサは慌てて首を振った。

「駄目よ、輝は捕まるわ、私は大丈夫。お願い私に行かせて」リサは、一生懸命悲願した。

「リサ良くお聞き、既にアメリカ軍基地は、攻撃を受けている。そんなところへ一人で行かせられない。それに、僕は君の正式な夫だよ、たとえ捕まっても、釈放されるよ。リチャードもいることだしね」

「分かったわ、でもその前に、パパと相談して」リサはどうか納得した様子だった。

リチャードと連絡をとり、話しの粗筋を伝えたが、答えは悲観的だった。再編成の為、一時撤退を余儀なくされていて、リチャード達にも移動命令が出たところだった。どうにかするとの言葉を残し、リチャードは通信を終わらせた。指令本部には、続々と情報が寄せられてきた。ロシア軍は青森、仙台を抜け、破竹の勢いで東京に向かっていた。山中は中国政府に連絡をとっていた。しかし中国政府からは、非協力的な返答しか送ってこなかった。衛星の使用も、日本の意向を世界に伝える代役も、遠まわしに断ってきた。ロシアに睨まれたく無いのだろうと、山中は伝えた。二時間後リチャードから連絡が入った。

「通信衛星の末端装置を手に入れました。あと一時間もすれば全員が引き上げ、無人になります。装置を持ってそちらに向かいます」

「我々のアンテナは作動していない。末端装置があっても送信不可能だ」山中の答えに、しばらく沈黙が続いたが、やがてリチャードの声が聞こえてきた。

「では、基地に来てください。操作盤は破壊されましたが、アンテナは無事です。直接つなげば送信できると思います。私はこちらで待機しています」山中は通信兵に尋ねた。

「末端装置を直接つなぎ、送信できるか」

「多分出来ます。アンテナが無事ならば問題無いと思います」通信兵は自信たっぷりに答えた。それから山中は、レシーバーに向かい話した。

「リチャード、我々はこれからそちらに向かう、待っていてくれ」
「気をつけてください、ロシア兵は近くまで来ています」通信を終えると、山中は会議室を見渡した。

「誰が行くか」山中の独り言に、輝と黒部が歩み出た。その時リサは輝の腕を掴み、止めようとしたが、優しく振り払われた。

「私は外務省の人間として、世界に発表する義務があります」

「護衛は、任せてください」力強い黒部の言葉に、輝も山中も頷いた。

「やってくれるか」山中は二人をしつかりと、抱きしめた。そして通信兵にも、同行するよう命令した。

「杉本君、リサを頼む」振り向く輝に、杉本は頷いた。

「黒部さん、時間が無い、行きましょう」扉に向かう二人を、リサは涙をこらえ、じつと見送った。黒部が扉に手をかけた時、輝は振りかえり山中に言った。

「なにがあっても、司令部を守り通してください」そして二人の姿は、扉の奥に吸い込まれて行った。二人を見送ったあと、山中は思い出したように命令を下した。

「すぐに防衛ラインを引け。二人が戻るまで、司令部を必ず死守しろ」山中の声に、将校達は一斉に動き出した。通信兵も機材を集め、二人のあとを追って行った。

二

地上では静かだった街も、すっかり戦火に覆われていた。至るところで銃声と、爆発音が響いていた。

「潜伏していたロシア兵でしょう」黒部の説明に、輝は黙って頷いた。黒部と輝、通信兵と五人の兵士は、闇に紛れて有明へと走り出した。ゆっくり慎重に進む時間は、もはや残されてはいなかった。全力疾走の連続は、輝の胸を熱く苦しめ、心臓の鼓動を早めた。やつのおもいで有明に到着した時、基地には既に人影は無かった。

そして座りこみ咳き込む輝を、黒部は優しく抱きかかえた。

「煙草は止めなくちゃだめですよ」

「こんなに走ったのは、初めてですよ」咳き込みつつも、輝は答えた。

「待っていました。さあ、早く」物陰から現れたリチャードは、すっかり迷彩服を身につけ、輝たちの到着を、じっと待ち続けていたようだった。リチャードが先導するように歩き始めた時、すぐ近くで激しい爆音が轟いた。

「だいぶ近い、急いで」黒部の言葉に、リチャードと一行は走り出した。その間も爆音は絶え間無く響いてきた。幾つかの建物を回りこみ、中庭らしき場所に出ると、アンテナは無傷のまま立っていた。「急げ」黒部の言葉に通信兵はアンテナに駆け寄り、手早く作業をはじめた。どこかの工場でも基地にしたのか、アンテナを囲む建物には窓がなかった。それから黒部は、残りの兵士を散開させ、見張りに立たせた。作業を続ける通信兵の脇で、輝はリチャードに尋ねた。

「お父上は」

「厚木に移動しました。それから本国に戻るはずですよ」リチャードの目も、周囲に向けられていた。輝は、これから世界に向けて発表する内容を、頭の中で整理し始めた。爆音は更に近づき、激しさを増していった。五分ほどして、通信兵が接続の完了を告げた時、黒部のレシーバーに通信が入った。

「こちら基地入り口です。ロシア兵を確認、近づきつつあります」

「見つからぬよう、後退せよ、全隊員アンテナまで戻れ」そして黒部は輝に向け、頷いた。輝はマイクを受け取ると、大きく深呼吸をした。

「世界みなさん、これは日本からの発信です。一人でも多くの人に届くよう、祈りながら伝えていきます。私は日本政府を代表し、公式に発表しています。日本はロシアの参戦を認めません。軍事侵略と見なし抗議をしました。撤退するよう求めましたが、ロシア政府

はこれを拒否し、日本に対しても宣戦布告するつもりだと、伝えてきました。日本が滅ぶのは仕方ありませんが、世界を巻き込む戦いだけは避けていたきたい。ロシアの参戦に異議を唱えてください。繰り返します。日本はロシアの参戦を承認しません。参戦要求もしていません。人類の為にも……」その時、輝の腕を銃弾がかすめた。建物の屋上には、数人のロシア兵が陣取っていた。

「通信兵、二人を連れて脱出しろ、隊員、各個に攻撃」黒部の合図で、一斉に攻撃が始まった。通信兵は、輝とリチャードを連れ、中庭から飛び出した。振りかえる輝の目に、激しく応戦する兵士と、輝に敬礼を送る黒部の姿が焼きついた。三人は、暗闇の中走りつづけた。ロシア兵はまだ集結しておらず、基地の外に兵士の姿は無かった。砲撃の合間をぬって走り、人影を見ては隠れ、三人は恐怖しながらも移動し続けた。やつのことで、地下鉄まで戻った時には、日も昇り始めていた。地下通路にはバリケードが築かれ、兵士が警戒にあたっていた。基地内部も強固に武装され、重装備の兵士が動き回っていた。会議室まで戻ると、不安顔のリサに、洋子と杉本が寄り添っていた。

「先生」いち早く輝に気が付いた杉本の言葉に、全員が扉の方に目を向けた。

「輝」リサは、勢い良く輝に飛びついた。その顔には涙が光っていたが、満面の笑みを浮かべていた。輝はリサを抱きしめると、優しく頷いた。リサが続いてリチャードに抱きつくと、輝は山中に向かい足を進めた。

「ご苦労、上手く行ったかね」山中の目には、期待と不安が入り混じっていた。

「通信は、成功です。きっと誰かが聞いてくれると思います。しかし黒部さんは……」輝の言葉は、そこで途切れてしまった。山中は黒部がいらないのに気づき、輝の肩をやさしくたたいた。

「話してくれ」山中は、穏やかに尋ねた。

「通信の最後に、ロシア兵と遭遇しました。攻撃された私達を黒部

さんは逃がし、その場で応戦を始めました。それから分かりません」

「彼ならば心配無い。優秀な士官だ。必ず戻ってくる。心配ない」
山中の言葉に、輝は幾分気が落ち着いた。

「とにかくありがとう、心から礼を言う」それから山中は、通信兵にも労いの言葉をかけた。ロシアへの返答まで、残り八時間と迫っていた。リサは、リチャードとの再会を喜んだあとは、一時も輝から離れなかった。輝とリサとリチャードの三人が食事をとっていると、杉本が現れ空いた椅子に越しを下ろした。

「洋子さんは」

「休んでいます」杉本は、輝の問いに答えた。

「君も少し休んだらどうか」

「はい、でも気になることがあります」杉本は、一旦話を中断し、身を乗り出し小声で話し始めた。

「ロシアは撤退するでしょうか。あと、残り五時間です」

「出来る限りのことはした。あとは諸外国の対応に任せるしかない。彼らを、人間を信じよう。いかに愚かな戦いか、必ず理解してくれると信じよう」輝は、己に言い聞かせるように、杉本にも話した。

杉本は頷くと更に尋ねた。

「ロシアが撤退したあとは、どうなりますか、アメリカとの話し合いは、どうするのですか。パッカー議員は本国に戻りましたが、リチャードはここにいます。どう連絡をとるつもりですか」

「私が答えましょう」リチャードも身を乗り出し、話し始めた。

「エリザベスもワシントンに戻りました。連絡は家内から来ます。これだね」リチャードはポケットから小さな機械を取り出し、テーブルの上に置いた。

「それは」杉本は初めて見たらしく、手にとってながめた。

「最新型の衛星電話ですよ。順調に進みロシアが撤退すれば、アメリカ軍はまた、日本に来るでしょう。その時、エリザベスも来るつもりです。そして話し合いが行われるようなら、これに連絡がきま

す。部隊が撤退するときに、どさくさ紛れに失敬しました。それから、堂々と出て行き、話し合いに臨めば、万事オーケーです」

「エリザベスは、来る事が出来るでしょうか」リチャードの答えに感心しながらも、杉本は尋ねた。

「大丈夫、父、パツカー上院議員が味方です。何とか手を打ってくれるでしょう。それまで、武装解除することなく待てます。それよりも、問題はロシアです。輝の言うように撤退すればいいですが、もし……」リチャードはその先を、語らなかった。その時、四人の席にも、歓声が響いてきた。歓声の方に目を向けると、黒部と共に基地に向かった兵士が、大勢の仲間に囲まれていた。輝は咄嗟に走り出し、人垣を掻き分け黒部の前に飛び出した。目を合わせた二人は、固い握手の後、しっかりと抱きしめあった。

「心配しました。黒部さん」

「無事でなによりです」輝の言葉に、にっこりと笑い黒部は答え、そして輝に尋ねた。

「地上はロシア兵で、溢れかえっています。途中部下が一人やられました。ロシア政府からは、なにも言ってきてませんか」

「残念ですが、まだなにも言ってきてません。時間は迫る一方ですが、進展はありません」

輝は、力無く答えたが、黒部は、力強く語った。

「大丈夫です。きっと分かってくれます。ロシアは非難的になるはずですが」黒部の言葉には、確固たる信念が伺えた。そして、その言葉に輝も勇気付けられた。

三

時間は無常に過ぎて行つた。ロシアからは何の声明も発表されず、司令部内にも緊張の色が充満していた。会議室では沈黙が続く、皆時計の針を目で追っていた。三十分前、二十分前、十分前、とうとう山中が、沈黙を破った。

「総員戦闘準備、配置につけ」号令とともに、将校は部屋を走り出て行った。

「残念だが、タイムリミットだ。しかし良くやってくれた。心から感謝する」山中はそう言うと、輝達に深く頭を下げた。

「力及ばずに、すいません。残念です」輝も深く頭を下げた。

「ちくしょー、ロシアめ」杉本の目には、怒りがみなぎっていた。

「いや、君達は本当によくやってくれた。短い間だったが、知り合えて光栄だった。ありがとう」山中の目には、光るものが浮かんできた。

「我々は最後まで戦うが、君達を脱出通路に案内する。逃げ延びてくれ」山中の言葉に、輝は尋ねた。

「保護した市民はどうなるのですか」

「残念だが、あんなに大勢は無理だ。通路は狭く、混乱は免れない。彼らに脱出通路は教えられない、君らだけでも逃げてくれ」輝は大きく首を振り、山中に答えた。

「私達も残ります。ここから出ても、逃げきれないでしょう。ロシア兵は、至るところにいます。ならば共にここで戦います」輝の言葉に、山中はぐつと目をつむった。

「本当にすまない」山中の涙は頬をつたい、テーブルに音も無く落下した。その時一人の兵士が飛び込んできて、大声で叫んだ。

「第一通路で戦闘が始まりました」

「とうとう来たか」山中はベルトの銃を取り出し、銃創を確かめてから兵士に伝えた。

「改札まで後退、ホームに敵を入れるな、必ず死守しろ、私もすぐに行く」歩き出した山中は、輝たちに敬礼を残し会議室を出て行った。リサは輝に抱きつき、声を出して泣き始めた。輝はリサをしっかりと抱きしめたあと、静かに身体を離し優しく語り始めた。

「リサ、リチャードと逃げなさい」リサは、輝の言葉が信じられなかった。

「輝、何を言うの」リチャードも、慌てて言い返した。

「ここまで来て、今更逃げ出すなんて、出来ません」

「貴方まで死ぬ事はない、無意味です。お願いです、リサと逃げてください」輝はなおも食い下がった。

「私は、輝と離れないわ。一緒なら死んでもかまわない」リサは輝に、必死のおもいですがりついた。しかし輝は、リサを冷たく突き放し、リチャードに悲願した。

「リサを死なせたくない。彼女はまだこれからです。幸せになるチャンスはいくらでもあります。リサの為に逃げてください。まだリサは、純潔のままです」

「しかし……」リチャードは、泣き崩れるリサを見て、なにも言えなかった。

「いや、絶対にいや、輝と離れない。パパお願い、一人で逃げて。私をほつといて」

リサは尚も、輝にすがりついた。リチャードは、リサの姿を正視できなかった。やがて決心したように、リチャードは輝に話し始めた。「リサは、貴方の正式な妻です。神の前で永遠の愛を誓ったはずです。どんな事になろうとも、私には、二人を引き裂く事など出来ません。神の御心に委ねましょう」それからリサを立たせ、ゆっくりと尋ねた。

「後悔しないね」リサは、頷いた。

「ならば、パパはなにもしない、しっかり輝についていきなさい」リサは涙をふいて、再び頷いた。それからリチャードは、輝に向き直り話した。

「輝、ご覧のとおりです。決してリサを離さないで下さい。それから、二度とそんな事を言つて、可愛い娘を傷つけないで下さい」リチャードの言葉には、怒りが感じられたが、輝に向けられたものはなかった。怒りは、アメリカ、ロシア、そして、旧日本政府に向けられたものだった。突然リチャードは武器を持ち、会議室を飛び出して行った。輝と杉本は、リチャードに遅れまいと会議室を飛び出した。リサと洋子は飛び出す二人を、黙って見送る事しか出来な

かった。爆発音と共に、司令部は激しく揺れた。輝と杉本は、崩れ落ちるコンクリート片から、頭を保護しつつ出入り口へと走り続けた。線路に飛び出し一気にホームまで突っ走った。ホームでは黒部たちが、バリケードに身を隠し、敵の攻撃を待ち構えていた。

「どうですか」不意に声をかけられ、黒部は驚き振り返った。

「危険です。戻って下さい」黒部の言葉に、杉本が答えた。

「何処にいても、同じです。闘うしかないでしょう」輝も黙って頷いた。そんな二人を黒部は見つめ、微かに笑顔を浮かべた。そして戦況を説明し始めた。

「今は、改札口で敵を迎え撃っていますが、ホームに雪崩れ込むのも時間の問題でしょう。しかし、我々が必ずや撃退して見せます。そこでお二人には、弾薬の補充と伝達を頼みたいのですが」輝は頷くと、リチャードの事を尋ねた。

「いえ、ここには来ていません」黒部は、はつきりと答えた。その時銃声と共に、リチャードの声がホームに響いた。

「敵襲、線路から来るぞ」素早く反応した三人は、リチャードの声のするほうに走り出した。三田方面から銃声が聞こえてきたが、リチャードの姿は、闇に埋もれ見えなかった。

「リチャード」輝は声を殺し、ささやいた。

「静かに」闇の中から声が聞こえたと同時に、銃声が鳴り響いた。一瞬の閃光に、コンクリート柱に身を隠す、リチャードの姿が浮かび上がった。

「もう、大丈夫、片付けた。多分斥候だろう」その声に、黒部が懐中電灯に明りを灯した。

「戻りましょう」黒部の言葉に、四人はホームに向かい走り始めた。ホームに戻ると黒部は部下に、線路にも兵を待機させるよう命令した。輝は、リチャードが不思議でたまらず尋ねた。

「リチャード、貴方は……」

「驚いたでしょう、暗視スコープです。これなればうちりです」輝にスコープを渡し、リチャードは答えた。

「いえ、そうじゃなくて…」

「アメリカは銃社会ですよ。私も撃った事があります。ただ他の人より回数は多いでしょうね。湾岸戦争に従事しました、勿論兵士としてね。若い頃の話ですよ」リチャードは屈託なく笑った。

「とにかく無茶はやめて下さい」輝に言われて、リチャードはおどけて頷いた。

「とにかく、ありったけの弾薬を持ってきましょう」三人が線路に降り立った時、ホームで手榴弾が炸裂した。

「来たぞ、攻撃」黒部の声が、ホームの隅々まで届いた。そしてホームは、地獄へと変わっていった。急いで基地まで戻り、弾薬を手にしてホームに向かおうとした時、黒部たちが、走って戻ってきた。「もう無理です。突破されました。司令部で迎撃するしかありません」僅かに残った兵士と共に、基地まで戻り扉を硬く閉ざした。

「最後の砦です」扉を見つめる兵士の顔に、緊張と汗が浮き上がった。そして、銃声と共に、扉に食いこむ銃痕が盛り上がった。

「いよいよです」全員が扉に銃を向け、固唾を飲みこんだ。一分、二分、三分、しかし五分経っても、変化は起きなかった。黒部は緊張した足取りで、扉に近づいて行った。開閉スイッチに手をかけゆつくりと開く扉から覗いたが、そこにはロシア兵の姿は無く静まり返った闇が遠くまで続いていた。黒部は銃を構え、そのまま外に歩み出た。輝たちも、黒部の十メートルほど後をゆつくりと進んだ。しかし、線路にも、ホームにもロシア兵の姿は見当たらなかった。輝たちが顔を見合わせ途方に暮れていると、リサと洋子が息を切らし走って来た。

「やったのよ、上手くいったわ」洋子の説明に、杉本は首をひねった。

「なにが、上手くいったんだい」今度は、リサが答えた。

「ロシアが、ロシアが撤退を表明したの。今、連絡があつたわ」その言葉の持つ意味は、そこにいる全員に至高の喜びを与えた。抱き合い、涙を流して喜びを噛み締めていた。

損害は桁外れに多かった。山中の遺体も、改札口で無残な姿になって発見された。残った兵士によって、遺体は線路に集められた。若く優秀な兵士も、さっきまで言葉を交わしていた山中も、ただ人形のように横たわり、虚ろな瞳を闇に向けていた。

「ひどすぎる」杉本の言葉に、全員が涙を流し戦争の愚かさを呪った。そして一人の兵士が短い祈りを捧げた。

「泣いてはいられません、まだ、アメリカが残っています。犠牲になった彼らのためにも、日本を守り通してください」リチャードの力強い言葉に、輝は頷いた。会議室に戻ると、通信兵が待っていた。

「永田町の基地から、連絡が入っています」

「私に、ですか」輝は驚いて、聞き返した。

「はい」輝は、理由もわからず、マイクを握んだ。

「長田です」

「私は、吉田と言います。新政府を代表して貴方にお礼を言いたくて、連絡しました」

スピーカーからは、若そうな声が聞こえてきた。

「礼などんでもありません。そちらの状況はどうですか」

「だいぶやられました。僅かに兵士が残っただけです。そこで貴方にお願ひがあります」

「私に出来る事であれば」輝は答えた。

「貴方に、全軍の指揮をお願いしたいのですが」輝は男に慌てて返答した。

「私がですか？、無理です。軍の指揮官など勤まりません」

「しかしここには、士官すらいらないのです。ほかの基地も同様の有様です。お願いします」男の不安そうな声が、スピーカーから流れた。

「ならば、うってつけの人物がいます。こちらもほとんどやられま

したが、優秀な士官が残っています。彼ならばしっかりと指揮を取るでしょう」輝の自信たっぷりの答えに、男の声が弾んだ。

「そうしていただければ助かります。誰ですか」

「黒部一等陸佐です」黒部は急な名指しに、仰天した。

「では、我々の基地でも再編成が完了し次第、また連絡します」通信が終わると、黒部は輝に詰め寄った。

「私にも無理です。指揮官の器ではありません。誰か他の人を指名して下さい」

「黒部さん、彼ら若手も頑張っているのです。私も肩書き上、外務省事務局長です。誰かがやらなくてはいけないのです。貴方は優秀です。必ずや任務を全うすると信じています。お願いします。亡くなった山中さんのためにも、後任を引きうけてください」輝の言葉を慎重に受け止め、黒部は事の重大さを心に刻んだ。そして静かに頷いた。その後も、各基地から続々と通信が送られてきた。どの基地も予想以上の損害を受け、市民を入れての再編成に追われていた。しかし、唯一海上に展開していた部隊とは、連絡がつかなかった。

「司令官、緊急の通信です」

「EU連合のニールセンです。責任者と話したい」今まで傍聴席に座っただけの、EU連合からの突然の通信に、会議室の面々は驚き、淡い期待に胸を膨らませた。

「司令官の、黒部です」しかし、相手の意図がわからぬ間は、慎重に対処する必要があった。黒部はそんな気持ちを見せず、冷静に返答を返した。

「まずは、EU諸国の代表として、日本に感謝します。大きな間違いを犯すところでした」

「と言いますと、EU諸国はロシアを支持したのですか」黒部は信じられないと言う様子で、ニールセンに問いただした。

「分かってください。我々はアメリカに強い不信感を持っています。そこに今回の問題が持ちあがりました。アメリカにも再三に渡り、非難の声明を送りました。しかし、アメリカは耳を貸さず、

軍事行動はエスカレートする一方でした。そんな時、ロシアから参戦要請をうけました。勿論日本から、ロシアに救助要請があったと聞きました。我々は、その言葉を信じ、参戦要求に応えました。しかし、日本からの声明を聞き、ロシアは各国から非難的となりました。そして、我々は手を引くよう要求しました「一通りの説明を聞いた後、黒部はニールセンに尋ねた。

「その事には、感謝します。ロシアは撤退しましたが、EU諸国はこの先どうするつもりですか」黒部に対する返答は、悲観的なものだった。

「引き続きアメリカに声明を送りますが、それ以上は見守るしかありません」

「我々を見捨てると」黒部の言葉には、怒りと落胆が入り混じっていた。

「EU諸国の一般市民も、今回の抗争でかなりの数の犠牲が出ています。日本人に拉致された者、殺された者、銃撃戦に巻き込まれた者、はつきりとした数字は出ませんが、相当数に昇ります。その為日本に対する援助を見送ると言う意見が大多数です。各国首脳も頭を痛めています。どうしようも無いのです。ただこの先、他国の介入は我々が阻止します。世界の為にも、平和的解決に全力を注いでください」ニールセンの言葉に、黒部はうなだれる様に答えた。

「分かりました。全力で解決に望みます。心遣いを感謝します。それと、犠牲者に対し、心からお詫び致します」そして、通信は静かに終了した。通信に耳を傾けていた輝が、黒部に向かい話し始めた。「仕方ありません。日本人の殺戮は事実です。我々だけで何とかするしかありません。その為にも、黒部さん、あなたの力が必要です。最後まで諦めずに頑張らしましょう」マイクを見つめたまま黒部は頷き、輝に向き直った。その顔には、断固たる決意が浮かんでいた。「これから、本当の戦いです。出来る限りの事はします。これからも協力して下さい」

黒部のしつかりした態度に、一同共感し、共に戦う意志を固めた。

新年を迎える十日前の出来事だった。

危機と不安

危機と不安

—

アメリカ軍は、徐々に日本に集結を始めていた。日本の反攻もロシアの攻撃も無くなり、のんびりとした軍事移動に、兵士の顔には緊張の色が見えなかった。そんな中、エリザベスの顔には、一抹の不安と緊張が浮かんでいた。軍用機の機内には音楽が流れ、兵士は皆、旅行気分浸っていた。エリザベスは上院議員の秘書と言う肩書きで同乗し、視察として日本に向く事になっていた。時折、声をかける将校も、気楽に話しかけた。

「視察といってもまだ危険ですよ」

「その割には、貴方達兵士は緊張もせず、楽しそうに見えますけど」エリザベスの皮肉交じりの答えに、将校は面食らったようだった。

「まあ、だいぶ静かになりましたからね。しかもロシアの進撃で、日本人にもかなりの被害が出たそうです。もう我々に対抗する力も無いでしょう。気楽なものです」今度は、エリザベスが面食らった。「同じ人間の死を喜んでいる様に聞こえるわ」

「我々は軍人です。相手が減れば、我々の犠牲も減ります。当然のことです」将校の言葉にエリザベスは猛然と反論した。

「そういった気持ちも、戦争をつづけるつもり。平和的に解決しようと思わないの」エリザベスの言葉に、将校は平然と答えた。

「軍人は命令に従うだけです。その決定は政府です。私に文句をつける前に、貴方の議員先生に言ってお下さい」エリザベスは議員秘書の立場を忘れそうになった。

「とにかく私は、現状の日本を見るために来たの、それと、貴方達がこれ以上日本を破壊しないよう、監視する為にも同行する必要が

あったの。新しい州を焼け野原にするつもりなら、構いませんけど」
エリザベスは、そう言い放つと窓に目を向けた。将校はうんざりした顔で、渋々返事を返した。

「分かりました。協力しましょう」しかし、エリザベスは返事もせず、青い空を眺めていた。その心の中には、日本に残したりチャード、リサ、必死に頑張ってくれているはずのパツカーの姿に占領されていた。その肝心の父、パツカーからの連絡は、まだ無かった。

その頃 パツカーは緊張した気持ちを押さえ、会議室で待っていた。親しいと言っても、相手は大統領であり、しかも、彼の政策を非難しに来たパツカーは、とても落ち着いていられなかった。それでもパツカーは、可愛いリサの顔を思い出し、大きく首を振った。

「政策を非難するのではない。ただ新政府と話しをしてもらうだけだ」と自分に言い聞かせ、必ず理解してもらうのだと、心に強く思いこませた。しばらくして、大統領補佐官がパツカーを迎えに現れた。彼とも顔見知りだったが、パツカーの真剣な顔に、普段は口にする冗談も、彼の口からは出てこなかった。大統領はいつもの笑顔でパツカーを迎えたが、彼の深刻な顔に、大統領は事の重大さを感じ、補佐官に席を外すよう命令した。

「さあパツカー、二人きりだ。話してくれ」補佐官が執務室から出ると、大統領は尋ねた。

「私には、三十年の議員生活があり、多くの大統領に仕えました。中でも貴方とは、一番馬が合い、協力も惜しまなかった」パツカーは、一息ついた。

「そうだ、君にも大統領の素質があり、今まででなかったのが不思議なくらいだ。私も君を信頼し、数多くの協力を頼んだ。最も親しい友人の一人とと思っている。そして君の困った顔も何度も見てきた。はつきり言ってくれ。包み隠さず話してくれ」しかし大統領は、パツカーの話しに失望し、困惑の表情を隠せなかった。だが、パツカーは諦めなかった。会話は予定時間では納まらず、大統領は他の執務をキャンセルするしかなかった。

エリザベスは、東京の街並みに我が目を疑った。既に焼け野原と化した街には、瓦礫が山を作り、燻る煙が漂っていた。機内で会話を交わした将校が近寄り、話しかけた。

「これ以上は破壊出来そうも無いですな、ロシアも派手にやったものだ」と、そして笑いながら離れて行った。エリザベスは、リサとリチャードの身を案じながら、心の中で強く祈った。新司令部は皇居に構えられていた。日本の皇族は既にアメリカの保護下に置かれ、本土で手厚いもてなしを受けていた。しかし日本に戻る事を望み、もてなしを拒否していた。エリザベスは、彼らの気持ち痛いほど分かった。日本が無くなれば、彼らはただの民になる。運命を共にしたいと願うのも、当然の事だと思えた。司令部に向かう車の中で、エリザベスは嗚咽を堪えきれなかった。多くの遺体が放置され、皇居の周りのオフィス街は完全に破壊されていた。しかし皇居はかろうじて原型をとどめていた。司令部に到着したエリザベスを指揮官は快く迎え、そして全面的な協力を約束してくれた。

一方、輝たちの司令部では、徐々に近づく新年に、パニックを起こす者があとを絶たなかった。新年を迎えれば、それこそ内乱として総攻撃を受けるのは明白だった。輝たちの顔にも、焦りの色が、深く濃く浸透し始めた。食料も飲料水もほとんど底をついた状態で、市民からも非難の声が高まっていた。

「あと一週間、それで全てが決まる。最悪の事態を想定して、皆の意見を聞きたい」輝の提案で、皆が会議室に集まった席上で、黒部が話し始めた。

「アメリカとの話し合いが、行われない場合、または話し合いが決裂した場合を想定してもらいたい。そのあとの我々には、どんな道が残されるのか、どんな行動をとるべきか、それぞれ意見を述べてほしい」

「わしの考えは、変わらんぞ。最後の一人になっても闘うつもりじや」今では子分のほかに、多数の部下を持つ中村が答えた。

「今の兵力では、踏み潰されるのが目に見えています。それでも闘う事を貫きますか」輝は冷静に尋ねた。

「勿論、しかし若い兵士に無理強いするつもりは無い。あくまでもわしの意見じや」次に杉本が話し始めた。

「ロシアとの戦闘で、多数の犠牲者を出しました。これ以上犠牲者を出す事に、私は反対です。アメリカ国民になっても、生き延びるほうが賢明だと思います。しかし、最後の最後まで諦めません。連絡を待ちます」

「アメリカよりも長い歴史を持つ国が、滅んでも構わないというのですか。しかもアメリカによってですよ」新しく将校に抜擢された若者が、声を荒げて発言した。

「いえ、アメリカによってではありません。日本の政府が売り渡したのです」そう言うと、杉本は、将校をじつと見据えた。

「確かに発端はそうですが、だからと言って一つの国を買収するなど言語道断です」輝が二人の間に入って、発言を始めた。

「確かに、アメリカも強引な行動に出ました。それによって傷ついたのも確かです。では、どうするつもりか聞かせてください」若い将校はしばらく考えてから答えた。

「もう一度、諸外国に援助を求めてはどうですか」将校に黒部が話し始めた。

「それは無理だ。EUも、アジア諸国も傍聴席に座ったままだ。アメリカを恐れている。仮に救援を受け入れたとしても、ロシアみたいな軍事行動をとられたら、それこそ人類は滅亡するだろう。下手に救援は求められない」将校の脳裏にも、ロシアとの悪夢の戦闘が浮かんだのか、黙りこんでしまった。黙りこんだ将校に代わり、黒部が再度口を開いた。

「私は初め、日本と運命を共にしようと思っていました。しかし、ここに非難している大勢の人を巻き添えさせる事など、私には出来

ません。どんな状況でも生き残る事が最善だと思います。最終的にはアメリカに属しても仕方ないと思います」しかし黒部の心は、悔しさと惨めさに覆われていた。その時リチャードが叫んだ。

「今までの犠牲は無駄だったというのですか」一同は、リチャードの叫びに言葉を失った。それほどまでに、リチャードの言葉は、全員の心に鋭く突き刺さった。

「確かに初めは、日本人を恨みました。ひどい仕打ちをされた事は生涯忘れられないでしょう。しかし、輝や杉本に出会い、私の気持ちは徐々に変わりました。そして貴方達に会い、気持ちもはっきりと固まったのです。こんな事は許されないと。父、パッカーも貴方がたの熱意に負けたのだと思います。最後まで諦めないで下さい。今回を発端に、次々と国が買収されたなら、この先世界はどうなってしまうか、考えてください。アメリカの好き勝手を許さないで下さい」リチャードの言葉の最後は、涙に霞んでいった。輝には、リチャードの心の葛藤が、手に取るように分かった。祖国を非難し、日本に協力している自分に怒りを覚える反面、行動せずにはいられない気持ちに、彼の心は動かされていた。考えて見れば、リチャードの事を知ったアメリカ政府は、反逆者のレッテルを貼るだろうし、パッカーにしても、政治生命をかけて闘ってくれている。それなのに我々が弱気な態度にできれば、彼ならずとも叫んで当然のことだった。輝はしっかり自分に言い聞かせてから、ゆっくりと口を開いた。「リチャードの言うとおりだと思います。このままアメリカに屈してしまえば、犠牲になった者は浮かばれないでしょう。それならば、初めから大人しくしていれば良かったのです。しかし、我々は立ち上がった。アメリカに対抗すべく立ち上がったのです。その気持ちを最後まで貫きましょう」

「しかし、弾薬や、食料、兵士まで不足しています。そんな我々になにが出来ると言うのですか」新任の将校は、不安に駆られ尋ねた。「ちよつと待て、兵士はともかく、弾薬ならば手に入れないことも無い」

「どうやって」中村の答えに、黒部は慌てて聞き返した。

「極道には、極道の道があつてな、東南アジアや、中国から手に入る。無論政府は関与しないから、奴らの国でも問題は無かるう」

「しかし、簡単に運びこめないでしょう」若い将校の不安は消えなかった。

「なに、奴らもプロじゃ、何とかするだろう。それよりもどうやって代金を支払うかが問題だ。あくまでもビジネスだからな、いい知恵はあるかい」

「金塊が隠してあります。それでどうでしょう」黒部の言葉に、中村は喜び頷いた。

「金塊ならば大丈夫じゃ、今では円は紙くず同然じゃ」

「しかし、それは日本再建の為の資金です。使ってしまったては……」

「再建するものにも、滅んでしまつたら何の価値も無い。アメリカに没収されるだけだ。今使わずにして、いつ使うというのか」若い将校の気持ちもわからなくは無いが、日本が無くなる前に、黒部は出来るだけの事をするつもりだった。黙って会話を聞いていた、杉本の気持ちは沈んでいた。死を恐れているわけでは決して無かったが、洋子の事が気がかりだった。日本を守り通すことも、平和な世界になることも、夢でしかないと思い始めていた。それほど日本は衰弱しきつていた。結局、武器と弾薬だけは手に入れる段取りが出来たが、食料や兵士に至つては名案が浮かばず、話し合いは難航していた。そんな中、輝は不意に杉本の言葉を思い出した。

「確か、両親は軽井沢にいたんだね」突然話しかけられ、杉本は戸惑った。

「ええ、まだ居ると思いますが、なにか」

「いや、君に会う前に、ある老人から聞いたんだけど、田舎、いや、郊外ならなにか食料になるものを、作っていると思つてね」輝の何気ない発言に、皆、目を光らせた。

「他の基地にも聞いてみます」しかし、若い将校の言葉に、黒部は肩を落として答えた。

「無理だろう、たとえ作っていても、これだけの人数を賄う事など不可能だ、しかもロシアに攻撃され、アメリカ軍も集結しつつある中で、のんびりと畑仕事をする者など居るわけではない」黒部の言葉は、道理にかなっていた。

「実際、いつまで耐えられますか」輝の質問に、黒部はうつむいたまま答えた。

「どんなに節約しても、新年までもたないでしょう。これほど長期に大勢を保護する事など、計算されていたわけありませんでした」

「では、弾薬が手に入っても、無駄だと言うことか」中村は、気落ちした態度を隠しめせず、溜息混じりの声を発した。会議室はまたも沈黙に包まれてしまった。

「まずは食料の調達だな、わしが行く」中村は、突然立ち上がり、扉に向かい歩き始めた。

「当てでもあるのですか」中村に追いつき、輝は尋ねた。

「別に当てなど無いが、ここでじっとしていても始まらないだろう。片端から倉庫や、商店などに行ってみるつもりじゃ」中村の行動力には、一同驚かされた。

「私も一緒に……」輝が言おうとすると、中村が言葉を遮った。

「あんたは、ここに居らんとイカン。あんたが居ないと連絡が来た時困るだろう。わしにも優秀な部下が居るから、心配しなさんな」中村はそう言うと、会議室から出ていった。

それから三日後、何処をどうやって運びこんだのか、大量の武器と弾薬がここ司令部にも、集められてきた。中村は毎日出掛けては、大量の食料を調達してきた。

「何処から調達してくるのですか」輝は、その多さに驚きながら尋ねた。

「奴らの施設内には、大量にあつてな」中村は食料の山から、一つの缶詰をとりだし見せつけた。缶詰を見た輝の驚きは、更に増していった。

「まさか、アメリカの基地に忍び込んでいるのですか」

「食料が狙われているとは、思ってもいないようじゃよ。警備兵もないし楽なもんじゃ」

そう言うと、中村は笑いながら仕分けを始めた。輝はつくづくこの中村と言う初老の男に、深い尊敬の眼差しを向けていた。しばらく黙って見ていると、リチャードが凄いい勢いで駆け寄って来た。

「きました。連絡がきました。エリザベスからです」その顔には涙が流れていたが、すぐに喜びの涙だと輝には理解できた。その顔には悲しみの色は無く、笑いが溢れていた。

三

会議室には、既に各部署の責任者が集まっていた。輝と中村も、リチャードのあとから足早に部屋に入ってきた。全員が揃い席につくのを待つて、黒部が立ち上がり口を開いた。

「やっと、連絡がありました。待ちに待ったときです。では、リチャード」黒部に変わり、リチャードが立ちあり、ゆっくりと全員の顔を見まわしてから話し始めた。

「ついにやりました。アメリカ政府は要求を呑み込み、話し合いに応じると結論を出しました。明日、午後六時に皇居での話し合いが行われます。しかもエリザベスの話では、父、パッカーも要員の一人として出席するそうです」リチャードは躊躇いもなく涙を流し、喜びに浸っていた。

「頑張った甲斐がありました。そしてリチャード、エリザベス、パッカー議員にここから感謝します。ありがとう」黒部の目にも、涙が浮かんできた。

「しかし、明日と言うのは…」輝は、不安に駆られる若い将校を嗜めた。

「もう時間がないのです。一日も早く結論を出す必要があります。悠長に構えてはいられません。あとは新政府に任せましょう」

「とにかく、至急永田町の基地にも連絡をいれてくれ」輝に相槌を

打ってから、黒部は通信兵に連絡を急がせた。

「しかしギリギリになって、アメリカはどうしたのでしょうか」杉本の心の中には、まだ不安が残っていた。

「話しによれば、諸外国から抗議の猛攻を受けている様です。それに、やはり躊躇いもあるのではないのでしょうか。かつての同盟国を滅ぼすなど……」リチャードはそう言いながらも、大統領の苦難と、旧日本政府に対する憤りを感じていた。

「司令官、永田町です」通信兵に代わり、黒部がマイクを握り話し始めた。報告が終わるとスピーカーからは、拍手や喝采が流れてきた。

「あとは、貴方がたの出番です」黒部の言葉に、不安そうな返事が返ってきた。

「私達に出来るか不安です。是非とも御一緒願いたいのですが」例の若い吉田議員の返事に、黒部は慌てて答えた。

「私など御一緒しても意味がありません」

「長田さんに御一緒してもらえませんか。お聞きした所、上院議員の一人とはご親戚だとか」輝はスピーカーに向かい、猛然と首を振った。そんな輝を笑ってみながら、黒部はゆっくり答えた。

「分かりました。御一緒してもらいます。そちらも準備をして下さい。おつて連絡します」

「黒部さん、私は……」輝の言葉を、黒部は大声で遮断した。

「お願いします。力になってください、彼らはただ不安だけです。貴方がいれば安心出来るのでしょうか。それに貴方ならば私も、いえ、ここにいる全員も安心して任せられます。誰かがやらなければいけないのです。よね」黒部の言葉に、輝は観念した様にうな垂れた。

「分かりました。しかし政策はしっかり決まっていますのですか」

「彼らも共に辛い体験をした仲間です。二度とこんな事にはしないでしょう。信じましょう。彼らを」黒部の言葉には、微塵の迷いも見られなかった。

「そうですね、信じましょう。その代わり、早急に永田町に移動し

たほうがいいと思うのですが」輝の提案は、すんなりと受け入れられた。

「中村さん、この司令部と、非難している市民をお願いします」黒部は中村に言った。

「任せてくれ、準備もあるだろうから、早く移動しなされ」中村は快く引き受けてくれた。

「ところで、アメリカ兵は大丈夫でしょうか。移動中に攻撃されはしないですか」若い将校に、リチャードが答えた。

「アメリカ政府の決定です。軍部も勝手な行動を取れないでしょう」若い将校はにこりともせず頷いたが、不安な顔は隠せなかった。

「各自準備にかかってください。私は移動のことを永田町に報告します」黒部の発言で、会議は閉会された。輝はリサに伝える為、急いで会議室をあとにした。杉本は、輝を追いかけるように出ていった。

「先生」会議室を出た輝は、杉本に呼び止められた。

「どうした。早く洋子さんにも伝えてあげなさい。待ちに待った日だよ」しかし、杉本の顔は真剣だった。

「リサも移動するのですか。ならば私達も連れていってください」「勿論連れていくつもりだが、何故だい、私はただ彼らと一緒に行くだけだし、それともなにかあったのか」輝は、余りに真剣な杉本の表情が気になった。

「いえ、そういうわけでは…、ただ胸騒ぎがするのです」杉本の表情は更に厳しくなった。

「だったら尚の事、ここにいたほうがいいだろう」輝は、杉本の言葉の意味を把握できなかった。と言うよりも、なにが言いたいのか理解に苦しんだ。

「しかし、先生と一緒にいたお蔭で、今まで生き延びました。なぜか離れてはいけない気がしてなりません」杉本にも、胸騒ぎが何なのか分からなかった。

「リチャードの話では、心配なさそうだし…、でもいいだろう、き

みが一緒なら私も心強い、二人に話して準備しよう。そんなに心配するなよ」輝の明るい表情にも、杉本の気は晴れなかった。リサは、輝と一緒にいけることを喜んでいたが、洋子は杉本の表情を敏感に感じ取っていた。

「なにかあったの」楽しそうに準備をするリサには聞こえぬように、洋子は杉本に尋ねた。

「いや、なんでもないよ」杉本は出来る限り明るく答えた。

「でも、なにか変よ」明るく答える杉本の顔に、陰りがあるのを洋子は見逃さなかった。

「多分疲れているのさ、大丈夫、心配ない」

「それならいいけど…」それでも洋子は気になって仕方なかった。

「準備できましたか」

「もう少し」輝に言われて、洋子は慌てて鞆を開いた。準備と言ってもたいした荷物があるわけでもなく、支給されたものを鞆に詰め込むだけで、すぐに整った。四人が会議室に入ると、重装備の兵士十人と、リチャード、そして黒部が準備を終え待っていた。

「向こうに着いたら連絡をいれる」黒部が残りの兵士に伝えると、輝に向き直り行動予定を説明しはじめた。

「まず、三人が斥候として出発します。安全を確かめながら、我々はあとに続きます。出来る限り繁華街は避けたいのですが、場所的に無理があります。そこで地下を進むことにしました。真つ暗ですが、地上よりは安全でしょう」そこで、ムツとしているリチャードに気がつき慌てて説明した。

「いえ、あなたの意見に反対しているわけではありません」

「しかし、アメリカ政府の決定を疑っています」リチャードは更に不機嫌な顔をした。

「念のためです」黒部が困惑していると、リサが口を開いた。

「パパ、瓦礫の山を歩くより、線路のほうが楽でしょ」

「それはそうだけど…」リサに言われ、リチャードは渋々納得した。「とにかく出発しましょう」輝の一言で、その場は納まった。都営

三田線から南北線のホームに移動し、トンネル手前で一行は止まった。見つめていると引きこまれそうな闇と、虫の声さえ聞こえない静寂が広がっていた。三人の兵士はそれぞれ懐中電灯を片手に、一足先に闇のなかへと消えていった。十分程して、黒部のレシーバーに通信が入ってきた。

「異常なしです」

「了解、そのまま進み、絶えず連絡をいれるように」そして黒部の指示で、三人がしんがりとして残り、輝たち一行は闇のトンネルへと向かい歩きはじめた。静まりかえるトンネル内に、砂利を踏む音だけが聞こえていた。

「麻布に着きました。異常なしです」斥候からの連絡は、五分置きに送られてきた。

「どうやら軍部も承諾しているようです」静寂を破り、黒部がリチャードに話しかけた。

「当たり前です。政府の決定には軍部も逆らえません」リチャードの気持ちも和らいだ。しかし本当は、リチャードにも不安はあった。ただ、それを指摘された事に少々いらついただけだった。輝はリサの、杉本は洋子の手を握り、四人は無言で歩き続けた。輝には杉本の言葉が気になっていた。杉本も胸騒ぎの原因が見つからず考えていた。六本木を過ぎた辺りから、リサの息遣いが荒くなってきた。いくら楽だと言っても、砂利道は確かに歩き難かった。そんなリサに気づき、輝が話しかけた。

「大丈夫かい」

「ええ、ちよつと足が痛いだけ、大丈夫よ」リサの声は明るかったが、息遣いは激しくなる一方だった。輝はしばらく様子を見ていたが、黒部を呼び止めた。

「しんがりは何処まで来ていますか」黒部はしんがりと連絡をとり、輝に答えた。

「十分程後ろです。なにか」

「リサが足の痛みを訴えています。ここで休憩して、しんがりと合

流します」別に黒部を責めた訳ではないが、輝の答えに黒部は慌てた。

「気が付かずにすみません。女性がいるのに、休憩も取らず。ここで小休止しましょう」

「いえ、急いでください、あとで合流します。どうか先に行ってください」黒部は戸惑った。

「しかし…、洋子さんの方は大丈夫ですか」

「私は大丈夫よ。でも、離れ離れにはならない方が無難だと思います」

「そうです。たった十分だけでも、こんなところに二人きりでは危険です」杉本も答えた。

「なにも危険などないさ、斥候からも心配するような連絡は入ってこない、早く永田町の人を安心させてやってくれ」たしかに休憩している時間はなかったが、杉本の胸騒ぎは激しくなってきた。

「では、私も洋子と残ります。黒部さんは、先を急いでください」黒部は仕方なしに頷いた。

「分かりました。兵士を二名置いていきます。くれぐれも気を付けて」黒部の言葉に、

「私が残ります。兵士は大丈夫、連れて行ってください」と、咄嗟にリチャードが答えた。

黒部は少し考えたが、リチャードの射撃の腕を信じた。

「それでは、しんがりと合流したら、連絡を下さい」黒部の顔には心配の色が浮かんでいたが、残りの兵士と共に歩き始めた。黒部達の姿が見えなくなると、リサが口を開いた。

「なんだか、足手まといみたい。ごめんなさい」

「いいんだよ、君は兵士じゃないんだから」輝のやさしい言葉に、リサは頷いた。

「そうよ、本当は私もちょっと疲れていたのよ」洋子の言葉に、リサはにこりと笑った。

「さあ、立っていないで座りなさい。私が見張っています」リチャ

ードに促され、一行はレールに腰を下ろしたが、杉本も銃を構えリチャード同様一行から少し離れた。

「リサ、足を見せてごらん」輝が明りを照らすと、リサの靴には血が滲んでいた。

「血が出ているじゃないか」輝が靴を脱がすと、指先部分の靴下が真っ赤に染まっていた。

「支給された靴が、少し小さかったみたい。けど大丈夫よ、本当に」
「こんなに血を出して、大丈夫なわけないよ」輝はそっと靴下を脱がすと、中指に出来た豆が見事に潰れていた。

「随分ひどいじゃない」洋子が覗きこみ、つい大きな声を出してしまった。その声に、十メートル程離れていた杉本とリチャードも戻ってきた。

「これでは、痛い筈ですよ、大丈夫かい」杉本はリサの身を案じた。リサは頷くだけだった。見かねたリチャードが輝に話しかけた。

「この先は、私が背負っていきます」リチャードの提案に輝は首を振った。

「私が背負います。リチャードの射撃の腕はしっかりと見させてもらいました。私が銃を持つよりも安心できます。それに、リサは私の妻ですから」輝の言葉は、リサとリチャードを喜ばせるのに十分だった。リサには、新しい靴下を履かせるだけにした。靴を脱がせ、指先を開放した事で、リサの痛みも和らいだ様だった。ところが、十分経つてもしんがりの姿はおるか、持っているはずの電灯の光さえ、闇の中に見つけられなかった。輝は歩いて来た方に目を凝らしたが、底無しの闇が続いているだけだった。輝は急いで連絡をとろうとしたが、うっかりした事に、誰も通信機を持っていなかった。
「私が見てきます」相談した結果、リチャードが名乗りをあげ、歩いてきたトンネルを戻り始めた。

「とにかく明りを消したほうがいいでしょう。何があったか分かりませんが、居場所を教えるようなものです」杉本は、胸騒ぎの原因が理解出来たような気がした。そして不安と恐怖が一同に広がり始

めた。よく、長くいると暗闇にも目が慣れると言うが、あれは間違
いだと輝は思った。わずかな光でもあれば別だが、ここには一切の
明りもなかった。握り締めるリサの手は、小さく震え汗をかいてい
た。優しくリサを抱き寄せたが、本当にリサなのかさえ不安になっ
てきた。どのくらい息を潜めていただろうか、砂利を踏む音が近づ
いてきた。輝は目に見えない相手、音のする方向に、適当に銃口を
向ける事しか出来なかった。その足音は、確実に輝たちを目指し近
づきつつあった。まるで見えるかのように。リサの震えが全身に広
がっていくのを、抱きしめる輝には、はっきりと伝わってきた。そ
の時、輝は突然気が付いた。“暗視スコープ”リチャードに見せら
れたスコープを思い出した。相手には我々は丸見えなのだと思うと、
輝の身体に戦慄が走りめぐった。

輝の引き金にかけた指に、思わず力が入り発射寸前の時、リチャ
ードの声が闇の中から囁かれた。

「大丈夫、私です」輝は、ホッとして銃を下ろした。リサの震えも
止まったが、二人とも全身に汗をかいていた。

「どうでしたか」輝が電灯に手を延ばしたが、リチャードに手を掴
まれ止められた。やはりリチャードは、暗視スコープを使っている
様だった。

「しーっ、静かに。だいぶ戻りましたが、しんがりはいませんでし
た。影も形も見当たりません」リチャードの知らせに、輝の身体に
再び汗が噴出してきた。

「何だつて、それじゃ…」

「分かりません。とにかくここを離れたほうがいいでしょう」リチ
ヤードは声を殺して、答えた。しかしすぐに輝に尋ねた。

「ところで、杉本たちは」

「えっ、その先の壁の窪地にいませんか」輝には見えないが、明り
を消す前にいたはずの方向を指差した。

「いえ、いません。見える範囲では姿はありません」リチャードに
も事の重大さが理解し始めた。僅か五メートル程の距離にいた二人

が、輝たちに気づかれずに移動したとは、とても考えられなかった。
「何が起きたんだ…」輝は理解に苦しんだ。

「何か変です。私達の知らないところで、何かが起きています。急いで黒部さんを追いかけたほうが無難です」

「しかし杉本を見捨てるわけには…」

「今はここから離れるのが先決です」輝は、リチャードの意見に従うしかなかった。しかし、杉本達に何も出来ない自分が悔しかった。輝はリサを背負い歩きはじめた。と言っても、輝には何も見えなかった。そこでリチャードが輝のベルトを掴み、真直ぐに歩けるよう先導してくれた。そのうち前方から、数個のライトが踊りながら近づいて来るのが確認できた。輝は咄嗟に身構えたが、リチャードに黒部だと知らされ、リサを下ろした。黒部の持つライトは、容赦なく輝を照らしつけた。しばらく真の闇に埋もれていた三人には、苦痛の光に他ならなかった。

「しんがりと連絡がつかず、心配になりました」

「しんがりについて来ませんでした。そして杉本たちも行方不明です」輝は、細かに状況を説明したが、黒部は信じられない様子だった。

「まさか、そんな事が…」

「事実です。十分ほどの間に、姿が消えていました。二人が心配です」再び黒部と出会えた喜びよりも、杉本の身を案じる気持ちで一杯だった。

「私達が、調べてきます。皆さんは先を進んでください。少し行つたところに、斥候も戻って待機しています」黒部は兵士一人を残し、更に戻っていった。リサは兵士と輝によって担がれ、リチャードが先頭に立ち、ゆっくりと歩きはじめた。四人は無言で歩き続けた。と言うより、理解できない現実が混乱していた。誰が、何の為に、二人を連れ去ったのか、それとも、二人が何故姿を消したのか、しかも、ごく近くにいた輝たちに気づかれず、考えれば考えるほど理解に苦しんだ。程なく、斥候にでていた三人と出会った。

「先程、先に永田町に向かえとの連絡がありました。まだ手がかりは掴めていないようです」斥候の報告に輝は頷いたが、本当は戻って杉本を探したかった。しかし、傷ついたリサを残し、待つている人を裏切り、日本を見捨てることも出来なかった。黒部を信じ任せるしか道はなかった。リサは二人の兵士が交互に担いでくれた。まるでライフルをブランコに見たてたような担ぎ方だった。永田町のホームも高輪同様に、戦闘の傷跡が色濃く残っていた。基地に入ると、輝たちは盛大な歓迎を受けた。

「よく来てくださいました。心からお礼いたします。私が吉田です。そちらがりサさんですね、始めまして。美しい方だ。そしてリチャードさん、この度はなんとお礼すれば良いのやら、それから彼らが新政府の面々、日本の新しい顔です」吉田は、一人ずつ紹介し始めた。十人もいるのに、出生地から、学歴、政治経験や家族構成、担当部署に当選回数まで得意そうに話す吉田に、さすがの三人もウンザリしてきた。

「少し休みたいのですが」次の紹介しが飛び出す前に、輝は吉田に小声で言った。

「気が付かずにすみません。では、後程話しをしましょう」吉田はくるりと振り返り、新しい政府の面々に向かい話した。

「皆さんお疲れです。会見は後にします」すると新しい顔の面々も、くるりと回り戻っていった。三人はその光景をア然として見ていた。「何だ、あの連中は」輝はつい、こぼしてしまった。

「あれで大丈夫ですか」リチャードも話し合いが心配になってきた。「不思議な人…、それに会って何の事」リサもあきれた様子だった。しかし一瞬でも杉本達の事を、忘れる事が出来た。輝は共に来た兵士に、杉本搜索の状況を聞いてみた。

「まだ何も…」兵士の答えは、暗かった。

「そうですか、何かわかりましたら、すぐに知らせて下さい」そう言って、輝たちは与えられた部屋に向かって行った。

「……馬鹿者め、……と間違い……してこい」杉本は、小さな話し声で気が付いた。ゆっくり目を開けると、見なれない部屋の天井を見ていた。まだ頭がボーっとしていた。

「お気づきですね」聞きなれない声に、杉本は起き上がろうとした。しかし何かに固定され、起き上がることが出来なかった。徐々にはつきりしてくる頭を、杉本は激しく振りまわした。そして見なれない顔を見たときに、全てを理解した。

「ここはどこだ」杉本は、首だけを持ち上げ尋ねた。

「手荒な真似をして申し訳ない。仕方がなかったのです」見なれない顔、確かにアメリカ軍人と分かる男が答えた。

「彼女は、何処だ」

「彼女も無事です。安心してください」その軍人、しかも相当地位の高そうな男が答えた。

「今すぐ離せ、開放しろ、政府から話しは聞いていないのか」杉本は激しくもがいたが、身体を固定したベルトは、びくともしなかった。

「聞いていますよ。明日話し合いがあることも、会談が終わるまで手を出すなとも」男は杉本の周りを、歩き始めた。

「では、何故こんな事をするんだ」杉本は抵抗を止め、冷静に尋ねた。

「仮に話し合いが上手くいったとしましょう。我々は手を引き、本土に帰る、日本の国家は存続する。では、今まで必死に戦ってきた我々、軍人はどうなりますか。死んでいった者は無駄死になるのですか。政府の勝手気ままな政策に、軍人は振りまわされ、使い捨てにされる事に断固反対です。勝利は確実です。諸外国がなんと言おうが、手を引くべきではない」男は興奮を収めるため、一呼吸置いてから話しを続けた。

「だから、話し合いが決裂するよう、日本の重要人物を誘拐する事にしたのです」

「私は、重要人物ではない。私は……」男は杉本の言葉を遮った。

「知っています。部下が、馬鹿な部下が間違えましてね。長田夫婦と」杉本にもやつと筋道が見えてきた。と同時にアメリカ軍の間抜けさに、笑いがこみ上げてきた。

「人違いだと分かったら、早く解放したまえ」

「そうはいきません。長田夫婦と親しい貴方には、利用価値がある。協力すれば、後々まで面倒見ますよ。杉本さん」男はにやりと笑った。正直名前を言われた時には、杉本も驚いた。しかし協力する気など、微塵も沸いてこなかった。

「間違つて誘拐した上に、協力しろ、だと、ふざけるのにも程がある。それに私は彼とは、親しくなんかない。勘違いもはなはだしい」杉本さん、隠しても無駄ですよ。今では貴方がたの通信は、我々に丸聞こえです。協力したほうが身の為です」男は自信たっぷりだった。

「日本を裏切れと」

「どの道無くなる国です。洋子さんのためにも協力したほうがいいのでは」それまで、杉本の周りを歩き続けていたが、不意に立ち止まり覗きこんできた。

「貴様、洋子に指一本でも触れたら、地獄のそこまで追い詰めてやる」杉本は怒りに震えた。と同時に洋子の身を案じ、心の中で洋子に許しを願った。

「安心しなさい。彼女には指一本触れません。協力しますね」男は杉本の頭を撫ぜた。杉本は最後の返事をするまでに、長い時間を費やした。

「断る」穏やかな杉本の顔に、男は驚いた

「なんと、彼女が死んでも構わないと」

「洋子も判ってくれるはずだ」杉本の、意志も強かった。輝を裏切るなど、地球がひっくり返っても、杉本には出来なかった。

「仕方ありません」男の目には、落胆の色が滲んでいた。そして杉本の視界から消えていった。しばらくすると、白衣を着た数人の男が、視界の中に入ってきた。男達は無言で何か作業を続けていたが、やがて一本の注射器を手に、杉本に振りかえった。最後の時を知った杉本は、きつく目を瞑り心の中で祈った。

二

黒部からの連絡は、悲観的なものだった。輝はこれ以上の搜索は無駄だと思ったが、なかなか言い出せなかった。しかし、いつまでも黒部に搜索させる訳にもいかず、永田町に戻るように伝えた。

「申し訳ありません。力及ばず」黒部は、汗だくで戻ってきた。

「貴方のせいではありません、あれだけ近くにいて、気が付かなかったのは私です」しかし、姿が見つからないのは、生きている可能性も含んでいた。

「おそらく、何者かに誘拐されたと思います。だとすれば、生存の可能性も十分考えられます。諦めずに搜索します」黒部の言葉に輝は答えた。

「お願いします。ただし黒部さんには、全軍の指揮があります。それを忘れないで下さい」

「分かりました。優秀な部下に任せます。しかし、誘拐の理由はなんでしょう」黒部には、見当も付かなかった。輝も考えたが、一つの意見しか浮かんでこなかった。

「おそらく、アメリカ力でしょう。何故ならば、他国の介入は絶対に有り得ないからです」

「私にも、その考えしか浮かびません。問題はその理由です」

「計画的な事な確かです。見事な手際の良さと、手掛かりのない事には脱帽します。一流の仕事でしょう。だとすれば、特殊任務を遂行できる者、軍部関係しか考えられません」

黒部にも、その考えがあつたが、リチャードの手前口に出せなかつ

た。しかし今、輝からそう言われ、黒部も自信を持った。

「私の考えも一致します。私も軍人です。同じ立場から言わせてもらえば、何故ここまでやって、諦めるのか、今までの犠牲は何だったのかと、考えます。そして政府に知れずに邪魔をするでしょうね。話し合いの」そこまで言つて、黒部は気がついた。

「そうです。話し合いの邪魔をする為誘拐したのです」

「しかし、杉本は日本の政府とは、無関係ですが」輝にはまだ分かっていなかった。

「そう、無関係です。でも貴方は重要人物です。間違えたのですよ。あの時、それぞれ二組のカップルになっていましたね、誘拐するとき、あなた方夫婦と間違えたのです。どう考えても、それしか理由が浮かびません」黒部の仮説は輝を落ちこませた。自分の身代わりに、捕まつたと聞かされれば、誰でも気が重くなるだろう。無事に戻ればいいとしても、もし無事に戻らなければ……。輝はますます落ち込んでいった。しかし、今の輝には落ちこんでいる時間さえなかった。新政府の面々とも話し合い、一応の政策も聞いたが、とても任せられたものではなかった。具体的な政策に乏しく、いくつかある案件も、素人でさえ首を傾げる内容だった。急いで軌道修正する必要に迫られていた。その為にも本心では、杉本にいてほしかった。輝は底無し沼でもがく冒険家宜しく、半ば諦めかけていた。

「とにかく今は、話し合いの事を考えましょう。最後のチャンスです。成功させる事に神経を集中して下さい」黒部の言葉で、輝は現実を引き戻された。

「出来るだけやりましょう。黒部さんも協力お願いします」黒部は部下に、杉本搜索の指示をしてから、輝と共に新政府が待つ会議室に向かった。黒部も輝同様、露骨にウンザリ顔を浮かべた。しかし政府の面々は、そんな事など知る由もなかった。それほど、吉田を始めとする若手議員は、妙な自信に包まれていた。二人にはその自信が何処から来るのか、見当も付かず顔を見合わせた。

「これが日本の政府ですか」黒部は、周りに聞こえぬように輝に尋

ねた。

「残念ながらそうです」輝も最小限、声を殺した。

「ところで、立案はどなたが」輝は思いきって吉田に尋ねた。

「ここにいる全員で考え、総力を結集してまとめあげました。それが何か」吉田はムツとしたのか、わざと大げさに答えた。

「では、言いましょう」輝は一度話しを区切り、反論した。

「あなた方は、話し合いを決裂させる気ですか」

「何を言い出すのです。我々は真剣に考え…」吉田は突然の言葉にうろたえた。

「素人の私にでも、失敗は目に見えています」輝は更に語尾を強めた。

「素人に何がわかる」面々の一人が叫んだ。

「そうだそうだ、我々に任せろ」野次は国会のように広がっていった。

「素人が口を出すな」「引っ込め」

「これで上手く行くと言っていたぞ」

「政府を信用しろ」「そうだ、そうだ」面々は、水を得た魚の様に活き活きしていた。

「そうだ、我々を信用しろ」「そうだそうだ」しかし輝と黒部は、野次の言葉も聞き逃さなかった。やがて静かになった輝を見て、吉田が面々の野次を制止した。

「と言う事です。我々に任せて下さい。あなたは、黙ってついてくるだけで結構です」吉田は黙って聞いている輝を見て、満足そうに頷いた。

「分かりました。ただ一つ聞いてもいいですか」輝は至って冷静に尋ねた。「どうぞ」

「そちらの方、そう、赤いネクタイの人です。すいません名前を覚えられなくて」輝はわざと謙虚に尋ねた。

「私は、山口ですが」輝の急な名指しに驚いたが、山口は注目を浴びる事に喜んでいた。

「そうそう、山口さん、あなたに大事な質問です」輝は“重大な質問”を強調した。

「なんでも、どうぞ」山口は機嫌を良くした。

「上手く行くとは、誰が言っていましたか」

「ああ、アメリカの軍人だが……」そこまで言つて、山口は慌てて口を押さえた。沈黙の流れる中、政府の存在がガラガラと崩れていった。

「隠しても無駄です。全て話してください」輝は山口には目もくれず、吉田に詰よつた。そして吉田は観念したように渋々口を開いた。「あなた方から連絡があつたすぐあとです。ハリスという將軍から通信がありました。そして、話し合いを成功させなければ、こう言う風に話せと教えてくれました。私達は成功させたくて、話しに乗っただけです」吉田はとうとう涙を流し始めた。

「吉田さんは悪くありません。日本を思つてした事です。何処が行けないのです」山口は、自分のミスを取り返そうと、必死に輝に噛みついた。

「敵の罠だからです。そのハリスという將軍は会談を決裂させるつもりです」輝の言葉に、吉田も山口も、その他の面々も目を丸くした。

「信じられん。なぜ、アメリカはそんな事をするのですか」山口の驚きは半端ではなかつた。

「軍部が、日本との和解に反発しています。しかし、大っぴらには行動できません。そこで秘密裏に行動しているのです。話し合いを決裂させる事が、アメリカ軍部の目的です」

輝の説明でも、吉田は理解出来ずに苦しんだ。

「しかし、どうして判つたのですか」

「ここの来る途中、私の友人が、誘拐されました。誰にも知られず、私の目の前から忽然と姿を消しました。いまこのときにそんな芸当が出来るのは、軍の特殊部隊しかいません。いうなればアメリカ軍しかないです。おそらく私と間違われ、誘拐されたものと思われ

ます。狙いは話し合いの決裂です」輝は力なく答えた。そんな輝を見て、吉田たちもようやく全てを飲み込んだ。
「とにかく、時間がありません。早く再検討をお願いします」黒部の言葉で、政府は長い会議に突入していった。

三

エリザベスは、司令部でパッカーの到着を待ちかねていた。秘書の仕事として、街まで視察に出歩いたが、出掛けるたびにエリザベスの気持ちは沈んでいった。そして誰とも心置きなく話せずにいた時、父、パッカーの移動を聞いて彼女の心は弾んだ。偽りなく話せる喜びと、孤独から開放される嬉しさに、窓の外を見ながら、つい涙を流してしまった。

「おやおや、どうなさいました」不意に声をかけられ、エリザベスは慌てて涙を拭った。

「何でもありませんわ、司令官」涙を拭い、毅然と答えた。

「ジムでいいですよ。ホームシックにでもかかったかと思いました。それにしてもここは退屈でしょう、何もありませんから。世界でも有数の近代都市だった東京も、今ではこの有様、残念な事です」胸には色とりどりの勲章がいくつも付けられ、しっかりとクリーニングの施された制服に身を包み、関東地区司令官がエリザベスに歩み寄った。司令官も窓から外を見て、大きな溜息をついた。

「ありがとうジム、でも、あなた方軍人は、日本が滅ぶ事を願っていると思っていましたわ」

「実を申せば、日本贖戻でした。和食も好きだし、温泉も大好き、本当に残念です」ジムは箸を持つ振りをした。

「でも、温泉も、和食も無くなりませんわ」エリザベスは少なからず、ネイビーブルーの制服に丁度よく映える、白髪混じりのジムに好意を持った。

「そうですね、と言う結果になろうとも、文化と伝統は受け継が

ねばなりません。しかし、大きな声では言えませんが、どうにか立ち直って欲しいものです」

「軍人さんがあからさまに批判してもいいのかしら。一応私は政府の人間よ」エリザベスは、試すように横目でジムを覗った。

「しかし、私同様の考えを持っていると確信しています。違いますか」エリザベスは、じつと司令官を見つめた。期待と不安の入り混じった顔は、とても軍人には見えなかった。やがて、エリザベスは小さく笑みを浮かべた。

「私は平和を望むだけ。でも、この街並みだけは早く綺麗にして欲しいわ」エリザベスは再度窓から街に目をやった。それから一言付け加えた。

「軍人にしておくのは、もったいないわね」その言葉に、ジムは顔をほころばせた。そろそろ昼になる頃だった。一人の兵士が足早に近づいてきて、ジムに耳打ちした。

「やはり本当か、一刻も早く司令部に移動させるように」それからジムはエリザベスに向き直って、真剣な眼差しで話し始めた。

「日米会談要員が襲われました」エリザベスは言葉の意味を理解すると、慌てて尋ねた。

「パツ、パツカー議員は…」取り乱すエリザベスに、ジムは冷静に答えた。

「落ち着いてください。大丈夫です、皆さんご無事です」その答えに、エリザベスはその場に座り込んでしまったが、何度か首を振り、息を整えてから立ち上がった。

「いったい誰ですか。襲ったのは」エリザベスは怒りに震え出した。「犯人は分かっています」ジムの目にも怒りが見えていた。

「話してください」会議を邪魔しようとする人間に、彼女の怒りは頂点に達しそうだった。

「ここでは…、私の部屋でお話します」目に怒りを浮かばせながらも、ジムは冷静に答え、エリザベスを自分の部屋まで案内した。ジムの声をひそめて話した内容に、エリザベスは愕然とし自分の耳を

何度も疑った。

「そんな事があっていいの」勧められた椅子にも腰掛けず、窓辺に寄り添い尋ねた。

「過去にも同じようなことは、いくらでもありました」ジムは、自分の椅子の背もたれに寄りかかり、遠くを眺めて答えた。

「でも、なぜ襲撃の事が分かったの」エリザベスはゆっくりとデスクに近づき、新たな疑問を口にした。

「彼らの動きはずっと監視していました。勿論気づかれないようにですが。通信も傍受していたので、今回の計画はわかっていました。しかし本当に行動を起こすとは、私にも信じられませんでした。残念でなりません」ジムは冷静さを保ちながらも、さすがにショックを隠しきれなかった。その時、扉を叩く音が部屋に響いた。

「あと二十分ほどで到着します」兵士はそれだけを伝えると、規律正しく出ていった。

「無事に会議を終わらせる事が、今最も重要な事です。パッカー上院議員にも話しを伝えておいてください。では、準備がありますので」そう言つと、ジムは部屋を出ていった。

エリザベスもパッカー迎えるにあたり、なんと説明すればいいのか、考えれば考えるほど頭は混乱していった。その時、エリザベスはハッとした。

「リチャード達と、日本政府はこの事を知っているのかしら」と、重大な事に気が付いた。

「もしも知らずに、襲われたら…、会議を邪魔する為に攻撃されたら…」エリザベスは頭に浮かんだ最悪の考えに、冷水を浴びせられたように全身を振るわせた。そうかと言って永田町に移動した輝たち、連絡する事もままならなかった。

その頃、永田町の新政府は頭を悩ませていた。いくら現役の議員だとしても、日本の運命を決める会議で、主立って発言する度胸は誰一人として持ち合わせていなかった。議題の内容や政策などは、輝の助けもあってまともな物になっていたにも関わらず、日本の代

表とも言える、総理になりたがる者がだれひとりとしていなかった。

「アメリカ側も仮の政府と知っています。総理も臨時で結構ですから、早急に決めてください。誰でも構いません」輝は、そう言つて会議室をあとにした。はつきり言えば、その場所から早く離れたかった。それほどまでに呆れていた輝は、リサの元に帰りようやく落ち着きを取り戻した。そこに黒部が状況を伝えにきた。

「皇居までの道のりは、安全確保できました。今度は襲われる事も無いでしょう。それと、杉本さんの手掛かりは、依然としてつかめていません」黒部の言葉に溜息混じりに頷いてから、輝は周りを見まわし小声で尋ねた。

「ありがとうございます。杉本は、何処かで生きているような気がするのですが、とにかく、頼りない連中ですが、日本の政府には変わりありません。会議が終わるまで、守つてやってください」輝は苦笑いを浮かべた。

「わかりました。全力を尽くします」黒部は時計に目をやり、そして一言付け加えた。

「あと、二時間が勝負です」輝は、何も言わずに頷いた。

四

皇居には、既に会議出席者が集まっていた。そんな中、襲撃者の正体を知らされ、パッカー達は愕然としながらも怒りを感じていた。「なんという事だ。同胞までも襲撃するとは……」パッカーは、怒りに震え、言葉を無くした。

「情報によれば、日本の政府関係者を襲撃し、二人を拉致したらしいわ」

エリザベスの報告に、パッカーは驚愕した。

「まさか、彼じゃ……」パッカーの頭には、輝の姿が浮かんでいた。

「しかし、拉致された人間は、関係者ではなかったらしいの。既に

救出に向かったそうだけど」パツカーは、幾分落ち着きを取り戻した。

「それで、助け出せたのか」

「いいえ、まだ連絡は無いらしいの」パツカーは頷いた。

「彼らは知っているのかね」エリザベスは、小さく首を振った。

「分からないわ。知らせる術がないの」パツカーの懸念も、エリザベスと同じところにあった。

「でも誰だか知れないが、拉致された人間がいるなら、彼らにも気づくだろう。輝たちは馬鹿じゃない」

「今はもう、無事に出席してくる事を願うだけだわ」出席者達も、一様に不安の色を隠せなかった。

「政府の苦労を無駄にしゃがって。外国に知れてみる、それこそ不利な立場に陥るぞ。何を考えているのだ」パツカーは、怒りの爆発をどうにか抑えていた。そんな気持ちを察してか、誰一人として口を開く者はいなかった。押し殺した沈黙を破る様に、ジム司令官が作戦本部に現れた。

「遅くなり、申し訳ありません。出迎えにも行けずに……」

「そんな事はどうでもいい、状況はどうなのかね」国家安全対策室の男が尋ねた。ジムは一同を見渡してから、声を落として話し始めた。

「彼らの行動は、常に監視していますが、ここ日本においては、我々は絶対的に不利です。彼らのほとんどは、はじめから日本に駐在していた兵士です。今回の件でもいち早く行動に移ったのも彼らです。地理的にも、後続部隊の我々よりも熟知しています。それに彼らの同志はかなりの数に上っています。早急に応援を呼んでいただきたい。それと……」ジムはそこで言葉を詰まらせた。

「それとなんだね」男は更に詰め寄った。ジムは男に視線を向けたが、なかなか口を開かなかった。

「これ以上何を聞いても驚かんよ。話してくれ」パツカーは、ジムの気持ちを気遣い、静かに尋ねた。ジムはパツカーに頷くと、ゆっ

くりと話し始めた。

「先程、本国から連絡がありました。E U諸国が同盟を破棄してきました。アジア、アフリカ諸国からも、最後通達が届けられたそうです」

「やはり、知られたか……」パッカーの心配は、現実のものとなってしまった。着々と破滅へのシナリオが進行する中、希望は日本との和解だけとなってきた。

「それで、我が政府の対応は」

「まだ、具体的に攻撃を受けたわけではありません。しかしミサイル防衛システムは、レッドラインに移行しました」

「少しでも攻撃を受ければ、世界の破滅につながる訳だ」パッカーの言葉は重く、海の底まで沈む様だった。

「だったら一刻も早く、本国に戻った方がいいのでは」早口に話す議員の顔には、血の気が失せていた。

「それは無理だろう。諸外国は我々の完全撤退を望んでいる。彼らも共に撤退させる事が出来るかね。早急に日本と和解する事が先決だろう」パッカーにたしなめられ、議員は口を閉ざし目頭を押さえた。

「緊急通信です」その時、通信兵が叫んだ。

「本国からか」ジムの質問に、兵士は首を振り、幾つかのスイッチを作動させた。スクリーンに映し出された男の顔には、笑みさえこぼれていた。

「やあ、諸君、元気かね」戦闘服に身を包んでいるが、肩の星型徽章が光っていた

「ハリス少将、随分とご機嫌だな」ジムは、笑いも浮かべず尋ねた。「ジムか、実は嬉しい事があったのさ」男は平然と答えた。

「反乱軍の指揮官にとって、嬉しい事とはなんだね」ジムの言葉に、全員が驚きを隠せなかった。

「彼がそうなのか」パッカーは、小声でジムに尋ねた。

「最も勇敢で優秀な指揮官、そして私の戦友です」ジムも小声で答

えた。

「反乱軍とは聞き捨てならないな、ジム。ところであなたは」ハリスの顔から笑顔が消えていった。

「私は、パッカー上院議員、あとは日本との会議の出席者だ」パッカーは、怒りを抑え答えた。

「あなた方は、早く本国に戻られる事ですな。危険が及びますよ」ハリスの威圧的な言葉が流れてきた。

「ならば、君らも帰還したまえ。日本を離れる事を要求する」安全対策室の男が声を荒げた。

「お前は誰だ」

「私は、国家安全対策室のボビー・マクドエルだ」ボビーは、誇らしげに答えた。そんなボビーに、ハリスは怒りをあらわにした。

「おまえこそ、国に帰って防衛対策に力を注げ」

「ハリス少将、知っているのかね」パッカーは、同盟破棄のことを尋ねた。

「だから嬉しいのさ、我々の声明を聞き届けてくれた。大手を振って反撃出来るじゃないか。政府は我々を使い捨てにするつもりだが、そうはいかないぞ、もう見過ごす事は出来ない。死んでいった兵士の為にも、私は決意を固めた。反逆者と呼ばれるのも一時的なものだ。新年を迎えれば、私の正しさが証明されるだろう。原潜もステルスも我々は手に入れた。共に協力し、そしてアメリカの真の力を世界に見せつける時だ」ハリスの狂言的な言葉は、もはや軍人のもものではなかった。

「ハリス少将、馬鹿な考えは捨てたまえ。世界大戦にでもなればどうなるか、君にも想像できるだろう。世界は破滅するぞ、勿論アメリカも例外ではない。仮に生き延びても放射能にさらされ、死の恐怖と戦う事になる。死んでいった兵士は気の毒だが、彼らも決して望まないだろう」パッカーの言葉を、ハリスは笑い飛ばした。

「また責任を軍人に押し付けるのか？その武器を作ったのは、お前達政府の人間だろう。私は戦う事しか出来ない軍人だ、最悪でも口

シアとは刺し違えるつもりだ。奴らはそれだけのことをしたのだ、アメリカに牙を向いたのを、許すわけにはいかない」

「ハリス、今からでも遅くない、考え直してくれ」ジムは心から悲願したが、軽く交わされてしまった。

「無理だ、計画は順調に進んでいる。ジム、早くそこから離れろ、会談が始まれば、私の部下が攻撃を仕掛けるぞ。それから上院議員、大統領に伝えて欲しい、我々の意志を。そして早く帰国したまえ、以上だ」通信は一方的に切断された。

「原潜とステルスを、至急調べろ」パッカーの叫びに、ジムが答えた。

「確認は取っております。原潜には、六基の中距離弾道ミサイル、ステルスには、四基の核爆弾を装備しています。もしもこれをロシアに向けて発射したら、それこそ世界は終わりです」全員の顔に緊張の色が走った。

「仕方が無い、至急大統領に連絡だ」通信兵はパッカーに頷き、通信機に手を延ばした。

「それからエリザベス、日本の政府関係者はどこにいる」

「永田町に移動すると言っていたわ」

「司令官、急いでコンタクトを取ってくれ。ここで会議を開くわけにはいかない」

「我々はどうしますか」ボビーは、恐怖に顔を青ざめた。

「帰りたければ、帰国しても構わない。わしに一任したまえ」

「そうはいきません。私達も大統領から指名され、着任したのです。逃げるわけにはいきません」パッカーの言葉に、同席した議員が答えた。

「ならば力を貸して欲しい」

「団長はあなたです。どうぞ命令を」恐怖におののくボビーを傍らに、議員は毅然とした態度で答えた。

「ホワイトハウスが出ました」

「わしが話す」パッカーは、大統領にかいつまんで話した。報告を

受けた大統領は、辛い決断に迫られていた。

「年明け前になんとしても解決したまえ、既にミサイル目標は変更済みだ。それから、残念だが、軍の増援は送れない。本土防衛が最優先だ。だが最高の特殊部隊を送る。なんとしても、ハリス少将を止めて欲しい。しかしパッカー、絶対に無理をするな。私としても友人を失うのは辛い事だ」その決断は、多くのアメリカ兵士と、日本の消滅を意味していた。

「ありがとうございます。出来る限りの事はします」困惑した大統領の顔が、スクリーンから消えた。

「諸君あと二日だ。なんとしても解決したいが、今はここから退去する事が先決だ。司令官、何処か当てはないかね」ジムが考えこんだ時、一人の将校が走って来た。

「拉致された日本人を、救出しました。まもなくここに到着します」
「分かった。到着し次第ここに寄越してくれ。それと君は、司令部移動の準備をするよう、各部署に伝えてくれ。急げ」将校はジムに敬礼を返すと、走り去っていった。

「司令官、ハリスの部下はどの位いるのかね」パッカーの質問に、ジムは担当将校を呼び、答えさせた。

「一個師団はいると思われます」

「ハリスの部下全部だな」

「はい、全員熱狂的に支持しております」

「何処にいるかも分かっているな」

「はい、常に監視を付けています。行動は全てこちらに報告があります」

「では、ここを襲う部隊も確認済みという事か」パッカーの質問に、担当将校は、首をかしげた。

「はっ、ここが襲撃されるのですか。そんな部隊の報告は入っておりませんが」将校は眉を寄せ答えた。

「たいした監視だ。いや、相手の方が一枚上手といったとこだな」
半ば呆れた顔のパッカーの元に、先ほどの将校が現れた。

「拉致された日本人を、連れてきました」連れて来られた男を見て、
「おや、君は確か…」と、パツカーは目を細めた。

「杉本です、上院議員。助けて頂き心から感謝します」それまで、
何が起きるのか見当もつかずにいた杉本は、知った顔を見て、表情
を和らげた。

「輝の友人だったね。君だったのか」

「もう駄目と諦めた時に、助けて頂きました。そして彼女は私の婚
約者です。長田夫婦と間違えられたようでした」杉本に促され、洋
子も軽く会釈をしたが、まだ表情は硬かった。

「済まん、リサが迷惑をかけた」パツカーは、洋子にも頭を下げた。
「なぜ、あなたが謝るのですか」ジムには理由が解らなかった。

「実は…」パツカーの説明に、全員が驚きの表情を隠せなかった。

「では、日本の重要人物とは、義理のお孫さんですか」ボビーの顔
色も、少しずつ元に戻ってきた。

「好都合ですよ。早く和解すれば、ハリスに全神経を向けられます」
意外にもジムまでもが、事実喜んでいた。

「それでは、日本から手を引く事に賛成してくれるのか」

「今は、ハリスのほうが脅威です。それに日本の為に、世界を闘い
に巻き込むわけにはいきません。これで、諸外国の対応も変わって
くるでしょう。賛成します」パツカーが一同を見まわすと、全員が
一様に頷き、異を唱える者はいなかった。パツカーは満足そうに頷
いてから、頭を下げた。

「ありがとう、これで世界は救われる」

「大統領に連絡を」ボビーが通信兵に言ったが、パツカーが止めた。
「実は、ロシア参戦の時に、大統領は既に撤退を決めていた」その
発言にまたも全員が驚かされた。

「しかしアメリカの非を認めずに、撤退する理由を考えるうちに、
ズルズルと過ぎてしまったようだ。議会の承認もとらずに行動を起
こしたからだ。撤退にも相応の理由付けが必要だった」ジムの顔が
陰しく変わったのを、パツカーは見落とさなかった。

「ハリスの言う通り、軍人の死は無駄だったわけですね。捨て駒ですか」

「司令官……」パッカーは一瞬焦った。

「安心して下さい。祖国を裏切るつもりはありません。ただ、友人として、ハリスが不憫でたまらない。彼には分かっていたのですね」ジムの目に涙が光った。

「みんなにも分かってもらいたい。アメリカが今後にも有利な立場を貫く為にも、非難される訳にはいかなかったことを。そして大統領の苦悩を」全員が仕方なしに頷いたが、杉本が異を唱えた。

「たったそれだけの理由で、こんなにも多くの人命が奪われたのですか。日本を見てください。瓦礫の山と化した街を見てください。

命の重さを認識してください」そう言つて、杉本は悔し涙を流し続けた。しかし、誰も杉本を責めるものはいなかった。そして、全員が心の中で賛同していた。

「移動準備、整いました」異様な雰囲気包まれ、連絡将校はたじろいだ。

「よし、いつでも出発出来るように、待機してくれ」ジムは涙を拭き、命令を下した。

最後の危機

—

杉本の案内で、全員永田町に移動を開始した。暗いトンネル内も兵士たちの持つライトで、遠くまで明るく照らされていた。幸いにも、ハリスの部隊と遭遇する事もなく、一個中隊の護衛と共に永田町のホーム手前までたどり着いた。そのホームにも、ロシアとの戦いで死んだのか、多くの兵士の遺骸がきちんと並べられていた。エリザベスは固く目を瞑った。パッカーは胸の前で十字を切り、杉本に尋ねた。

「アメリカの兵士の仕業かね？」杉本は小さく首を振った。

「ロシア兵だと思います。我々がいた所でも、かなりの被害が出ました」杉本は手を合わせ俯いた。さらに、そこまで先導していた杉本は、自分が先に行き事情を説明すると伝え、洋子と共にトンネルの奥に向かい歩きはじめた。十分ほど歩いた時に、杉本達の前に二人の兵士が現れた。杉本が自分の名を明かすと、兵士達に笑顔が戻った。

「心配していました。皆さん待つて居られます。こちらです」そう言つて兵士は杉本達を案内した。白金高輪駅同様、線路から細く伸びた通路の奥に、鉄の扉が現れた。兵士の一人が同じ様に不規則に叩くと、扉は軋みを上げながらゆっくりと開いた。床には傷ついた多くの兵士が横たわり、手当てを受けていたが、苦しみに顔を歪めていた。

「先生」杉本の元気な姿を見ると、輝は自分の目を疑いそうになった。

「杉本君」二人の無事に輝やリサ、そこにいた全員が、抱き合い再会を祝った。しかし悠長に構えてもいられなかった。

「お話があります」杉本は再会の感動を押し静め、皆に話し始めた。話しを聞き終え、素早く黒部が対処にあたった。

「すぐに出迎えろ」黒部の命令で、数人の兵士が慌しく動き始めた。「一緒に行つてくれますか」杉本は黒部に頷いた。そして無事に到着したパッカー達一行も、輝と新内閣の手厚い歓迎を受けた。

「リサ、元気そうで安心したよ」パッカーに抱きしめられ、リサは何度も頷いた。エリザベスもリチャードの無事に涙を流していた。そして形だけだが、和平会談が開かれた。そしてアメリカ側は、全面的に日本の提案に賛同し、無事会議は終了した。

「それで、これからどうするつもりですか」輝の発言で、会談はそのまま作戦会議へと変わっていった。

「是非とも協力を願いたい。まず世界に和平会談が無事終了したことを知らせたい。それと一刻も早くハリス少将を捕まえ、反乱を阻止しないと大変なことになってしまいます」ジムの言葉に黒部が尋

ねた。

「と言うと」

「ハリスは、この機に乗じてロシアに攻撃を行うつもりです。原潜とステルスを手に入れています。我々が彼らを阻止できなければ、アメリカは日本にいるハリスの抹殺に乗り出すでしょう。アメリカのミサイルは、ここにも向けられています。猶予は有りません。決断してください」ジムの説明には、選択の余地がなかった。日本が生き延びる為には、今度はアメリカに協力するしか道が残されていないかった。

「まずは、敵の位置と兵力を説明してください」ジムは地図を広げ、黒部に細かく教えた。それから、作戦の綿密な打ち合わせが長い事続いたが、やがて輝達は席を外した。

「確かに、闘うのも一つの策ですが、ハリスとも平和的な解決が出来ないでしょうか。これ以上の犠牲はもう沢山です」軍の関係者以外は、ほとんどがこの別室に集まっていた。そして杉本が口を開いたが、日本の政府もアメリカの議員も、頭を抱えるだけだった。しばらくして、輝が口を開いた。リサはパツカーに寄り添い、うとうとし始めていた。エリザベスもリチャードにぴったりと寄り添っていた。この一瞬の幸せを、輝は永く浸っていたかった。

「ハリス少将の事を、詳しく話してくれますか。彼にも弱みや、悩みがあるはずです」

「私の知る限り、あれほど優秀な軍人はいない。しかし今の彼は、狂人的になってしまった。頑固さでも軍人内でトップに入る。説得は無理だと思うが」年老いたアメリカの議員が、静かに話した。

「あなたは」

「スミスと言います。私も昔軍隊にいました。勿論職業軍人でしたが、まだ私が若い頃、彼は私の部下だった事があります。私はしっかり覚えていますが、任務に忠実でどんな困難にも立ち向かう勇気と、行動力を兼ね備えていました。同時に、今までに数多くの部下を失ったのも事実です。軍人は時として、捨て駒にされてきました。

信頼されていた部下の死は、彼に長い年月の間、苦しみを与えていたのかも知れません。元軍人として彼の気持ちは、よく分かります。残念です」

「まずは、ステルスと原潜を奪い取らなければなりません」ボビーが話しを続けようとした時、一人の将校と数人の軍人が入ってきた。「私達にお任せを」男は一同に敬礼すると、自己紹介を始めた。

「アメリカ合衆国海軍特殊部隊、“シーキャット”のマーク少佐です。先ほどに日本に到着しました。大統領命令で反乱軍の鎮圧と、核兵器の奪還に来ました」見るからに屈強そうな男たちは、自身に満ち溢れていた。「頼もしい助っ人が着ましたね」杉本が喜んだ。そして男たちに次々と握手を求めた。輝もマーク少佐に握手を求め、皆と挨拶の済んだ少佐を隣室の作戦会議場に案内した。ジム司令官と黒部もマーク少佐と硬い握手を交わした。

「よく来てくれた。だがのんびりもしてられない、時間が限られている。すぐにも状況説明を始めてもいいかね」マークとマークの副官はそのまま作戦会議に加わった。輝も会議室から出づらく席を共にした。

「では、ハリス少将の戦力は大体把握しているわけですね？あとは原潜とステルスの場所ですね？」マークは改めて聞きなおした。

「そこが問題です。簡単には発見できないでしょう」そう言いながらジムは副官の大尉を見たが、副官は首を振るだけだった。

「でも燃料はいれるでしょう？」輝は何気なく尋ねた。

「もちろん燃料がなければ、どんなに高性能の爆撃機でも飛べません。正規軍に紛れて給油するつもりか、空中給油しかありません」ジムの答えにマークが付け加えた。

「空中給油は無理です。盗まれたステルスのアクセスコードは無効にしています。地上の基地での給油しか出来ないはずですよ」

「では地上の給油ポイントを割り出して、待ち構えることは可能でしょうか？」輝はマークに尋ねた。

「今までの飛行距離などから、ある程度の割り出しは可能です。た

だ複数の給油ポイントを見張るには、人手が足りません。人員の増援にも時間が掛かります一つのポイントに絞り込むのは可能ですが、それにもかなりの時間を要します」

「そこまでの時間はありません。我々にも手伝わせてください。飛んでいるステルスには敵いませんが、地上で給油中なら我々でも奪還できるでしょう」輝は黒部に視線を向けた。

「任せてください」黒部の答えも自信に溢れていた。

「考えられる給油ポイントは、厚木、横須賀、横田、この三箇所と見て良いでしょう。横須賀が一番の候補地です。数機のステルスが配備されているので、紛れるには丁度良いかと思います。しかも、横須賀はハリスの配属先でした。今も部下が居ると見て間違いないでしょう。我々は横須賀に向かいます。厚木と横田のほうにも私から連絡を入れますが、万一に備えて人員を配備したほうが良いと思います。日本に任せても良いですか？」マーク少佐は黒部に尋ねた。「厚木には我々が向かいます。横田へは別の部隊を向かわせます」そう言つて黒部は、副官に向き直った。

「立川なら、新宿方面の部隊が近いだろう。至急連絡してくれ」黒部の副官は急いで通信兵に連絡をさせた。

「我々もすぐにここを立ちます」マークの副官も急いで部屋をあとにした。続いて原潜の奪還の作戦について話しを始めた。

「原潜奪還のために、グアムから最新の潜水艦がこちらに向かっています。すでに別の部隊が乗り込み、こちらの連絡を待っています」マークとは部隊は違うが、信頼できる指揮官だと皆に説明した。

「そちらも相手の位置が問題なわけですね？」黒部が尋ねた。

「原潜の航行距離はかなりのものです。しかし、原潜はハワイ基地から奪われ、すでにかかなりの時間と距離を航行しています。しかし港に入ることはしないでしょ。海上補給するはずですよ」そのとき、モニター盤のところで作業をしていたマークの部下が、合図を送った。

「皆さん、こちらへ」促されるままモニター盤に近づくと、モニタ

ーが点滅を始め、日本の地図が映し出された。

「これは？」輝が尋ねると、マークの通信兵が代わりに答え始めた。「アメリカから送られている衛星映像です」通信兵は、マークに頷くと、盤を離れていった。マークはしばらくモニターを見てから振り返り、皆に説明を始めた。

「これは、スパイ衛星の映像です。試作の段階ですが、ズームしてみましようか？」そう言つてマークがつまみを回すと、映像がどんどん拡大され、東京湾に停泊中の戦艦までがはっきりと映し出された。

「これで原潜を見つけます」輝は説明を聞いて戸惑った。

「海中に潜む原潜を探せますか？」マークは自信に満ちた笑みを浮かべ、「これから最新の技術です」と付け加えた。

「原潜の原子炉はかなりの熱量を発します。それが航行の軌跡となつて現れます。これを見てください」マークが指差した九十九里沖の座標には、オレンジの帯が映し出されていた。

「これは、アメリカの原潜です。原潜によってこの帯が変化します。奪われた原潜のデータを元に、日本近海をくまなく調べます」スパイ衛星で人物の顔まで判断できると知っていたが、海中にまでその威力を発揮するとは、アメリカの技術は日本より二歩も三歩も先を進んでいることに、輝たち日本の面々は肝をつぶした。と同時に希望も湧いてきた。

「残るは、ハリスだけです。一つ困った事が起きました。捜査の結果、彼は、別の核弾頭を手に入れて、持ち運んでいます。おそらく非常時の自爆用だと思います。しかし、日本国内で爆発したら…、」マークの言いたいことは、そこにいた全員に速やかに伝わった。

「非常時はまだ先です。国内で爆破されても、被害は日本だけで済みます。今はステルスと原潜の奪還が優先です。大戦だけは阻止しなければなりません」輝は力強く頷いた。黒部もまた力強く頷き返した。

「原潜の発見は通信兵の彼に任せて、我々は厚木に向かいましょう」

輝の言葉に黒部は驚き、聞き返した。

「一緒に行くのですか？」

「見張るにしても、一人でも多いほうが良いでしょう。戦闘機に乗るわけではありません。無茶はしません、安心してください」黒部は渋々だが了解せざるを得なかった。そこに新宿からの通信が送られてきた。

「私の所には、二十人程しかいませんが大丈夫でしょうか？」その声は恐怖に脅えきっていた。

「駐在しているアメリカ兵と協力してください。もし現れても、指示どおり給油してください。給油中ならば、攻撃を受けることはないでしょう」黒部の答えに幾らか安心したのか、すぐに出動すると、の答えが返ってきた。

「我々も出発しましょう」輝が立ち上がると、マークも立ち上がり、「私も同行します。横須賀には私の副官と部下がもう向かっています。原潜の発見には一人で十分でしょう」と伝えた。心強い同行者を迎え、輝たちの指揮は盛り上がった。

「首都高から東名に入れば、二時間とかからないでしょう。急ぎましょう」輝がそう言うのと、

「我々の車を使ってくれ。こちらに回すよう手配する」とジム司令官が言った。ほどなく皇居から永田町の地下鉄口にジープが五台配送されてきた。黒部の部下で元気な者と、ジムの部下、輝とマーク、そして絶対付いていくと聞かなかった杉本で、総勢二十五名の奪還チームが結成された。町には、和平会談が無事終了したことを知ってか、少しずつ人々が姿を見せ始めていた。空を仰いで伸びをする者、抱き合いながら喜び合う者、感情昂ぶり泣き出す者、しかしハリスの恐怖は終わっていない。人々には、そのことを知らされてはいなかった。

「アクセス拒否、空中給油できません」ハリスの通信機にステルス爆撃機から緊急通信が送られてきた。

「やはりな、問題ない。厚木基地に向かえ。私の部下が待機している」

ハリスは冷静に答えた。

「ラジャー」通信はそこで終わった。ハリスの副官バクスター中佐は、ハリスを見て尋ねた。

「なぜ、横須賀に呼ばないのですか」バクスターは体格も良く、年も上だったが、G・Iカットのせいか見た目にはハリスより若く見えた。ハリスを長い間補佐してきて、熱狂的に支持してきた。今回の事も、ハリスから話を聞いた際に、率先して部隊をまとめてきた。「アクセスコードを変えたのは、ステルスを奪還すべく地上給油させるためだ。そうなれば給油のため、私の基地だった横須賀に必ず現れると、奴等は考えるだろう。そして待ち伏せするはずだ。ところが幸い厚木にも部下が潜伏している。まさか厚木とは奴等も思っまい」ハリスは自信に満ちた笑いを浮かべた。

首都高速も東名も車は一台もいなかった。厚木で東名を降りたとき、本部から無線連絡が送られてきた。マーク少佐は報告に心躍らせた。

「原潜を発見しました。やはり日本近海に潜んでいました。あとは海上補給の時を待つだけです」輝は知らせには喜んだが、目は町に釘付けだった。やはりこの町もかなりの被害を受け、二四六号線にも瓦礫が散乱していた。基地のゲートにはアメリカ兵がジープで待機していた。輝たちが基地内に入ると、司令部まで先導してくれた。基地内は閑散としていた。普段はアメリカ兵で埋め尽くされた基地も、今はまだ集結しておらず、静寂が覆っていた。

「司令官のアダムスです」カーキ色の軍服を着込んだ、金髪のまだ若そうな青年が手を差し伸べた。

「海軍特殊部隊のマーク少佐です」マークはアダムスに敬礼をした。た。

「基地はこんな状態です。人員が足りません」アダムスは何故か敬語を使っていた。階級はマークの方が低かった。

「問題ありません。ステルスから連絡があったら、着陸を許可してください。給油中に奪還するつもりです」アダムスはマークに頷いてから、輝たちに目を向けた。

「そちらの日本人たちは？」

「私の部下たちは、横須賀に向かいました。おそらく横須賀に現れると思つての作戦です。しかし、ここと横田も十分に考えられる基地です。そこで日本の軍にも助けを求めました。彼らがそうです」マークの説明に納得したようだったが、その目には、軍服も着ていない輝たちが、奇妙に映つたようだった。

「私も臨時の司令官ですが、出来うる限りの協力をさせてもらいます」アダムスはそう言つて、司令部内を案内してくれ、食事を振舞つてくれた。

「来ました。着陸許可を待っています」輝たちが食事を終えようとする頃、連絡将校が食堂に現れた。

「着陸を許可してください。すぐ行きます」マークは立ち上がり、一同を見回し放し始めた。

「皆さん先ほど話したように行動してください。ただし決して無理はなさらないようお願いします」

「読みは当たっていましたね」黒部が言った。しかし

「私の読みは横須賀でした」とマークは小さく首を振つた。

「着陸を許可する。二番滑走路に進ませよ」管制塔では既に、ステルスとの交信中だった。マークは言われた方向を、双眼鏡で覗いた。一機の航空機が徐々に高度を下げて、滑走路に近づきつつあった。

「正規の部隊名を名乗っています。本当に反乱部隊ですか？」隣でアダムスがマークに尋ねた。しかしマークは双眼鏡から目を離さず、ただゆっくりと頷いた。アダムスはそんなマークを横目で伺い、後ろの兵士に頷いた。兵士はライフルの銃床でマークの頭を殴りつけた。不意に後頭部を強打され、マークはその場に倒れ込み意識を失

った。

輝と黒部、それに二人の兵士は給油車の陰に隠れ、ステルスの着陸をじっと待っていた。杉本とほかの兵士も、滑走路を囲むように身を潜め待機していた。ステルスは問題なくスムーズに着陸をし、輝たちが潜む滑走路の端までゆっくりと移動してきた。給油車のドライバーは輝たちを隠したまま、ゆっくりとステルスに近づいていた。ドライバーは給油車をステルスに横付けにし、車から飛び降りた。コックピットに手を振ってから、ホースを引き出し、梯子を持って近づいた。その間輝たちは、マークからの無線を待っていたが、無線機からは何の通信も送られてこなかった。給油は順調に始められた。このままでは、完了と同時に逃げられてしまう。黒部はいち早く判断を下し、ステルス奪取の行動に移った。

「皆さんは隠れていてください。我々兵士が行動します」と言って無線で待機中の兵士と連絡を取り合った。輝は黒部に言われたように、給油車の陰に隠れていたが、十人ほどの武装した兵士が近づくのを確認し、胸を撫で下ろした。アダムスの部下も身を隠すようにステルスを囲み始めた。マークもどこかにいるだろうと、十人ほどの兵士を凝視したが、輝には判別できなかった。その時、杉本から無線が送られてきた。

「先生、なんか不自然です」杉本も元の場所に待機して、成り行きを見守っていた。輝も基地に入ってからずっと、理解できない不自然さを感じていた。しかし、それが何なのか分からなかった。

「何が不自然なのかい」

「あの兵士達です。仲間の兵を囲んでいる様に見えます」輝は無線機を耳に当てたまま、十人ほどの兵士をじっと見据えた。確かにそう見えなくてもないが、杉本の考えすぎだろう、と輝は思った。しかし一人の兵士がライフルを構え、ゆっくりと黒部に狙いを付ける所だった。

「黒部さん危ない」輝は車の陰から飛び出し、大声で怒鳴った。十人ほどの兵士が一斉に振る向き、輝に銃弾を浴びせてきた。間一髪、

輝は車の陰に身を潜めたが、銃弾は容赦なく給油車に降り注いだ。黒部は一瞬で状況を把握し、給油車めがけて発砲する兵士たちに撃ち返した。給油車のドライバーは、給油ホースを接続したままで梯子から転げ落ち、あわてて逃げ出した。激しい銃撃戦で、敵の兵士が一人また一人と地面に倒れるなか、とうとう給油車から炎が噴出した。輝は這いつくばってどこにかその場を離れた。次の瞬間、給油車は爆音と共に爆発した。ステルスはエンジン音を上げて、滑走路に向きを変えようと動き出した。黒部たち兵士は慌ててステルスを追いかけはじめた。

「戻って」不意に杉本の声があたりに響いた。みなが一瞬足を止めた時、給油ホースを伝った炎がステルスを粉微塵に吹き飛ばした。幸い核弾頭は爆発せず黒部の足元に転がってきた。杉本の汗が額から弾頭に滴り落ちた。消火隊の車両が消化液をまく中、輝たちは黒部の元に集まってきた。仲間の兵士も二人が帰らぬ人となった。

「奪還は出来ませんでした。脅威は取り払われました」黒部は言った。

「心配の一つはなくなりましたね」杉本は今の銃撃戦に興奮していた。

「今の奴等は？」輝は黒部に尋ねた。

「おそらくハリスの部下でしょう。ここの基地にも紛れていたのですね」「マーク少佐は？」尚も輝は尋ねた。

「心配です。連絡がなかったところを見ると、捕らえられたか、あるいは……」「黒部はその先を語らなかつた。

「弾頭はアメリカ兵に頼んで、管制塔に行きましょう」輝の提案は素直に受け入れられた。しかし管制塔には誰一人見当たらなかつた。司令官室も、もぬけの殻で、前任の司令官だろうか、中佐の階級章をつけた遺体がロッカーから発見された。幸いなことにマークは手足を縛られ、気を失った状態で食料倉庫から発見された。作戦本部で待機中のジムは、吉報に喜んだ。

「ステルスの脅威はなくなりました」ジムの報告に歓声が沸きあが

った。「奪還は出来ませんでした、核弾頭は奪還できました」

「ステルスはまだ敵の手に？」パッカーが尋ねた。

「機は爆破されました。損害は二名です」

「輝たちは無事かね？」ジムはパッカーの問いに、にこりと頷いた。
「残るは原潜だが、状況はどうかね？」

「追尾していますが、いまだ浮上の気配はありません」ジムの答えにパッカーには、一つの懸念が生まれた。

「ステルスを失った事が知れば、非常時は早まる可能性がある。原潜も注意深くなるし、下手をすれば発射しかねないではないか。本当に確保できるのかね」

「最悪の場合、迎撃ミサイルに頼るしかありませんが、発射前に必ずや奪還して見せます」ジムの力強い言葉に、パッカーは頷いた。

「そうだな“シーキヤット”とわが国の防衛システムを信じよう」
その時、突然一人の兵士が現れた。

「ハリス少将から、通信が送られてきました」焦る兵士を見て、ジム達は急いで、会議室に戻っていった。

「ジム、どう言う事だ」ハリスは怒りをあらわにしていた。

「ステルスを襲うとは、馬鹿な事をしたな。原潜がいる事を忘れた訳ではあるまい。スイッチ一つで何処でも攻撃出来ることを忘れたか」ハリスの声は、次第に大きくなってきた。

「ハリス、良く考えろ。アメリカ政府は協力しないぞ。無駄死にするだけだ。思い留まってくれ」ジムは、出来る限り冷静に答えた。

「協力しなくても、私が一発撃ちこめば、いやでも戦争は始まるだろう。そうなれば、必然的に君たちにも出動命令が下るはずだ。ならば早々に君たちだけでも我々に協力し、先手を打つほうが理想的だと思わないか？よく考えたまえ」スクリーンのハリスは、にやりと笑った。

「アメリカ政府は、既にロシアと話し合いに入っている。君等の事もロシアに報告済みだ。仮に一発撃ち込んだとしても戦争にはならない」ジムはそれでも冷静だった。

「ほーっ、自国の恥をさらしたわけだ。しかし、本当にロシアは反撃しないと思うかね。もし一発で無理なら全部撃ち込んでやる。それにこの前はどうか、奴らに先手をとられて戦線布告され、攻撃してきたのを忘れたのか。戦争を始めたがつているのは、ロシアのほうではないのかね。そんな奴らを信じるとは、アメリカ政府も大馬鹿ぞろいだ」

ハリスの顔は笑っていたが、目だけは怒りに燃えていた。

「ちよっといいかね」突然スクリーンの前に、パツカーが歩み出た。

「これは上院議員、お元気ですかね？」

「日本とアメリカとは、既に和解した。きみも和解してほしい。これ以上の争いは、無意味なのは分かるだろ」パツカーは平静を保った。

「無意味だと、死んでいった兵士も無意味だと言うのか」ハリスの口調は徐々に荒くなってきた。

「これ以上の争い、と言ったはずだ。これまで犠牲になった兵士は、立派に勤めを果たし、英雄として死んだのではないかね」

「そうだ、皆立派だった。しかしアメリカ政府は、それを理解しようとしな。そして我々を見捨てたのだ。今回だけではない、今まで何度見捨てられたか、議員に分かるか？死んだ兵士の無念を、残された家族の思いを、これが許せる事かね」

「では、この先犠牲になる兵士は、立派な勤めといえるかね。祖国に反抗し、反逆者として死んでいくのを、皆が望むかね。残された家族にしても、一生反逆者の身内として、肩身の狭い思いをするだろう。それが君を信じて、ついてきた兵士の結末だろう」先ほどまでの冷静さとうって変わり、パツカーは思いきり熱弁を振るった。しかし、ハリスは何も言わずに、じっとパツカーを見つめるだけだった。

「ハリス少将、犠牲になった兵士の家族には、出来る限りの事はする。大統領に代わり、私が責任を持って約束する。どうか考え直してくれ」パツカーの再三の言葉にも、ハリスは答えなかった。沈黙

が流れる中、ハリスがようやく口を開いた。

「かつてアメリカが世界の指導者だったように、もう一度世界の頂点に君臨すれば、皆私が正しいと分かってくれるさ」しかしその声は小さく、自信を失った子供のようなだった。そして

「また連絡する」と一言残し、ハリスからの通信は途絶えた。

その頃原潜ベガスは、三浦沖を水深三百メートルで航行中だった。

「艦長、そろそろ補給を行わないと、航行不能になります」

「うむ、ソナー反応は」年配の艦長は、監視要員に尋ねた。

「ソナー異常なし」若い男は、きびきびと答えた。

「よし、ハリス少将に連絡。補給場所を指示してもらい、物資と安全確保の依頼をしろ」暗い艦内が、にわかに活気付いた。しかし、艦内の誰一人として、すぐ後ろに貼りついた潜水艦に気が付いていなかった。原潜ベガスを追いかけていたのは、最新鋭の原潜“バハマ”だった。ベガスより一回り大きく速度も優っていたが、ソナーにも反応せずスクリーンの音さえ発しない、まさに原潜のステルス版だった。

一方バハマの艦内ではベガスの行動を、逐一監視していた。

「ベガスの通信を傍受しました」大きなヘッドホンを付けた、頑丈そうな兵士が声を出した。

「内容は」まだ若そうな艦長は、その兵士に尋ねた。

「燃料、食糧ともに不足、補給願う。以上です」

「補給場所が判明したら、シーキャットに連絡」艦長は、やや興奮気味に兵士に命令を出した。

「どうですか」シーキャットの小隊長が、司令室に顔を出した。

「やあ大尉、ベガスはどうやら補給に向かうようだ」その時、ヘッドホンを外して、兵士が小さく叫んだ。

「艦長、横須賀沖で海上補給するようです」

「またと無いチャンスですね」マークよりいくらか若い男が言った。「頼むぞ、頑張ってきて来い」艦長の励ましに、大尉はしっかりと頷いた。

輝たちは厚木をあとにし、本部への帰路についていた。二名の犠牲を払ったとはいえ、無事核弾頭を取り返した安堵感と、心地よい車の振動を受け、輝と杉本は深い眠りに落ちていった。その頃ハリスは、椅子の背もたれに寄りかかり、ただじっと宙を見つめていた。「ハリス少将」ハリスの副官、バクスター中佐が部屋を訪れた。

「なんだ」ハリスは、素っ気無く答えた。

「補給船からの連絡で、ベガスと無事ランデブーしたとの事です」「周囲に注意するよう伝える。奴らは必ず原潜も奪回しに来るはずだ」しかし、その声には、以前のような力強さは見られなかった。

「將軍、早いところロシアに撃ち込んだほうがいいのでは、奪還されたら切り札を失う事になります」ハリスは、バクスターの目をじっと見つめ、しづかおわた。

「政府は、我々の要求に屈しない。それでも君は戦うかね」

「今更何を言います。私は最後まで諦めません。我々が一発撃ちこめば、必ずロシアは、アメリカに攻撃するはずです」バクスターは、自信を持って答えた。そんなバクスターに、ハリスは上目使いで尋ねた。

「本土には、君の家族もいるのだろう。戦場となっても構わんのか。祖国が無くなってもいいのかね」

「祖国は滅びません。確かにある程度のダメージは受けるでしょう。しかし、その前にロシアを完全に滅ばせばいいのです。アメリカにはその力があり、必ず勝利をつかむでしょう。そして世界に君臨するのです」バクスターの答えに、ハリスはゆっくりと頷いた。

「分かった、下がってよろしい」

「將軍、攻撃許可を」バクスターは、身を乗り出した。

「時期は私が指示する。但し、いつでも発射出来るよう準備をさせる」

「分かりました。伝えます」バクスターは意気揚揚と出ていった。バクスターが出ていくと、ハリスは椅子に寄りかかり、宙を見つめた。そして、パッカー上院議員の言葉と、自信たっぷりなバクスターの言葉を、頭の中で並べ始め、比較しながら闘わせた。

本部に戻った輝達は、軍事行動は専門家に任せ、政治的な議題を話し合った。

「とにかく、日本とアメリカが和解した事を、世界に知らせなくてはなりません。アメリカと同盟破棄した国でも、日本との同盟は続いています。日本に攻撃する事は無いでしょう」輝の言葉に、パッカーが付け足した。

「それならば本土の人間より、わし等のほうが安全という事になるか」

「確かに、ミサイルの脅威は無いでしょう。しかしロシアみたいに、介入する恐れは残っています」輝は、密かに潜入し、命を失ったロシア兵を思い出した。

「我々の通信衛星を使ってくれ、そして全世界に伝えるのが、君達、新たな日本政府の最初の役目だ」吉田は、パッカーの好意に素直に甘えた。

「分かりました。使わせていただきます」そして、重要な役目に身を引き締めた。

「急いでください」輝の言葉に、吉田は頷いた。

「それではお借りします。皆さん行きましょう」吉田に促され、政府の面々は別室をあとにした。

「日本とまで同盟破棄する国は無いですよ」杉本が小声で尋ねた。「それは無いだろう。EU諸国が破棄したのも、おそらく日本の援護策と思われる。我々が和解したと知れば、アメリカと事を起こす事も無く、再度同盟を結ぶのではないかな」輝の話しも、杉本の不安を拭い去る事は出来なかった。

「だいいいです」

「しかし問題は残るぞ」二人の会話が聞こえ、パツカーが口を挟んだ。

「何ですか」輝は尋ねた。

「アメリカが、はい、そうですねかと素直に再同盟を結ぶかだ。議員連中の中には、今度の同盟破棄について、重く考えている者も少ない。ハリスの一件が、無事解決した後が問題だ。強硬派がどう出るかだな」そう言つて、パツカーは同席者を見渡した。

「私達はそんなことを考えていません。勿論平和を望みます」ボビーは慌てて答えた。

「そうだろうとも、君らは実際に危険な体験をしたが、本土の連中には分からね。遠くで見ているならば、実感もわいてこないだろう。今までもそうだった。アフガンにしてもイラクにしてもテーブルの上で駒を動かすだけだった。前線の兵など一つの駒のそのまた一部に過ぎん。だからハリス達、前線の兵の命の重さなど、考えもせず平然と見捨てる事が出来たのだ。わしとて実際に目にしなかったら、この日本の変貌振りを見なければ、おそらく気が付かなかったに違いない」

「では、どうしろと」ボビーは尋ねた。

「それが、これからのわし等の仕事だ。議員の多くは戦争の恐ろしささえも知らん。だから、いかに戦争が愚かか、無意味な行動かを本土の連中に知らさなければならん」パツカーの説明に、一同は頷いた。

「では、我々は至急本国に戻ります。いいですね」ボビーの目には、力強さが感じられた。

「君達の肩にかかっている。頼んだぞ。わしは大統領の意志を受け、日本に留まるつもりだが、君らの成功を心から祈っている」パツカーとボビーは、硬く握手を交わした。

「任せて下さい」そしてボビー達は、輝達とも握手を交わし、お互いの健闘を誓い合った。

「さてと、身内だけになったな」パツカーは笑みを浮かべた。

「義父さん、何を呑気に」リチャードは慌てて嗜めた。

「少しくらいはいいですよ。専門家に任せましょう」輝の顔にも、笑顔が浮かんだ。

「あのー、私は居てもいいのでしょうか」杉本が困惑したように言った。

「何を言っていますか、あなたは身内と同じですよ」リチャードは、杉本の不安そうな顔を見て、つい笑ってしまった。

「時間は短かったが、内容は何十年分にもあたりますよ」

「ありがとう、リチャード」杉本は大いに歓喜した。

「さてと、様子を見に行く前に、可愛い孫と娘に会ってくるか」パツカーはそう言って別室を出ていった。

「こんな時に……」リチャードの呟きに、輝がなだめた。

「大任を果たしてきました。少しは許してあげて下さい」

「そうですね。大統領との話し合いにしても、再度日本に来た事も、大変だったに違いないでしょう。許しましょう」リチャードは納得した。

「そう言うリチャードだって、奥さんと離れ、日本のために頑張ってくれました」輝は、リチャードに頭を下げた。

「ありがとう、輝。それでは、私も妻に会って来ていいですか」

「遠慮なせずにどうぞ。この先まだまだ忙しくなるはずです。杉本君も洋子さんと会ってらっしゃい」リチャードと杉本は、輝に頷き、別室をあとにした。輝も、本音はリサに会いたかったが、パツカーの邪魔をしたくなかったし、それよりも、頭の中はハリスの事に占領されていた。そして、平和解決の糸口を見つけ出そうと、必死に考えた。

三

その頃、原潜ベガスは、特殊部隊シーキャットの手により奪還されていた。補給のため浮上し、給油ハッチを開けた時、人知れず泳

ぎ着いた部隊により、いとも簡単に掌握されてしまった。補給船は、急いで逃げ出そうとしたが、最新鋭の原潜、バハマに航路を塞がれ、あえなく捕獲されてしまった。しかも、ハリスへの緊急通信までもが、原潜バハマの妨害電波によって消し去られてしまった。

ジムは奪還成功の通信を受け、作戦開始の指令を出した。

「今が、チャンスだ。原潜の奪還はまだ知られていないはずだ。な
んとしても、知られる前に決着をつけるぞ」ジムの命令で、マーク
をはじめ、全員が素早く行動を開始した。そして輝にも、原潜奪還
の知らせは届けられた。兵士に礼を言くと、輝は素早く司令室に向
かった。既に行動を開始した司令室には、数人の兵士とジムだけが
残り、各部隊の交信に聞き入っていた。

「第一部隊配置完了」

「同じく第二部隊完了」

「第三部隊、まもなく到着」

「シーキャット、準備完了。作戦遂行の命令待つ」

「全部隊、作戦を遂行せよ」ジムは叫んだ。慌しい通信の合間を見
計らって、輝はジムに声をかけた。作戦開始の報告を受け、パッパ
ー達も司令室に集まってきた。

「司令官」輝の声にジムは振り向き、力強く頷いた。

「始まりました。ここからが正念場です」その言葉には、確固とし
た意志が含まれていた。

「お願いがあります」輝の言葉に、ジムは不思議そうに尋ねた。

「何でしょう」

「もう一度、ハリス少将と話せないでしょうか」ジムは驚いた。

「何か名案でも、ありますか」

「いいえ、しかしもう一度話して説得したいのです。それに話しを
していれば、通信中ハリスの行動は制限され、通信自体も制限され
ます。補給船からの連絡が無くて、不思議に思わないのではない
ですか」ジムはそれも名案だと思った。

「確かに彼を釘付けにできるし、気をそらす事もできる。襲撃成功

の可能性も数段上がる」パッカーも輝の策に賛成した。

「やはり、彼を……」杉本の質問を、ジムが遮った。

「お願いします。時間的な余裕もできるし、ハリスの居場所もはっきりします。それよりも、ハリスが説得に応じてくれれば、彼の友人としても嬉しい限りです。出来れば彼を殺したくはない」ジムの目には、一筋の希望が覗えたが、同時に、軍人としてなすべき事の重大さにも、意志を固めたようだった。こんな状態でも、友人を思うジムの気持ちに、輝は出来る限り応えたかった。間もなくしてスクリーンには、ハリスの無表情な顔が映し出された。

「なんだ、小生意気な日本人か」ハリスの口調は、それほど力強さを感じられなく、揺れる心を表していた。

「ハリス少将、気持ちは変わりませんか」輝は、単刀直入に尋ねた。「私の部下は、最後まで諦めないそうだ。意志は固いぞ」ハリスは、堂々とした日本人をじつと睨みつけ、次の言葉を待っていた。

「あなたの考えはどうですか、部下の気持ちに左右されるのですか」輝は挑発的に言い返した。しかし、ハリスはじつと輝を睨み続けた。どちらにしろ、ハリスは日本人に指示される気など、まったく無かった。

「あなたの気持ちの問題です。あなたから話せば、部下もきつと分かってくれるはずです」輝は更に言いつづけた。

「もう、そんな次元ではない」ハリスは、やっと重い口を開いた。

「我々は、一つの固い意志の元、集まったのだ。私でも、今変更は出来ない」その言葉には、ハリスの苦悩が含まれ、変更したくても、出来ないのだと、輝には聞こえた。

「ハリス、友人として最後の願いだ。考え直してくれ」輝の前に、ジムが割り込む形で進み出た。

「ああ、ジム。今でも友人と言ってくれるのか」ハリスの顔に、笑みが浮かんだ。

「当たり前だ。友情は変わっていないよ。君を助けたい、頼む」ハリスはジムの顔を静かに見つづけ、やがて冷静に話し始めた。

「ジム、その目障りな日本人を外してくれ。二人だけで話したい」
輝は、いやな顔一つせず、ジムに頷き、カメラの視界から外れた。
カメラの視界には、ジム一人が残された。

「さあ、二人きりだ。聞かせてくれ」ジムの言葉に、しばらく周囲を気にしたが、やがてハリスは頷いた。

「私は、間違っていたのだろうか。生意気だが、奴の言い分も理解できる、ただ日本人なんか指図されたくない。分かるだろう」
ハリスの言葉を、輝は部屋の隅で聞いていた。と同時に、ハリスの傾きかけた考えに、小さな希望も出てきた。

「ハリス、今は時代が違う。日本人とは対等なのだ。ここ数年、ただでさえアメリカは各国との摩擦が多い、これ以上の対立は避けてもらえないだろうか」ジムの悲痛な心の叫びが、ハリスにも伝わった。

「それはわかっている。しかし、もう一度アメリカがリーダーシップを取り戻さなくては、世界の国が好き勝手に動き出すのも事実だ。誰かが悪役に徹しても強行しなくては地球そのものが破壊される」
たしかに、二十世紀には、アメリカがリーダーシップを取っていた。しかし二十一世紀には入り、先進国の仲間入りした国は、当然のように自分勝手な主義、主張を言い張った。そして徐々に対外的にも脅威となる国も出てきた。ジムもそれは認めていたが、そうかと言って、ハリスが、いや、アメリカが悪役になる必要はないとも思っていた。

「確かに、国連に加入もせずにはいたい放題の国もある。各国の非難に耳を貸さずに核開発を行う国もある。民族紛争もエスカレートする一方だ。だが、なぜ君じゃなければいけないのか？なぜ今でなければいけないのか？諸外国ともっと平和的に話し合うべきではないか」ジムは、心から平和を望んでいた。パツカーも政治的意見を言いたかったのか、一歩踏み出した。しかし、輝に止められ、カメラ視界に入る事はなかった。

「人種の壁は厚いと言うことさ。宗教の壁もまた然り。私は単なる

きっかけにすぎん。現に今でも東西零戦は、根深いところで残っている。闘いは人間の、いや、動物の自然の摂理なのだ」ハリスの、諦めにも近い言葉が返ってきた。その時、ハリスの元に一人の兵士が近づき、何やら耳打ちし始めた。

「原潜まで奪還したか」ジムに語りかけたハリスの目には、怒りの色はまったく見えず、変わりに安堵の色が浮かんでいた。

「そう言うことだ。君の持ち駒は既がない。最後の願いだ、諦めてくれ」

ジムは最後の賭けに出た。しかし、ハリスは笑いながら答えた。

「もう遅い。今更昔の私には戻れん。だがジム、最後までありがとう」そう言っ、ハリスは小さなボックスを取り出した。ジムには、そのボックスの正体が、すぐに呑み込めた。核爆弾の起爆装置。慌ててジムが叫んだ。思わず輝も叫びそうになったが、かろうじて押さえた。

「早まるな、ハリス。やめろー」輝達も固唾を飲んで見守っていた。しかしジムの声は、スピーカーから流れる銃声にかき消された。そしてスクリーンには、椅子にもたれ、息絶えたハリスが映し続けられた。本当は世界平和を願っていたハリスの死に、輝もジムも、そこに居た全員が、流れる涙を拭いきれなかった。やがてハリスの部下も、徐々に鎮圧され、世界は秩序を取り戻していった。しかし、その為に払った犠牲は、余りにも大きすぎ、いつ又同じようなことが起きるかは誰にも分からなかった。

危機と不安（後書き）

今の日本は経済的にもおかしな国だ。毎秒200万円の借金が生まれているのだ。その日本が、国を明け渡すなど有り得ないとも言いきれないのではないだろうか。そんな発想から生まれた小説ですが、海外からは海の資源を狙っているところもあります。侵略こそありませんが、常に危機と接しているのでは思います。長い話ですが読んで頂いて感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2654d/>

危機

2010年10月24日22時40分発行